1節 放送番組の編成

国内放送番組編集の基本計画

「平成24年度（2012年度）国内放送番組編集の基本計画」は，放送総局内で議論を重ねたうえ，編成局で原案を作成した。この原案を理事会で決定し，12月，中央番組審議会に諮問，答申を得たうえ経営委員会で決定した。

以下はその原文である。年表示は西暦にし，記号などは本書の方式に合わせた。

Ⅰ．編集の基本方針

2011年３月，日本は東日本大震災という未曽有の大災害を経験し，多くの尊い命や，多くの方々の生活の基盤が失われました。そして，地域の復興に向けた新しい街づくりや防災体制の強化，原発事故後の放射能汚染対策など，今なお，多くの課題に直面しています。海外では，北アフリカ諸国での独裁体制が崩壊し，ギリシャの国家財政破たんの危機は，世界や日本の経済を大きく不安定化させています。

一方，日本の被災地の中では，一人ひとりが自発的に助け合う優しさと前に進もうという力強さが生まれています。日本各地，世界各国から，被災地の復興を願う温かい支援も届いています。こうした中で，喜びと希望に満ちた，そして，あらゆる地域と世代の活力と潜在力を結集した日本の再生に向かい，率先してその一翼を担うべく，NHKはこれから始まる３か年の経営計画を策定しました。

12年度国内放送番組の編集にあたっては，まず，国民の命や安心を守るために，放送やデジタルサービスを通して，できる限りの貢献をします。情報の提供にとどまらず，被災地の方々の心を癒やし，復興を支え，日本の各地域を活性化し，元気にする放送を増やします。

テレビ放送は，13年２月１日に放送開始から60年を迎えます。メディアを取り巻く環境が変わっても，幅広い世代に親しまれる番組をお届けすることは公共放送の重要な使命です。激動する世界の政治や経済の動きが日本の国民の暮らしにどのような影響を与えるのかを深く伝えるとともに，あらゆる方々にNHKが“役に立っている”と思っていただけるよう，多様な関心に応える番組をそろえていきます。

12年度はオリンピックロンドン大会の年でもあります。充実したオリンピック放送をはじめとするさまざまなサービスを通して，日本中に希望と元気をお届けします。

Ⅱ．編集の重点事項

１．国民の生命と財産を守る正確で迅速な報道

国民の生命・財産を守るという公共放送NHKの重要な使命を果たすため，正確で迅速な報道に万全を期し，防災・減災につながる情報にいっそう力を入れます。経済の長期低迷，国際的地位の低下など，日本が抱える課題に真正面から取り組み，ギリシャに端を発した経済問題や，アメリカ大統領選挙をはじめとする世界各国での選挙や政治の動きなど，世界の動きが国民の暮らしにどのような影響を与えるかについても詳しく多角的に伝えます。また，平日深夜にはインターネットの機能を活用したニュース番組を新設します。

２．東日本大震災を検証し，復興を支援する番組

東日本大震災や原子力発電所事故がもたらした教訓を検証する大型の調査報道番組を制作し，加えて災害の映像や復興の記録のアーカイブス化にも取り組みます。さらに，復興へ向けての課題を探る番組や，生活再建へ向けて歩み出した人々の姿を伝える番組を通じて被災地の現状を伝えるとともに，被災地の方々の心を癒やし，励ます番組や元気づける取り組みで復興を支援します。

３．幅広い視聴者層に親しまれる番組

幅広い年代の興味に応える工夫を凝らします。総合テレビジョンでは，週末を中心に家族で楽しめる番組を強化するとともに，平日午後には視聴者参加型のクイズ番組を新設します。教育テレビジョン（以下，Eテレ）では，“ティーンズ層”の話題となる番組を在宅率が高くなる平日の夕方に編成するなど，青少年へ向けた番組をさらに強化します。ネットラジオの開始で聴取環境が大きく変わった音声放送においても，青少年に親しまれる，インターネットと連動した番組などを編成して聴取者層の拡大を図ります。

４．新たな時代に突入した衛星放送のさらなる定着

11年10月に民間放送のチャンネル数が大幅に増加した衛星放送は“大競争時代”に突入しました。NHKではBS1を“国際情報・スポーツ情報”，BSプレミアムを“本物志向の教養・娯楽”チャンネルとして，高画質のハイビジョン２波に再構築し，衛星放送の新たな時代をけん引してきました。さらなる発展を目指し，BS1では，デジタル化のメリットを最大限に生かし，同一時間帯に複数の番組を放送するマルチ編成などでサービスの強化に努めます。BSプレミアムは，見応えのある個性的な定時番組とダイナミックな特集編成で，これまで以上に受益感の大きなチャンネルとして定着を図ります。

５．世界に通用する質の高い番組

大英博物館の未公開の収蔵品を通じて古代史の謎を解き明かしていくシリーズをはじめ，宇宙と地球の間に広がる不思議な空間を，世界で初めて超高感度カメラでとらえた『宇宙の渚（なぎさ）』の続編を制作するなど，良質でスケール感のある企画で存在感を示します。海外の放送機関と連携した国際共同制作を強化し，海外マーケットを意識した番組の開発や展開を通じて，世界に通用する大型番組を制作します。また，先鋭的な演出にも果敢に挑戦し，視聴者の感性を刺激するような番組も開発していきます。

６．“放送局のちから”を深化させた地域放送の充実

地域の再生や活性化へ貢献するため，広がる格差，雇用，観光，教育，医療，福祉，農業など，地域社会が抱える問題と向き合います。全国の放送局は，それぞれの地域の特性や視聴者の関心に応じた，多様なサービスを展開します。

効率的でより多様な地域ニュースや番組の展開を図るため，全国の放送局間で取材した映像を自由に交換できるシステムの検討などを進めます。また，地域を舞台にしたドラマ制作などを強化して，全国に発信します。

さらに，全国の放送局のホームページを“地域の安全･安心を守るポータルサイト”と位置づけ，自治体などとの連携も図りながら安全・安心につながる情報を強化します。

７．放送と通信の融合時代にふさわしい新たなサービスの展開

放送・パソコン・携帯電話の“3-Screens展開”をさらに深化させます。スマートフォン利用者の急速な拡大など，放送以外の新たなメディアは，もはや生活に欠かすことのできないものとなっています。このような流れをとらえて，放送の視聴意欲を高める動画コンテンツの展開や，視聴者参加型コンテンツの拡大などに力を入れ，NHKとの接点の少ない若年層などへ積極的にアプローチします。あわせて，有料動画サービス「NHKオンデマンド」の魅力を高め，利用者の拡大を目指します。

８．オリンピックロンドン大会およびパラリンピック放送の実施

オリンピックロンドン大会（12年７月28日～８月13日・日本時間）にあたっては，それぞれの波の特長を生かし，インターネットやデータ放送などとも連携しながら，注目の選手や競技の情報を多角的に伝え，視聴者の高い関心に応えます。

ロンドン2012パラリンピック大会（12年８月30日～９月10日・日本時間）でも，関連番組を含めて競技の模様を伝えます。

９．“人にやさしい”放送・サービスの拡充

字幕放送･解説放送･手話など“人にやさしい”放送･サービスをさらに推進します。字幕放送は，長期計画に基づき，総合テレビジョンの平日午後の生放送番組に新たに字幕を付与するなど，拡充を図ります。また，解説放送についても新たに策定した長期計画のもと，サービスの充実に努めます。

以上の重点項目の実施にあたっては，以下のような施策も勘案しながら，創造的で活力に満ちた取材・制作体制を構築します。

○限られた経営資源を効率的・効果的に活用する制作体制を構築します。

○放送倫理やコンプライアンス意識の徹底，人材の育成に力を入れ，確かな情報と質の高い番組の提供に努めます。

Ⅲ．各波の編集方針

１．総合テレビジョン

総合サービス波として，国民生活に必要不可欠なニュース・情報番組や創造的な文化，教養，娯楽番組などの調和ある編成を行います。さらに，震災後の日本の課題を考える番組や，国民の安全・安心を守る番組を発信します。また，世代を超えて共に楽しめる“NHKだからできる放送”のさらなる充実を図ります。地域放送については，全国への発信も含めていっそうの強化を図ります。

〔放送時間〕

○１日24時間放送を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，教養番組20%以上，教育番組10%以上，報道番組20%以上，娯楽番組20%以上を編成します。

２．Eテレ

Eテレは“未来を志向する”チャンネルとして，主に“未来を生きる子どもたち”“明日を担う若者”を対象とした番組を強化します。また，引き続き「大きく伸びろ！子どもたち」「ともに生きる社会」「心豊かな暮らし」を３本柱のテーマとして，より広い視聴者の期待と要望に応えるとともに，定時マルチ編成を実施します。ワンセグ放送では同じ内容を同時放送しつつ，週末・深夜を中心に独自サービスを行います。

〔放送時間〕

○１日20時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，教養番組15%以上，教育番組75%以上，報道番組若干を編成します。

３．BS1

“世界の今を伝える国際情報”，“生放送にこだわったスポーツ”，“報道の背景を深く掘り下げる番組”を中心とした編成で，独自性をより際立たせます。特にスポーツソフトは，常に視聴者の意向をにらんだ，柔軟で機動的な編成を行います。さらに，デジタル化のメリットを最大限に生かして，スポーツ中継の延伸時のみならず，同一時間帯で複数番組を編成するなど，マルチ編成の活用を進め，視聴者の利便性をさらに向上させます。

〔放送時間〕

○１日24時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，教養番組20%以上，教育番組10%以上を編成します。

４．BSプレミアム

“本物志向の教養・娯楽チャンネル”として，多彩な分野の良質で，個性的な定時番組を編成し，従来の視聴者の充足を図りながら30～50代，とりわけ女性を中心とした視聴者の期待と関心に応えます。また，圧倒的な訴求力と話題性を持った大型企画番組やダイナミックな長時間特集を編成し，BSプレミアムの存在感を高め，新たな視聴者の獲得を目指します。先進的な演出方法やテーマに挑戦し，新たなテレビ文化の創造に貢献します。

〔放送時間〕

○１日24時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○特に定めない。

５．ラジオ第１放送

生命や暮らしを守る“安心ラジオ”として，ニュース・報道番組を充実させます。生放送を中心とした編成で，災害などの緊急時には，迅速に情報を伝えます。

インターネットや携帯端末などを通して，聴取者の声を取り入れる双方向の番組づくりに努め，身近なメディアとしての存在感を高めます。ネットラジオを活用して，放送と通信の融合時代にふさわしい番組の開発を進め，若い世代へ聴取者層の拡大を図ります。

〔放送時間〕

○１日24時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，教養・教育番組あわせて25%以上，報道番組35%以上，娯楽番組20%以上を編成します。

６．ラジオ第２放送

ラジオ第２放送は，放送を開始して80年を越え，ネットラジオもスタートするなど，新たな時代を迎えました。これまで以上に時代に即した“生涯学習波”として，さらなる質の向上を図ります。中核である語学番組は，学習者の利便性を考慮したラインナップに組み直し，新たな英語番組も開始します。福祉番組や国際放送と連動した番組もリニューアルを図ります。

〔放送時間〕

○１日19時間を基本とします。
〔放送番組の部門別編成比率〕
○定時番組について，教養番組15%以上，教育番組65%以上，報道番組10%以上を編成します。

７．FM放送

“総合音楽波”として，優れた音質を生かした多彩な音楽番組や，音楽ファンの期待に応えるユニークな特集を編成します。インターネットを通したサービスの充実に取り組み，ネットラジオの聴取者層をさらに広げます。

災害など緊急時には，地域情報波としてラジオ第１放送と連携して機動的な編成を行うなど，きめ細かな情報を提供します。

〔放送時間〕
○１日24時間を基本とします。
〔放送番組の部門別編成比率〕
○定時番組について，教養・教育番組あわせて40%以上，報道番組10%以上，娯楽番組25%以上を編成します。

放送番組の改定

Ⅰ．４月の番組改定

１．総合テレビジョン

（１）夜間の報道・情報番組を充実

金曜の午後10時には，生放送の新情報番組を新設した。午後11時台には，仕事を終えた人たち向けに１日のスポーツの結果や日本と世界の経済の深層をコンパクトに伝える『Sportsプラス』『Bizプラス』，また午前０時台には『NEWS WEB 24』など，深夜帯の報道番組の充実・強化を図った。

（２）親子が共に視聴できる番組の充実

土曜午前９時台に『アニメ　銀河へキックオフ!!』を新設したのに加え，木曜午後８時台の『仕事ハッケン伝』を刷新した。さらには土曜午後７時台の特集番組など，子どもとその親がそろって楽しめる番組の充実に努めた。

（３）地域を支援し，視聴者と直接向き合う番組の充実

平日午後１時台に，視聴者参加型のクイズ番組『連続クイズ ホールドオン！』を新設した。また，昼の時間帯には，全国各地から生中継で伝える『ひるブラ』のほか，『スタジオパークからこんにちは』を刷新，日曜の『NHKのど自慢』などとともに視聴者と直接ふれあうことのできる番組をそろえた。

（４）東日本大震災を検証し，復興を支援する番組

東日本大震災や原子力発電所事故を検証し，将来の防災・減災に役立つ番組を日曜午前10時台に新設した。また，被災地応援キャンペーンを展開，復興に役立つニュース・番組を通して，被災地を元気づけるよう取り組んだ。

（５）大型番組のさらなる強化

未曽有の大震災に見舞われた日本の抱える課題や今後の選択肢を考える『NHKスペシャル　シリーズ日本新生』を引き続き制作したほか，オリンピックロンドン大会や，日中国交回復40年に関連した強力なシリーズ企画を積極的に展開した。

２．Eテレ

（１）夜間７時台をティーンズゾーンとして強化

ローティーンからハイティーンの視聴者獲得に向けて，平日午後７時台を充実させた。

『Rの法則』は中高生の視点で伝えるニュース，すぐに役立つ勉強法や世界の高校生事情などを紹介する番組として放送枠を月～木に拡大。また，10代が成長していくうえで知っておきたい情報を伝えるライフリテラシー番組『オトナへのトビラTV』，大きな夢や目標に挑む10代のチャレンジャーを視聴者とともに“応援”する『ティーンズプロジェクト　フレ☆フレ』を新設した。

（２）夜間編成（８時～11時台）の強化

障害者・高齢者だけでなく「生きづらさ」を抱える全ての人に向けた福祉番組『ハートネットTV』，健常者と障害者が本音をぶつけて理解を深める『バリバラ～障害者情報バラエティー』を新設。また，団塊の世代を対象にしたライフスタイル提案番組『団塊スタイル』，実践的な趣味実用番組『趣味Do楽』，クラシックの魅力を分かりやすく伝える『ららら♪クラシック』など，大人が楽しめる番組を充実させた。

（３）夜間11時台は20代・30代を意識した若年層強化ゾーン

夜間11時台は20代・30代の知的好奇心を刺激するラインアップを目指し，世界の最先端の人々の魅力的なプレゼンを紹介する『スーパープレゼンテーション』，経済の原理を分かりやすく伝える『オイコノミア』を新設。第一線で活躍する女性の現場を松任谷由美が訪ねる『ユーミンのSUPER WOMAN』も放送した。また，被災地復興の担い手となる人材を番組の中で育てていく

『東北発☆未来塾』を新設した。

（４）グランドデザインに基づく英語番組の整理

小学生向けの『プレキソ英語』に続く中学生向け英語番組『テレビで基礎英語』，大人の初級者が実用的な英会話を学べる『おとなの基礎英語』を新設し，子どもから大人までレベルに合った英語番組を選択できるよう整備した。リトル・チャロシリーズは東北を舞台にした日本語アニメとして放送した後，『３か月トピック英会話』の中で英語版を放送し，英語教材としても活用した。

（５）アーカイブス番組の積極的な活用

過去にEテレで放送した番組の中から選（よ）りすぐった作品をテーマを設定して放送する『Eテレアーカイブス』，Eテレポータルサイトに寄せられた視聴者からのリクエストを基に再放送番組を決定する『お願い！編集長』など，アーカイブス番組を有効活用する番組枠を新設した。

（６）その他

データ放送の双方向機能で投票する視聴者の反響を基に，ワンセグ放送で定時化するコンテンツを決定する『青山ワンセグ開発』など，実験的な試みに挑戦。長年放送している囲碁将棋講座番組を『将棋フォーカス』『囲碁フォーカス』の２番組に分け，囲碁将棋ファンも初心者も楽しめる番組として刷新した。アニメゾーンでは双方向番組として定着した『アニメ　ファイ・ブレイン～神のパズル』の第２シリーズや，1990年に放送した『アニメ　ふしぎの海のナディア』のデジタルリマスター版を放送した。

３．BS1

（１）金曜夜間に特集番組枠を新設

金曜午後11時台から午前０時台にかけて特集フリーゾーン『BS1スペシャル』を新設し，グローバルな課題やスポーツ関連など，BS1ならではのテーマを扱った多様な特集番組を放送した。ロンドンオリンピックの事前特集や『ワールドWave トゥナイト』のスペシャルでは，総合テレビと連携した編成にも取り組んだ。

（２）スポーツ放送の充実・強化

スポーツ中継を柔軟かつ機動的に編成し，幅広い視聴者の期待に応えるべく努めた。特にMLBやプロ野球の複数カード同時放送，102チャンネルでの大相撲の幕下取組の放送など，マルチ編成の活用を積極的に進めた。

視聴者層の拡大を目指し，スポーツ情報番組の充実も図った。日曜午後９時には２つのスポーツ情報番組を新設。『古田敦也のスポーツ・トライアングル』では，ハイスピードカメラをはじめとするNHKが誇る特撮ノウハウを駆使し，日本のアスリートたちを徹底分析した。一方，月１回程度編成した『ラン×スマ～街の風になれ』では，ランニングの楽しみ方や魅力をビギナー向けに伝えた。また，月曜午後８時には『アスリートの魂』を編成。トップアスリートに密着し，極限の鍛錬や知られざる日常，逆境に立ち向かう姿などを伝えた。

（３）週末夜間と朝の国際情報の強化

『ドキュメンタリーWAVE』を土曜午後10時台に移設し，より見やすい編成とするとともに同時間帯の他波との明確な差異化を図った。

また，『COOL JAPAN』を日曜午後11時台に移設し，10時台の『地球アゴラ』と併せて若年者向けゾーンと位置づけ，強化を図った。

一方，日曜朝の『ワールドWave』を午前７時台に移設し，平日も週末も毎日，朝一番に国際情報を届けるゾーンとして強化した。

（４）国際放送との連携

引き続き平日午後２時台と土日の深夜を中心に，国際放送番組のショーウインドーゾーンを設け，在日外国人向けだけでなく，国内の視聴者にも幅広く見てもらうための編成を行った。

４．BSプレミアム

（１）夜11時台を女性視聴者の関心に応えるゾーンとして刷新

月曜から土曜の午後11時台に『連続テレビ小説～梅ちゃん先生』（再）を移設し，これまで見られなかった人たちにも視聴しやすくした。また，平日には『恋する雑貨』『写ねーる』など女性の関心の高いテーマの番組を新設して，日曜夜11時台には『晴れ，ときどきファーム！』を編成した。

（２）ドラマの充実

日曜夜間には30～50代の女性をターゲットにし，心に深く染み入る内容の『プレミアムドラマ』を新設して，“夫婦”や“家族”をテーマにしたドラマや日本各地を舞台にした地域発ドラマ，新しい演出手法で描くドキュメンタリードラマなどを編成した。

また，視聴者層の拡大を目指して，これまでに人気の高かった『連続テレビ小説～ゲゲゲの女房』『大河ドラマ～篤姫』や，サスペンスドラマの名作を放送した。

（３）土曜夜間に，訴求力のある大型特集番組などを新設

土曜夜間には，“これぞBSプレミアム”といえる圧倒的な訴求力と話題性を持った長時間の大型企画『ザ･プレミアム』を月に１回程度編成した。そのほか，超大作の映画を編成するとともに，一流のエンターテインメントを紹介する『ショータイム』の充実を図った。また，“旬の俳優”に密着する番組や，人気アーティストのライブ番組を新設した。

（４）平日夜９・10時台の刷新と良質で個性的な番組の充実・強化

継続番組の『極上美の饗宴』『旅のチカラ』『コズミック　フロント～発見！驚異の大宇宙』『新日本風土記』『J-POP青春の’80』は内容の充実を図るとともに，よりじっくりと見られる時間に移設した。また，『プレミアムシネマ』は，午後10時から午後９時に移設し，月曜は女性視聴者向けに，火曜は『山田洋次監督が選んだ日本の名作100本～喜劇編』として編成した。

（５）平日夜７・８時台を多彩な分野の番組で視聴者層を拡大

平日夜間は，ファミリー層を中心に視聴者層の拡大を目指して，午後７時台には旅番組・自然番組を新設し，８時台には『ザ少年倶楽部』や，『BS時代劇』を移設した。若年層から中高年層まで幅広い視聴者層に満足していただける番組を編成した。

（６）幼児・子どもに向けた番組を充実・強化

日曜午前８～９時台には，ワンワンやパッコロリンなどの人気キャラクターが登場する『ワンワンパッコロ！キャラともワールド』を編成した。月曜から金曜の午後０時台に幼児・子ども向け人気アニメを編成するとともに，午後６～７時台には親子で楽しめる動物番組やアニメ番組を編成した。

５．ラジオ第１放送

（１）土日夜間に若者向けの番組を集中編成

ラジオ離れが懸念される若年層に向けたゾーンとして，土日夜間を刷新した。土日夜９～11時台には，生放送で中高生とつながり，その本音と向き合う『wktk（ワクテカ）ラヂオ学園』を新設した。さらに，『AKB48の“私たちの物語”』『上地雄輔のラジ音！』『渋谷アニメランド』『エレうた！』などの番組を移設し，土日夜間に若者向け番組を集中編成した。

（２）平日午前に大型の生活・文化情報番組を新設

平日午前８～11時台に，30～40代の女性に向けて生活情報や文化情報を提供するワイド番組『すっぴん！』を新たに編成した。

（３）平日夜９時台に女性向けの２番組を新設

月曜夜９時台に，女性に人気のパーソナリティーを起用したFMの番組『石丸幹二のシアターへようこそ』を再放送するほか，女性精神科医が心のリフレッシュにつながるトークと音楽を届ける『香山リカのココロの美容液』を新設し，女性リスナーの拡大を図った。

６．ラジオ第２放送

（１）語学講座の充実・刷新

１日わずか10分×週５日のレッスンで，中学生時代に学んだ英語を使って気軽に会話できる力を身につけることを目指す『英会話タイムトライアル』を新設。過去の講座をアンコール放送する『アンコールまいにち中国語』『アンコールまいにちハングル講座』を刷新し，入門編の講座を修了したリスナーがさらに学習を進めるための講座『レベルアップ　中国語』『レベルアップ　ハングル講座』を新設した。

（２）テレビ番組との連動

Eテレでスタートした『バリバラ～障害者情報バラエティー』と連動する『バリバラR』を新設。テレビではなかなか語れない親子や夫婦間の葛藤や恋愛の悩みなど，障害者の本音を引き出しながら，社会の問題や生きるヒントを伝えた。

（３）その他

『中文日本百科』の後続として，政治・経済や観光地の情報など，多角的に日本の姿を伝える『中国語“日本ジャーナル”』を新設。国際放送番組を活用し，国内の聴取者や在日外国人に向けたサービスの向上を図った。

７．FM放送

（１）日曜午後のライフスタイルに合う番組を新設

日曜午後に，初心者にも分かりやすくクラシックを紹介する『きらクラ！』，40～50代に人気の高い80年代の洋楽ポップスをお届けする『洋楽80’sファン倶楽部』，歌手の島袋寛子さんが国内外の女性ボーカルを紹介する『ミューズノート』の３番組を新設。レジャーの行き帰りなどに気軽に楽しめる時間帯として充実させた。

（２）クラシック番組の個性の明確化

数多いクラシック番組の差別化を図った。平日９時台には，紀行エッセイのように国内外の音楽の旅を楽しむ『音楽遊覧飛行』を新設。金曜午後には，オペラの歌曲をノーカットで聴かせる『オペラ・ファンタスティカ』を編成した。さらに，日曜夜７時台には，オーケストラ鑑賞の入門番組である『ブラボー！オーケストラ』，８時台には，クラシック界の新星のフレッシュな演奏を紹介する『リサイタル・ノヴァ』を編成した。

Ⅱ．年度途中の新設番組など

１．総合テレビジョン

（１）新設番組

後半期の改定では，月曜夜間に『ファミリーヒストリー』（10月１日～），木曜夜間に『地球イチバン』（10月18日～），『あなたが主役　50ボイス』（10月４日～）を編成したほか，日曜深夜に『ディープピープル』（10月22日～）を新設した。

（２）ドラマの新シリーズ

『連続テレビ小説』では「純と愛」（10月１日～），『大河ドラマ』では「八重の桜」（１月６日～）を放送した。毎週火曜夜の『ドラマ10』では「シングルマザーズ」（10月23日～），「いつか陽のあたる場所で」（１月８日～）などを，同じく火曜の『よる☆ドラ』では，「眠れる森の熟女」（９月４日～）や「恋するハエ女」（11月６日～），「書店員ミチルの身の上話」（１月８日～）などを編成した。また，木曜午後８時台に時代劇シリーズを新設し，『薄桜記』（10月18日～），『塚原卜伝』（１月24日～）などを放送した。

２．Eテレ

10月の改定では，海外ドラマ『アイ・カーリー』の後続として『ビクトリアス』を新設したほか，『glee』に引き続いて第２シリーズ『glee2』を放送した。若者向けの音楽教養番組としては『佐野元春のソングライターズ』（10～12月），『スコラ　坂本龍一　音楽の学校』（１～３月）を放送した。

アニメについては，『アニメ　バクマン。』の完結編となる第３シリーズを放送。また，『リトル・チャロ　東北編』の後続として，ワンセグ２で反響の大きかった『モタさんの“言葉”』を放送した。

３．BS1

野球のシーズンオフや欧米の冬時間等に伴い，11月５日以降，一部改定を実施した。

夜間のスポーツ編成時間帯を午後７～９時台に変更。月曜の『PGAゴルフツアー』は午後７～８時台とし，『アスリートの魂』を午後９時台に移設した。この変更により，午後６時台には『BS世界のドキュメンタリー』の再放送等を編成。日曜午後６時台には地域に根差したスポーツにもスポットを当てた『BS1スポーツドキュメンタリー』を新設し，地域放送局からも提案を募った。

また，日曜午後９時台の編成を変更し，月１回程度放送していた『ラン×スマ～街の風になれ』の内容時間を25分とし，毎週の放送とした。併せて午後９時25分からは，特集番組として随時放送してきた『アジアで花咲け！なでしこたち』を新たに定時番組とした。

朝の時間帯については，欧米の冬時間スタートに伴い『ワールドWaveモーニング』を午前６～７時台から７時台のみに変更した。また，日・月のPGAライブは午前６～７時台に編成し，日曜の午前５時台には『ラン×スマ～街の風になれ』と『アジアで花咲け！なでしこたち』の再放送を編成した。

４．BSプレミアム

10月の改定では，火曜夜間に『イッピン』（10月２日～），水曜夜間に新しい歴史番組『ザ・プロファイラー』（10月３日～），女性たちを応援する美容情報番組『女神ビジュアル』（10月３日～），木曜夜間に海外ドラマの新シリーズ『グッド・ワイフ３』（10月４日～），金曜夜間に『世界遺産時を刻む』（10月５日～），土曜夜間にはリラックスして楽しめる連続ドラマ『プレミアムよるドラマ』などを新設した。

親子で楽しめる新番組として，『アニメ　アルプスの少女ハイジ』（10月３日～），『アニメ　おしりかじり虫』（10月７日～），『おしりキッズ』（10月７日～）を新設した。

５．ラジオ第１放送

プロ野球ナイトゲームの終了に伴い，木・金曜の午後８～９時台の編成を刷新した。木曜は，桐島かれんさんが多彩なゲストとライフスタイルを語る『かれんスタイル』を放送。金曜は，昨年度に続き『いとしのオールディーズ』を編成し，洋楽ファンの要望に応えた。

国内放送番組審議会

放送番組審議会は，放送事業者に対して放送法で設置が義務付けられている法定の審議機関である。NHKは国内放送に関わる「中央放送番組審議会」と８つの「地方放送番組審議会」，国際放送に関わる「国際放送番組審議会」を設置している。

番組審議会は，放送番組の適正を図るための自律措置として設けられているものであることから，委員の人選にあたっては学識経験者などの中から，社会動向や属性など全体の調和を考え，視聴者の意向が的確に反映されるよう，幅広い観点から委嘱を行っている。委員数は，13年３月現在で中央審議会は15人，地方審議会は９～12人で組織している。会議は，毎月１回の定例開催日に議題を設けて実施している（８月は休会）。会長の諮問に応じて全国向けの「国内放送番組編集の基本計画」と各地域向けの「地域放送番組編集計画」について審議し，答申したほか，番組全般について意見交換を行った。

１．中央放送番組審議会

中央放送番組審議会は，12年度中に11回開催し，会長の諮問により，12月に「平成25年度国内放送番組編集の基本計画」について審議し答申したほか，広く国内放送番組全般について活発な意見交換を行い，放送番組への反映を図った。

また，５月に11年度下半期，11月に12年度上半期の国内放送番組の種別の実績，種別ごとの放送時間について報告した。

12年度中の主な議題は次のとおり。

４月　『ららら♪クラシック～ベルリン・フィルの樫本大進　登場！』について
５月　国内放送番組の種別の実績，種別ごとの放送時間（11年10～12年３月）について
６月　経営計画における「達成状況の評価・管理」について～試行～
７月　経営計画における「達成状況の評価・管理」（12年度第１四半期・４～６月）について
９月　12年度後半期の国内放送番組の編成，ロンドンオリンピックとメディア利用について
10月　経営計画における「達成状況の評価・管理」（12年度第２四半期・７～９月）について
11月　国内放送番組の種別の実績，種別ごとの放送時間（12年４～９月）について
「平成25年度国内放送番組編集の基本計画」（案）について
12月　「平成25年度国内放送番組編集の基本計画」（案）について－諮問－，『NHKスペシャル』「中国文明の謎～第３集 始皇帝“中華”帝国への野望」について
１月　「平成25年度国内放送番組編成計画」，経営計画における「達成状況の評価・管理」（12年度第３四半期・10～12月），短歌de胸キュン冬の増刊号（後編）について
２月　『為末大が読み解く！勝利へのセオリースペシャル　世界とたたかう“逆転”の戦略』について
３月　『プレミアムドラマ　宮崎局発地域ドラマ』「命のあしあと」について

番組審議会の活動内容の公開については，各番組審議会の議事概要を毎月，放送やインターネットなどで公表しているほか，各放送局で議事概要の備え置きを実施するなど積極的に行っている。

２．地方放送番組審議会

全国８つの地域ごとに「地方放送番組審議会」が設けられ，各地域の放送番組の基本方針を審議している。

12年度中に各地域とも11回開催し，会長の諮問に応じて「平成25年度各地方向け地域放送番組編集計画」について審議し答申したほか，番組全般について意見交換し，その適正化を図った。

２節 放送番組の制作

報道・スポーツ番組

Ⅰ．取材・制作・放送システム

東日本大震災の経験を踏まえ気象庁発表の地震・津波情報から，アナウンサーが読む原稿を自動的に表示する原稿支援システムの放送局への配備を進めるとともに，気象庁が2013年３月から運用を開始した新しい津波警報への的確な対応を行った。大規模ハイビジョンサーバシステムの運用を段階的に拡大し，効果的なニュース制作・送出業務への移行に取り組んでいる。

１．ニュース取材・制作設備

収録・編集から送出・保存まで，報道情報システムと連携してニュース映像を取り扱うことができる大規模なハイビジョンビデオサーバシステムを，11年度のBSニュースセンターに続き，11月以降，ニュースセンターでも段階的に運用を開始した。引き続き，ニュース・報道番組の充実・強化に資するよう，完全テープレス化に向けたシステム運用の拡充と機能改善を進めている。

また，これまで紙を使用していたテロップなどアート素材の発注を報道情報端末上から行える仕組みを導入し運用を開始した。これにより，アート発注のペーパレス化を図るとともに，より迅速なアート素材の制作・送出を実現した。

海外総支局の設備整備について，12年度は，老朽化が進んだ中国総局ハイビジョン伝送設備，ウラジオストク支局の伝送設備，各総支局のハイビジョンモニターの更新を行い，信頼性に加え運用性の向上を図った。また，米ABCからの配信素材がサラウンド化されたことに合わせて，アメリカ総支局に音声変換装置を新規に整備した。さらに，海外の一部放送機関がファイルベースによる素材交換に移行することを受けて，アメリカ総局とソウル支局にファイルベース録再機を導入した。これらの対応により，海外総支局における機材・設備の安定運用と国際情報の発信力強化を図った。

２．緊急報道設備

12年６月に国土交通省のXバンドレーダーを利用した，より細かい雨雲や降雨の状況を作画するシステムを開発し運用を開始した。

13年３月７日に気象庁は新しい津波警報の運用を開始した。新しい津波警報は地震の規模がマグニチュード８を超えるような巨大地震の場合，地震の規模がすぐ分からないため，津波の予想高さを「巨大」「高い」といった定性的な表現で発表，予想高さを数値で発表する場合も従来の８段階から５段階に変更された。また，沖合の津波に関する情報の発表も新たに開始された。これらの情報を的確かつ分かりやすく視聴者に伝えるため，地震・津波情報処理用のデータベースを更新するとともに，津波の予想高さや観測値を伝える画面の色の変更を行い，より見やすい画面に改善した。速報スーパーについては重要な情報には紫色の装飾をして強調して表現できるよう改修した。新しい沖合の津波情報については専用の作画装置を整備した。また，地震・津波発生時に気象庁の発表データによりアナウンサーが読む原稿を自動的に表示する原稿支援システムも更新し，新しい津波警報への対応と設備の安定性を高めた。原稿支援システムは，東日本大震災の検証から全国の放送局へも整備を行った。

３．報道情報システム

報道情報システムは，ニュース原稿の作成から制作，送出までを担うNHKの報道を支える基幹システムである。多くのホストコンピューターとサーバ群を中核とした大規模なネットワークシステムである。

本部ニュースセンターのハイビジョンビデオサーバシステムの総合テレビでのニュース制作・送出の開始に合わせて，多数の報道情報端末にサーバ映像の試写とテロップの電子発注ができるアプリケーションを導入し，迅速なニュース制作が行える環境を整えた。

Ⅱ．緊急報道

12年度も東日本大震災の余震が相次ぎ，12月には宮城県で１m近い津波を観測する地震が起きた。また竜巻や大雨，猛吹雪による被害が各地で相次いだ。NHKはいずれの災害に対しても公共放送として国民の生命・財産を守る立場から被害の軽減や復旧に役立つ放送に組織を挙げて取り組み，「正確」「迅速」「分かりやすさ」を基本に緊急報道を展開した。

１．自然災害

（１）地震・津波

12年４月から13年３月末までに震度５弱以上を観測した地震は12回あった。このうち東日本大震災の余震とみられる地震は７回で，震源域とその周辺で地震活動が活発な状態が続いた。

12月７日の三陸沖を震源とする地震（マグニチュード7.3）では，宮城県に津波警報，青森県太平洋沿岸・岩手県・福島県・茨城県に津波注意報が発表され，宮城県石巻市鮎川で98センチの津波が観測された。１人が死亡，15人がけがをした（総務省消防庁）。この際NHKは，東日本大震災後に改善した，強い調子で避難を呼びかけるコメントや「津波！避難！」と大きくスーパーした画面などを初めて実際に放送した。

海外の地震による津波注意報も２回発表された。８月31日のフィリピン諸島付近を震源とする地震（マグニチュード7.6）では，東北地方から沖縄県にかけての太平洋岸に津波注意報が出され，各地で５～50センチの津波が観測された。２月６日の南太平洋・サンタクルーズ諸島を震源とする地震（マグニチュード8.0）では，北海道から沖縄県にかけての太平洋沿岸などに津波注意報が出され，３～40センチの津波が観測された。総務省消防庁によると，いずれも津波による被害は確認されなかった。

（２）茨城県つくば市で竜巻発生

５月６日午後０時30分ころ，茨城県つくば市で竜巻が発生した。総務省消防庁によると，つくば市で１人が建物の下敷きになって死亡し，住宅76棟が全壊，158棟が半壊した。竜巻による被害の範囲は，長さ17キロ，幅500メートルにわたった。気象庁は竜巻の強さを，国際的な尺度「藤田スケール」で６段階の上から３番目の「F3」と推定した。「F3」は国内では最大級の強さ。当時，上空に強い寒気が流れ込み，大気の状態が非常に不安定となっていた。竜巻は，「スーパーセル」と呼ばれる巨大な積乱雲から発生した。

NHKは，「竜巻注意情報」をローカル速報スーパーして注意を呼びかけるとともに，全中特設ニュースなどで被害の状況を随時伝えた。

（３）九州北部豪雨

７月11日から14日にかけて，本州付近に停滞した梅雨前線に向かって，南から非常に湿った空気が流れ込み，九州北部を中心に大雨となった。熊本県阿蘇市乙姫では，１時間降水量が108ミリ，24時間降水量が507.5ミリとそれぞれ観測史上１位を更新した。この大雨で，河川の氾濫や土石流が発生し，総務省消防庁によると，熊本県阿蘇市で21人が死亡するなど，熊本，福岡，大分の３県で，30人が死亡し，２人が行方不明となった。また，住宅の全壊が363棟，半壊が1,500棟にのぼった。

７月12日午前６時41分には，気象庁が「これまでに経験したことのないような大雨」という表現を防災情報の中で初めて使い，大雨に対する予報担当者の強い危機感を伝えた。NHKは特設ニュースなどで繰り返し厳重な警戒を呼びかけた。

（４）北海道で猛吹雪

３月１日から３日にかけて，前線を伴った低気圧が急速に発達しながら北海道を通過した。北海道では各地で風と雪が強まり猛吹雪となった。北海道によると合わせて９人が死亡した。このうち中標津町では，家族４人が雪で埋まった車の中で一酸化炭素中毒のため死亡した。

湧別町では，猛吹雪の中，父親が小学３年生の娘をかばうように覆いかぶさった状態で死亡していた。父親がみずから犠牲になって娘を守ったことに対して，全国から励ましの手紙が寄せられた。

２．映像取材体制

（１）航空取材の基地・機体の体制

12年度は，札幌，仙台（花巻空港で運用），東京，静岡，名古屋，大阪，福岡の７基地で中型機を，新潟，広島，高松，鹿児島，沖縄の５基地で小型機を運用した。これに全国支援と，機体の検査や整備時にバックアップする予備機を加えた12基地14機体制で全国の事件・事故や災害などの緊急報道に対応した。また，９月からは中国公船による尖閣諸島周辺の領海侵入に警戒して，同諸島の南に位置する下地島に中型機を常駐させた。さらに，12月からは，遠隔地や長距離の洋上飛行が可能な飛行機の優先契約を締結し，体制を強化した。

（２）東日本大震災への対応

震災２年目となる12年度も，東北３県への全国応援を継続した。原発事故の福島を含めた被災地へのカメラマン応援は，１年間におよそ3,400人日となり，２年間でのべ１万4,900人日に上った。

（３）首都直下地震等大災害に備える

大震災を教訓に，本部の首都直下地震対応資料（改訂版）を策定した。震度６弱を想定し，放送センター・放送技術研究所・千代田放送会館など，取材拠点への動員計画のほか，安否確認・映像伝送ツール・連絡手段などについて記載し，災害時に役立つマニュアルとした。

Ⅲ．選挙システム

選挙システムは，ホストコンピューターと全国のサーバー・端末などをネットワークで結んで出口調査や最新の開票データなどを集計し，当選確実の判定や，放送・インターネットなどの開票速報画面の作成などを行うものである。

12月の第46回衆議院議員選挙では，候補者情報を一元管理する候補者データベースで全国千数百人の立候補状況を管理し，公示日の候補者紹介等に活用した。投開票日の総合テレビでは，20時前より開票速報特別番組を編成し，注目された政権交代のもようを選挙システムと連動したバーチャルCGや大型タッチスクリーンでのキャスターゼスチャーによる動きのあるCG演出を用いて，リアルタイムかつ分かりやすく伝えた。BS1・R1・データ放送・インターネット・携帯コンテンツ等も選挙システムと結んで開票速報を実施。なおBS1では従来スタイルの開票速報を討論番組の一部として伝えるなど，メディア別で選挙報道演出にアレンジを加えた。またインターネットでは，全国各選挙区の詳細な開票状況を掲載し，テレビでは紹介できないきめ細かい情報提供に努めた。

Ⅳ．国際回線による映像伝送

海外からの中継や映像の伝送は，通信衛星や光ケーブルなどを使って行われている。

NHKでは，世界各地の紛争・災害，国際情勢，国際スポーツ大会，国際大型イベントなどを伝えるため，24時間体制で世界中から映像を受信している。

１．随時伝送と定時伝送

海外からの映像伝送は，ニュースや国際的なイベントなどでそのつど回線をつなぐ「随時伝送」と，海外の放送局が制作したニュース番組を決まった日時に受信する「定時伝送」とに大別される。

NHK海外総支局の取材体制強化やスポーツ映像の増加などを背景に，伝送量は年々増加，12年度は「随時伝送」と「定時伝送」を合わせた総件数は３万6,033件。11年度に比べて約4.5%の増加となった。総伝送時間は，３万8,003時間で，11年度に比べ７%増えた。

このうち「随時伝送」は，11年度と比べて約７%増加し，２万137件であった。増加の理由としては，ロンドン五輪，アメリカ大統領選挙，尖閣諸島・竹島問題，アラブ世界での反政府運動などがあげられる。

「定時伝送」では，アメリカのABCやCNN，イギリスのBBC，フランスのF2などが制作した欧米のニュース番組をはじめ，中国やフィリピン，ベトナムなど，アジア各国のニュース番組も受信している。特に重要な海外番組の受信としては，北朝鮮の国営放送・朝鮮中央テレビをはじめ，イラク問題など，中東情勢を伝える上で欠かせない情報源として，カタールの放送局「アルジャジーラ」の24時間受信を行っている。

NHKでは世界22の国と地域，29の放送機関から定量的に映像を受信している。

このうち定期的に映像を受信する「定時伝送」は，２万1,437時間で，総伝送時間の56%を占めており，１日当たりの平均受信時間は58.7時間となっている。

２．緊急報道

「随時伝送」の中でも最も重要なのが，緊急報道への対応である。

NHKの海外特派員や報道局の取材・中継チームは，世界各地で起きる紛争や事件・災害の現場に展開する。こうした緊急報道では，周辺の放送機関や映像通信社に協力を求めて衛星の伝送施設を借用したり，複数の衛星を組み合わせるなど，地域の通信事情を考慮しながら，東京までの伝送路を確保しなければならない。映像信号・圧縮形式／機材の違いなど回線接続が一筋縄では行かないことが日常的にある。このため専門チームが，24時間体制で，回線対応をし，現場の記者やカメラマンを支援している。

通信インフラが脆（ぜい）弱な現場については「フライ・アウェー」と呼ばれる小型の衛星通信地球局を持ち込んだり，「SNG（SATELLITE NEWS GATHERING）トラック」と呼ばれる車載型地球局を周辺国・地域から現地へ走らせることもある。08年５月の中国・四川大地震，それに，11年のニュージーランド地震では，「フライ・アウェー」を現地へ持ち込んで，迅速に回線を接続し，被災地の状況を鮮明な映像で世界に伝えた。

３．国際専用ハイビジョン回線

NHKは，膨大な量の映像伝送を円滑かつ確実に行うため，地球を一周するハイビジョン専用回線を有している。

アメリカと日本を結ぶ光ファイバーの「米日専

用回線」は，総延長およそ２万キロ。ハイビジョンの映像を５本同時に伝送できるもので，ニューヨークのアメリカ総局，ワシントン支局，ロサンゼルス支局から，どの回線にも接続できる。

回線構成は，米国内，太平洋の海底区間とも異なる経路で二重化されており，片側の回線が何らかの理由で切断されても，もう一方の回線に，瞬時に切り替わる高い機能が備わっている。アメリカ総局には，全米・中南米からの映像を24時間体制で中継している「回線センター」がある。

「欧日専用回線」は，インド洋上の衛星を介し，パリのヨーロッパ総局と放送センターが接続されており，同時にハイビジョン２回線の伝送が可能となっている。

また，パリとアメリカを結ぶ「欧米専用回線」が１回線あり，ロサンゼルスで，「米日専用回線」のどの回線にも接続できるようになっている。

さらに，ロンドン，モスクワ，ベルリン，エルサレムの各支局は，パリと専用回線で接続されているほか，パリのヨーロッパ総局は，衛星の電波を受信するアンテナ10基を備えた「テレポート」を有している。欧州・中東・アフリカ・中央アジアからの映像を上記専用回線で東京の放送センターと結ぶ分岐点，いわゆる「ハブ」の役割を果たしている。

アジア地域では，北京の中国総局，上海支局，バンコクのアジア総局，ソウル支局，マニラ支局，台北支局，ニューデリー支局，イスラマバード支局，シンガポール支局，シドニー支局などからもハイビジョン伝送が可能になっている。

４．海外からのIP伝送（DNG／Digital News Gathering）

日進月歩のデジタル技術により，インターネット等のIP回線を利用して，デジタルファイルや，リアルタイムのストリーミングで映像を送る「DNG」が急増している。すでに海外からの素材伝送全体の30%近くがこのファイル転送となっている。11年のチュニジアのジャスミン革命，エジプト革命，リビア内戦，12年の尖閣諸島関連の中国内反日運動などから，ASEAN，ASEM，COP18といった国際会議，MLB，競泳，ノルディックといったスポーツまで，あらゆる映像の伝送手段として使われている。高速インターネット回線でのハイビジョン映像のリアルタイム伝送や，公衆無線LANスポットからの映像伝送といったことが常態化してきており，東京のニュースセンターでも受信体制の強化に追われている。

５．国際間の映像素材交換

NHKは，国際回線を使って内外のニュース映像を海外の放送機関にも提供している。

このうち「アジアビジョン」は，ABU（アジア太平洋放送連合）傘下の26の国と地域，27の放送機関（13年４月現在）が参加していて，毎日２回（週末は１回）の衛星を使った送受信や，インターネット経由で素材を相互に交換している。

12年度に交換したニュースは9,101項目。このうちNHKは1,086項目のニュース映像を提供した。東日本大震災の被災地の復興状況などを積極的に提供しているほか，12年12月に中央自動車道笹子トンネルで起きた天井板崩落事故の迅速な対応で月間賞を受賞するなど，高い評価を得ている。

アジアビジョンに提供された映像は，ジュネーブのEBU（欧州放送連合）本部へも，衛星伝送とインターネットを経由したファイルで送られ，欧州域内の放送機関に配信されている。

Ⅴ．ニュース

政治においては，民主党政権下で，８月，消費税率引き上げ法案が成立した。９月の民主党・自民党の党首選挙で，野田総理大臣が代表，安倍元総理大臣が総裁となり，与野党の攻防が続いたが，12月の総選挙で自民党が圧勝し，第２次安倍内閣がスタートした。

日本経済は，東日本大震災による打撃から脱しつつあるように見えたが，ヨーロッパの金融不安の中，１ドル70円台という歴史的な円高水準となり，輸出産業の業績を圧迫した。12月に誕生した安倍政権による相次ぐ経済政策により円安が進み，３月には，円相場は90円台半ばとなり，株価も３月末には，リーマンショック前の水準に迫るものとなった。

海外の動きでは，11月にアメリカ大統領選挙，12月に韓国大統領選挙があった。また，ヨーロッパの信用不安が広がる中で，ギリシャ議会選挙が行われ，ポルトガル，スペインでは市民による大規模なデモが行われた。さらに尖閣諸島をめぐる日中関係，竹島をめぐる日韓関係でも緊張が続いた。１月には，アルジェリアで人質事件が起き，多くの犠牲者が出た。

東日本大震災については，復興に向けた取り組みと課題を伝えたが，東京電力福島第一原発においては，原発そのものの課題，避難区域見直しや除染，生活再建や賠償問題など，なおも課題は継

続している。

災害としては，７月に死者と行方不明者合わせて30人を超える被害を出した九州北部豪雨があった。

また，全国で相次ぐいじめが大きな問題となった。

スポーツでは，夏に「ロンドンオリンピック」が開催され，日本選手は史上最多となる38個のメダルを獲得するなど活躍が目立った。

１．主なニュース番組

（１）総合テレビ

毎正時の定時ニュースのほかに朝，昼，夜，それぞれの時間帯に即したニュース番組で，視聴者の指針となるニュースや情報を発信した。

『NHKニュース　おはよう日本』は，４時30分から８時まで。『正午ニュース』は15分間で，その日の午前中のニュースをコンパクトに伝えた。『お元気ですか　日本列島』は，14時５分から54分までで，全国の放送局を結んで地域のニュースや話題，リポートを伝えた。また16時50分からの『ゆうどきネットワーク』の中で10分間。18時からも10分間伝えた。19時からは，その日の国内外のニュースをシャープに，深く，多角的に伝える夜のメインニュース『NHKニュース７』。そして21時からはその日のニュースにプラスαの情報を盛り込んで伝える『ニュースウオッチ９』を放送した。

そのほか１週間のニュースをまとめて伝える『週刊ニュース深読み』，地上波唯一の専門的な国際ニュース番組『海外ネットワーク』，ニュースとネットを連動させた『NEWS WEB 24』などで幅広い視聴者層の関心に応えた。

大きな事件・事故，災害などの際は，放送枠の拡大や特設ニュースを組み対応した。12年度の放送枠の拡大回数は，179回・約48時間に及び，特設ニュースは267回・約51時間に達した。また，視聴者にいち早く情報を知らせるため画面に文字で第１報を伝えるニュース速報は，地震情報を含め890回に及んだ。

（２）Eテレ

手話ニュースは，毎日伝える『NHK手話ニュース』と平日夜の『NHK手話ニュース845』，土曜の『週間手話ニュース』，日曜の『こども手話ウイークリー』の４番組を放送した。特に災害報道に力を入れ，台風については深夜や早朝の時間帯に定時枠とは別に特設ニュースを放送した。

（３）BS1

『BSニュース』は，毎日毎時50分から10分間を基本に24時間，国内外のニュースや各地の話題をコンパクトにまとめて伝えている。

『BS列島ニュース』は，平日の午後１時から１時49分までの49分間で，全国各地のNHKの放送局がその日の昼に伝えたニュースや地域放送で伝えたリポートをまとめて全国に発信している。

（４）R1・FM

ラジオニュースは，東日本大震災の災害報道を教訓に，災害時や災害のおそれがある時に正確な情報を迅速に伝えることと，ふだんからラジオを聞いてもらえることを目指し，内容の充実に取り組んだ。

防災関係では，災害情報に対する関心の高まりに応え，速報の伝え方や基準を改めた。６月からは全国ニュースの放送中でも，住民の生命財産に関わる気象情報は各局の判断で上乗せして放送できるよう基準を明確化した。11月からはR2の速報基準を引き下げ，震度５以上の地震や津波注意報もR2で伝えることにした。

12月７日に東北･関東で震度５弱の地震があり，宮城県に津波警報が発表された。R1では全国向けに『私も一言！夕方ニュース』，関東ブロックで衆議院選挙の政見を放送していたが，緊急地震速報で中断しR1・R2・FMで「いま東京でも揺れを感じている」と警戒を呼びかけた。津波警報発表後，R1・FMはTVと同時放送で津波への警戒を呼びかけ，R2は４か国語放送を実施した。地震発生からおよそ40分後にはラジオ独自の放送とし警報解除まで伝えた。大震災を教訓に見直しを進めてきた避難呼びかけの文言を初めて実際に放送した。

気象庁は３月７日から津波警報の発表方法を改めた。ラジオではその内容を５編の「ひとくちメモ」にまとめ，ニュース以外の番組内で２月21日から３月末まで86回にわたって放送した。

R1のデイリーニュースは平日の日中は毎正時と30分ごと，休日と深夜は毎正時の枠で伝えた。災害や事件事故，政治の動き，大きなイベントの際にはニュース枠を特設して伝えた。

７月から８月にかけてのロンドン五輪では中継やハイライト，現地からのリポートなどを交えておよそ98時間にわたり興奮と感動を伝えた。

11月７日の米大統領選挙では，報道局に特設スタジオを設け，午前８時から午後４時台まで毎正時のニュース枠を拡大して速報を続けた。

12月16日の衆議院選挙では，R1・FMで午後７

時55分から９時間５分にわたって開票速報を放送した。当確・当選の最新情報を中心に注目選挙区のリポートや，解説委員と記者による解説を交えて伝えた。

12年度の改訂では平日夜の『きょうのニュース』の内容を充実させた。東日本大震災の検証や原発事故対策，南海トラフ･首都直下地震の対策，それに復興の動きは特に丁寧に伝えた。番組を親しみやすくするため，最後の１分に季節の話題などをキャスタートークで伝えるコーナーを設けたほか，ブログを始め，１年で20本を掲載した。

朝８時台の『列島リレーニュース』は終了し，12年度は午後１時半と夜７時半の２回とした。

FMは朝７時・正午・夜７時・深夜１～４時の全国ニュースをR1と同時放送した。

２．ニュースサイト「NHK NEWS WEB」

データ放送と連動し，政治，経済からスポーツまで各分野のニュースをインターネットで原則，１週間公開している。大きな事件や事故，災害などの情報は「JUST IN」ニュースとして速報しているほか，注目ニュースは取材記者が深く掘り下げた署名記事「WEB特集」として掲載している。

（１）ウェブコンテンツの充実

７月のロンドンオリンピックでは，映像の放送権を確保するため，日本国内限定で動画を公開できるようにした「GEOブロック機能」を導入して，スポーツの情報発信力を大幅に強化した。

また，ツイッター，フェイスブックなどソーシャルサービスへの情報発信を進めるとともに，１分ダイジェスト動画「NHKニュース1minute」を７月から公開するなど，ウェブの特性に合わせたコンテンツを充実した。

（２）災害情報の充実

災害情報強化のため地震・津波情報設備を10月に更新。地震の震度図公開まで５分程度かかっていたものを１分弱まで短縮した。

（３）画像投稿システム開発

３月には視聴者が事件や事故，災害などの動画や静止画をNHKに簡単に送ることができるサイトや専用アプリ「NHKスクープBOX」を公開した。

３．報道室

NHKの全国取材網には各地の放送局のほかに報道室がある。事件・事故・災害・選挙報道はもちろん，地域の暮らしに密着した取材の最前線として活動している。

〔北海道〕

北海道管内の報道室は，この１年，北方領土問題，知床の自然，ウインタースポーツなど，全国的にも関心が高いニュースや話題について，精力的に情報を発信し続けた。

釧路局・根室報道室は，北方四島とのビザなし交流が開始から20年を過ぎても領土問題の解決に一向に結びついていない実態や，元島民の高齢化が進み返還運動を次の世代にどう伝えていくかといった課題を番組や企画ニュースで伝えた。

旭川局・稚内報道室は，最短で43キロの距離にあるロシア・サハリンへの寿司ネタの輸出や急増するカニの輸入など，ロシア関連の情報発信の拠点となったほか，風力発電に適した地域でありながら，普及に向けて送電線の整備が課題になっている実状についても伝えた。

室蘭局・苫小牧報道室は，地元選手が多数を占めるアイスホッケー女子代表に密着取材し，２月，スロバキアで開催されたソチ五輪最終予選には記者が同行して，五輪出場を決めた歓喜の瞬間を全国に伝えた。

北見局・網走報道室は，世界自然遺産・知床の代表的なスポット「知床五湖」を冬期も観光できるようにする動きや，観光客がエサを不用意に与えるため，ヒグマが人里に降りるようになり駆除される実態を伝えた。

札幌局・千歳報道室は，格安航空会社が新千歳空港を結ぶ路線に相次いで就航し，利用者が急増していることや，日中関係の悪化で中国からの北海道への観光客が減少する中，新千歳空港とタイを結ぶ直行便の開設を機に道内の観光関係者が東南アジアからの観光客誘致に本格的に乗り出していることを報じた。

札幌局・小樽報道室は，小樽商科大学のアメリカンフットボール部の飲み会で，１年生の学生が急性アルコール中毒で死亡した問題を伝えた。

札幌局・岩見沢報道室は，日本ハムファイターズの栗山監督とおなじ名前が縁で10年以上交流を続けている栗山町が，日本ハムのパ・リーグ制覇で大いに盛り上がる様子を伝えた。

〔東北〕

東日本大震災の被災地をつぶさに取材し全国に発信するとともに，地域の安全・安心の要になることを目指し，12年７月，宮城県気仙沼市と岩手県大船渡市に新たな報道室を開設した。

仙台局・気仙沼報道室は，水産業の復旧・復興の状況や震災遺構の保存，新たな防災計画の問題点など被災地の課題を取材し全国に発信した。

盛岡局・大船渡・陸前高田報道室は，「奇跡の一本松」が枯死した後も被災者に希望を与え続けられるよう防腐処理される過程を詳しく紹介した。

仙台局・石巻報道室は，被災地の復旧・復興を阻む壁となっている課題を次々に洗い出し，３月放送の『NHKスペシャル』「故郷を取り戻すために～３年目への課題」などで発信した。

盛岡局・宮古報道室は，山田町から被災者の雇用事業を委託されたNPOが多額の使途不明金を出し被災者全員を解雇した問題を追跡し，一部の復興予算が適切に使われていない実態を伝えた。

青森局・八戸支局は，公営住宅で被災者２人が相次いで孤立死していた事実をつかみ，２月『ニュース７』で報じ，八戸市などが被災者の健康調査を行うなど対策が進んだ。

福島局・南相馬報道室は，津波で一家６人を失った男性を取材。震災から２年がたった今も心に折り合いをつけられないでいる心情を伝え，大きな反響を呼んだ。

福島局・いわき支局は，いわき市で生じている避難者と市民との間の軋轢（あつれき）について丁寧に取材し全国に発信した。

山形局・米沢報道室は，福島から避難してきている人たちの苦境だけでなく，自立への動きも継続的に取材した。

東北各地の報道室は竜巻や大雪などの緊急災害報道や地域の課題も全国に発信した。

７月５日，青森県弘前市で竜巻が発生し，住宅など40棟あまりに被害が出た。青森局・弘前支局は，警察・消防の現地調査に同行し，竜巻がおよそ１キロ移動した可能性があることなどを，全国ニュースで放送した。

秋田局・横手報道室は，大雪の後，雪下ろし中の転落事故対策を取材し，命綱やヘルメットの着用を呼びかけた。また，雪で外出できない高齢者のために買い物支援をする地元の人たちの姿を追い高齢化が進む地域社会の在り方を伝えた。

４月20日，秋田県鹿角市のクマ牧場からクマが逃げ出し従業員２人が死亡する事故が発生。秋田局・大館報道室は，施設の管理体制や秋田県の監督指導の問題点を詳しく伝えた。

２月，国の原子力規制委員会の専門家会議は，東北電力東通原子力発電所の敷地内を走る断層は「活断層の可能性が高い」とする報告書案をまとめた。青森局・むつ報道室は専門家を取材し，下北半島の原子力施設が置かれている状況を伝えた。

〔関東甲信越〕

関東甲信越はこの１年，大きな災害や事故が相次ぎ，各報道室は取材の最前線として緊急報道に当たった。

５月６日，茨城県と栃木県で複数の竜巻が発生し，このうち茨城県つくば市を襲った国内最大級の竜巻では１人が死亡，37人がけがをし，1,000棟を超える建物に被害が出た。水戸局・つくば報道室は，被害が大きかった北条地区の被害や被災者への支援状況などを取材し，全国ニュースで伝えた。

新潟局・長岡報道室は５月24日，南魚沼市の建設工事中のトンネルで作業員４人が行方不明になった爆発事故について３日後の４人の遺体発見まで，全国ニュースなどでつぶさに状況を伝えた。

横浜局・横須賀報道室は，９月24日，横須賀市で京浜急行の特急電車が大雨で崩れた土砂に突っ込んで脱線し，50人以上がけがをする事故の詳しい状況を中継も交えて伝えた。

甲府局・富士吉田報道室と大月報道室は，12月２日，山梨県の中央自動車道笹子トンネルで天井板が崩落し，９人が死傷する事故の発生直後から現場の状況を詳しく伝えたほか，事故後，迂（う）回路が渋滞し，市民生活に影響が出ていることなどを全国に発信した。

13年２月25日，栃木県日光市で震度５強の地震が局地的に発生し，山あいの温泉宿や道路などに被害が出た。宇都宮局は，日光報道室を拠点に温泉宿や道路，トンネルの被害の詳細を取材し，注意喚起と減災報道に努めた。

水戸局・日立報道室は，原発事故で出た放射性物質を含む焼却灰などの最終処分場の最終候補地として，環境省が９月27日に高萩市を提示したことに対し，地元の反対運動の動きなどを伝えた。

前橋局・沼田報道室は，放射性物質の除染を国の費用で行う地域に指定されていたみなかみ町と片品村について環境庁が12月14日に「基準が下回ったことが確認できた」として指定を解除した一連の動きをいち早くつかみ，全国ニュースなどで伝えた。

さいたま局・春日部報道室は12月，県内で最も高い放射線量が観測され，国の「汚染状況重点調査地域」に指定されている三郷市が，除染で出た土を一時保管するコンクリート製の箱の建設工事を，住民の混乱を招くおそれがあるとして未公表のまま進めていることを独自取材して伝えた。

首都圏放送センター・多摩報道室は，12月20日，東京・調布市の小学校で，アレルギーのある女子

児童が，給食でチーズ入りの料理を誤って食べ，ショック症状を起こして死亡した事故で，発生当初から精力的に取材し，事故の背景やアレルギー対応が進んでいない教育現場の現状を『クローズアップ現代』などで伝えた。

横浜局・厚木報道室は５月，米軍厚木基地で５年ぶりとなった夜間着陸訓練に対する住民の反発の声を伝えたほか，10月には新型輸送機オスプレイの導入が住民感情に及ぼしている影響を伝えた。

７月と８月，成田空港に日本航空と全日空が出資する格安航空会社が相次いで就航し，千葉局・成田報道室は，就航の背景や地元の期待，定時運航の難しさなどの課題を全国ニュースで伝えた。

９月，北アルプスの玄関口として知られる長野県松本市の上高地で，生態系を乱すおそれが大きいとして「特定外来生物」に指定されている外来植物の「オオハンゴンソウ」を環境省が確認した。長野局・松本報道室は，いち早くこのニュースを伝え，全国的に大きな関心を集めた。

〔中部〕

南海トラフを震源とする巨大地震に向けた対応が中部地方の最重要課題である。特に大津波に備えて，静岡局･沼津報道室･浜松支局，名古屋局･豊橋支局・岡崎報道室・中部空港報道室，津局・四日市報道室・伊勢報道室・尾鷲報道室は，地元の自治体や住民による対策の他，離島や広域にわたる低地での津波対策などについて継続して伝え，減災のための報道を続けている。

12月の衆院選の取材には各地の報道室の記者が早い段階から取り組んだ。このうち金沢局・小松報道室は，能美市で開かれた７月の会合で森元首相が衆議院選挙に立候補しない意向を示した，という情報を速やかに入手して，全国放送で伝えた。

５月，岐阜県瑞浪市で幼稚園の女性教諭が殺害され現金が引き出されるという強盗殺人事件が発生した。岐阜局・多治見報道室は，当初行方不明だった教諭の乗用車が市役所の駐車場で見つかり警察が捜査を始めたという情報を速やかに入手。この情報を基に取材・放送を展開した。

東京電力福島第一原子力発電所の事故のあと，国内の原発がすべて停止し，夏の電力不足が懸念される中，７月に関西電力が大飯原発３・４号機の運転を再開した。福井局は，おおい町のオフサイトセンターに取材前線を設置。嶺南報道室が中心となって，３号機の原子炉機動から，４号機のフル稼働にいたるまでのおよそ１か月間，作業の様子や地元の反応を伝え続けた。その後も嶺南報道室では，原発の敷地内を走る破砕帯と呼ばれる断層の評価や，もんじゅをめぐる核燃料サイクル政策の行方，原発の長期停止にともなう地域経済の影響などを継続的に取材している。

９月，宮城県沖の太平洋で三重県紀北町の漁船が貨物船と衝突して沈没し，乗組員13人が行方不明になった。津局・尾鷲報道室は海上保安部からの情報を得て漁協に駆けつけ，家族や地元の動きをいち早く全国に放送した。

静岡局・沼津報道室は，10月16日，静岡県裾野市のサファリパークで飼育員が象に踏まれ死亡した事故で，速やかに現場で取材にあたり，象の繁殖に力を入れる各地の動物園も取材して，事故の背景に迫った。

東日本大震災の被災地のがれきについて，富山県は，岩手県山田町のがれきの受け入れを決め，12月14日，県内で初めて高岡市にがれき７トンが運び込まれた。富山局・高岡報道室は，がれきの到着から試験焼却，焼却したあとに出た灰の埋め立てまでを重点的に取材し，環境への影響調査や地元住民の反応を伝えた。

12月30日，北アルプスの剱岳に入山した関東地方の４人のグループが遭難した事故で，富山局・魚津報道室では，前線本部が置かれた麓の警察署で取材にあたり，悪天候で捜索が難航していることや４人が雪崩に巻き込まれた可能性が高いことを全国に発信した。

１月４日，岐阜県高山市の中部縦貫自動車道のトンネル内で，ワゴン車とトラックが正面衝突し，ワゴン車に乗っていたスキー帰りの家族のうち，４歳男児と祖父母が死亡した。高山支局は，事故発生にいち早く気づいて現場に向かい，全国ニュースで現場の映像を放送した。

静岡局・浜松報道室は２月10日に浜松市のつり橋が壊れ６人がけがをした事故について，高度成長期に整備した道路や橋などの維持管理が自治体の人手や予算の問題から難しくなっていることが背景にあり，全国的な課題となっている現状を各地の自治体の取材をまじえて伝えた。

３月，開港から８年が経つ中部空港に国内格安航空会社の国内線が就航した。中部空港の利用者を増やす切り札として注目されるこの情報について名古屋局・中部空港報道室の記者がいち早くキャッチし全国に伝えた。

〔近畿〕

８月14日を中心に京都府南部などに降った大雨で宇治市では住宅街の河川があふれて２人が死亡し浸水被害が相次いだ。京都局は，学研都市報道

室を取材拠点とし，被害状況やライフライン情報，さらに住民の思いなどをきめ細かく伝えた。

国が原発の防災重点区域を原発30km圏に広げ，福井県に隣接する京都府では，舞鶴市など北部を中心に多くの市町村で地域防災計画の見直しを迫られた。京都局・丹後舞鶴報道室は住民の避難計画を中心に自治体の対応を継続取材，水害を想定して配置された防災無線の不足などの課題を全国に伝えた。

９月29日，兵庫県姫路市の化学工場で，アクリル酸などを貯蔵するタンクが爆発する事故が発生。消防隊員１人が死亡するなど37人が死傷した。神戸局と姫路支局は，消火に駆けつけた消防隊員が巻き込まれて被害が拡大したことや，爆発したタンクの温度管理に不備があったことなどを取材し，ニュースや番組で伝えた。

２月12日，兵庫県高砂市の山陽電鉄の踏切で特急電車がトラックと衝突して脱線し，15人が重軽傷を負った。姫路支局の記者は現場から中継リポートをするなど事故原因究明の動きを伝えた。

８月，南海トラフを震源とする巨大地震の新しい被害想定が公表され，和歌山県では最大で震度７の揺れと高さ20メートルの津波に襲われるとされた。死者は，最悪の場合８万人に上るとされ，南紀新宮・南紀田辺の両報道室は，甚大な被害が予想される県南部の課題や，津波からいち早く避難するための取り組みを伝えた。また，両報道室は，11年の豪雨災害から１年となる９月を中心に，復興が徐々に進む被災地の現状や被害が拡大した要因についてきめ細かく伝えた。

奈良局・やまと路報道室は，紀伊半島豪雨災害からの復興やその課題，被災者の現状について取材を進め，１年や１年半などの節目に企画リポートとして放送した。深層崩壊を取り上げた『NHKスペシャル』の取材・制作にも参加した。また，卑弥呼の墓という説もある桜井市の箸墓古墳に初めて研究者が立ち入り調査を行ったことをはじめ，遺跡・文化財の取材も継続的に行った。

大津局・彦根報道室は，JAXA＝宇宙航空研究開発機構などと宇宙での太陽光発電に挑む特殊ガラスメーカーの取り組みを紹介した。また９月，中国各地で起きた反日デモで現地の店舗が被害を受けた彦根市に本社があるスーパーの対応など最新の経済情報の発信に力を注いだ。

大阪局・関空報道室は，新しい航空輸送時代の課題などについて取材を続けた。このうち関西空港で10月，格安航空会社専用の第２ターミナルが完成し供用が開始され，関西空港を拠点とする「ピーチ・アビエーション」の利用客は，春の就航から９か月で100万人を突破するなど，国内外の格安航空会社の参入競争が激しくなった現状を伝えた。

〔中国〕

地方経済の衰退は，広島県福山市で63年にわたって親しまれてきた地方競馬にも及んだ。福山市営競馬場は，18億円に上る累積債務を抱え，12年度末で廃止となった。広島局・福山支局は，廃止の方針をいち早く全国に伝え，最大の課題の競馬関係者の再就職問題についても，新たな働き先が決まらない苦しい現状をリポートで伝えた。

瀬戸内海の島・江田島市で３月14日，カキの身を取り出す作業に従事していた中国人実習生が工場の社長など８人を殺傷する事件が起きた。広島局・呉報道室は，発生直後からその様子を全国に放送するとともに，外国人労働力に依存している漁業の実態も伝えた。

11月，岡山県西部地域と広島県福山市にまたがって路線バスを運行していた井笠鉄道が利用者の減少でバス事業の継続が困難となり破産を申請した。岡山局・倉敷報道室は，破産申請を検討している情報をいち早くつかんで伝えた。

政府が尖閣諸島を国有化して以来，中国の船が日本の領海侵犯を繰り返し，海上保安庁は全国から巡視船を沖縄に派遣した。松江局・浜田報道室では浜田海上保安部所属の巡視船が沖縄などに繰り返し派遣される一方で，船体の深刻な老朽化問題や，長期化による船や人員の綱渡りの運用などについてリポートを制作した。

４月，中国地方の最高峰，大山のふもとを走る２つの自動車専用道路で，強風の影響でトラック６台が相次いで横転する事故が起きた。鳥取局・米子支局は，いち早く現場に駆けつけて取材を行い，事故の状況を全国に伝えた。翌日には，通行止めを判断する風速の目安がなかったことなどを指摘し，国道事務所が事故の再発防止に向けて標識や吹き流しの設置などを進めた。

12月，北朝鮮の小型船が島根県の隠岐の島沖で見つかり，12年１月に続いて境港市にある境海上保安部にえい航された。米子支局では，１月の取材経験を踏まえて，船内調査の状況や乗組員の帰国を伝えた。

山口県岩国市の米軍岩国基地に新型輸送機オスプレイ12機が搬入され，９月沖縄への本格配備を前に試験飛行が行われた。山口局･岩国報道室は，広島局や沖縄局などとも連携して取材を展開し，全中に発信した。その後も，岩国基地を拠点とし

た飛行訓練が行われており，国民の関心の高いオスプレイについて継続的に取材を続けた。

〔四国〕

13年１月末，愛媛県大洲市の山鳥坂ダムの建設再開が決まった。山鳥坂ダムは治水対策のため総事業費約850億円をかけて建設が進められていたが，民主党政権時に工事は凍結。政権に復帰した自民党が，３年３か月ぶりに建設再開を決め，住民と国との間で補償内容もまとまった。松山局・八幡浜報道室は，ダムの建設をめぐって翻弄され続けてきた住民たちをさまざまな観点から取材し，リポートなどで伝えた。

松山局・新居浜報道室は，西条市の新庁舎建設を巡る市長の不信任決議案可決，議会の解散などの市政の混乱について，問題の背景となった旧市町の合併時のしこりや市政への影響などを詳しく取材し，リポートなどで伝えた。

“造船とタオルの町”愛媛県今治市を活気づけようと４年前に誕生した愛くるしい表情の「バリィさん」が，12年11月の「ゆるキャラグランプリ」で，悲願の１位を獲得した。今や熊本の「くまモン」にも負けない全国区のキャラクターになり，松山局・今治報道室は，地域の活性化に取り組みをリポートなどで伝えた。

８月に国が公表した南海トラフ巨大地震の被害想定で高知県土佐清水市と黒潮町の津波の高さは34mと全国最大となった。高知局・くろしお報道室は，黒潮町を取り上げ，全職員を防災担当にして，津波避難計画の策定を進めているが，財政上の理由で保育所の高台移転のメドが立たないなど課題は多いと全国ニュースなどでリポートを多数発信した。

徳島局・阿南報道室は被害想定で20mを超える津波が押し寄せるとされた徳島県南部について，高台への移転計画を進めている県立病院の現状と課題や，津波からいち早く逃げるため住民自らが避難路をつくる取り組みなどを取材して伝えた。

全国で暴風の被害が相次いだ４月３日，香川県西部の三豊市では，午後３時半ごろ会社の倉庫が倒壊し，女性が下敷きになって死亡した。高松局・丸亀報道室は，一報を受けて現場に駆けつけ，夕方６時台のローカルニュースでNHKだけが，現場の映像を放送することに成功，『ニュース７』でも被害のすさまじさを伝えた。８月には，戦争を知る地元の高齢世代が中心となって取り組んだ戦争体験集づくりをリポート。戦争を後世に伝える大切さを伝えた。

〔九州・沖縄〕

鹿児島県の奄美群島では，台風の接近が相次ぎ，12年１年間では観測史上最多の９回にのぼり，多くの被害を受けた。離島では，その度に停電や土砂崩れによる地区の孤立などが発生，鹿児島局・奄美報道室では，現地の状況について映像取材に加え，電話中継などで詳しく伝えた。

６月，大隅半島にある肝付町では，大雨で道路が寸断されて地区のあちこちが孤立状態に陥った。鹿児島局・鹿屋報道室は，その状況をつぶさに取材し，水や生活物資が不足する切実な状況を伝えた。

７月11日から14日にかけて，熊本・大分・福岡の３県は九州北部豪雨に見舞われた。土砂災害や河川の氾濫が相次ぎ，死者・行方不明者は３つの県で32人に上った。このうち，大分県日田市と中津市は，豪雨に先立ち７月３日から記録的な大雨が降ったため，九州北部豪雨と合わせ，２度にわたり，地域を流れる川が氾濫した。大分局・日田報道室は，河川の決壊などの映像を取材するとともに，夏祭りを復旧につなげようとする被災地の動きを丹念に取材して全国に発信した。大分局・中津報道室も，観光地・耶馬渓など美しい景勝地をよみがえらせようと行政や住民が取り組む姿を伝え続けた。

熊本県では，12日に１時間に100ミリ前後という猛烈な雨が降り続き，阿蘇市を中心に土砂災害が発生，23人が死亡した。熊本局･阿蘇報道室は，交通が寸断される中，取材車両・要員を現地に的確に誘導し，取材体制の確保にあたった。さらに，記録的な雨のもようや土砂崩れの状況などを詳しく取材した。

水俣病問題では７月末に，未認定患者の救済策の申請が締め切られた。熊本局・水俣報道室は，水銀を規制する国際条約の名称を「水俣条約」とすることについて，地元水俣で分かれた賛否の声を丹念に取材し，１月には，地元の声を伝えようと国際会議に出席した被害者団体関係者を密着取材し全国に発信した。

８月に公表された南海トラフ巨大地震の被害想定で，九州では宮崎県が最も被害が大きく，震度７，沿岸各地は10メートルを超える津波に襲われ死者は４万2,000人に達すると想定された。宮崎局・延岡報道室と日南報道室は，この想定に対する自治体の反応や，これを受けた避難訓練などの対策を細かく取材し発信した。

10月，九州電力玄海原子力発電所の４つの原子炉が停止した状態が続く中，佐賀県と福岡県が初

めて連携し，玄海原発の事故を想定した大規模な原子力防災訓練を行った。また，佐賀県は原発事故に備えた地域防災計画の見直しを行い，３月に新しい地域防災計画を決定した。佐賀局・唐津報道室は，この訓練や地域防災計画の見直しの動きについて細かく伝えた。

10月，長崎県で開かれた全国和牛能力共進会で宮崎県産の牛が９部門中５部門で日本一に輝いた。宮崎局・都城報道室は，10年に口蹄疫に見舞われた宮崎の畜産業にとって復興を全国にアピールするものとなったと伝え，共進会後に宮崎産の子牛が値上がりしたことなどの影響をリポートなどで伝えた。

12年，沖縄は日本に復帰してから40年の節目の年を迎えた。この年に新型輸送機オスプレイが普天間基地に配備されるなど，基地負担への県民の反発や不信が渦巻くこととなった。普天間基地の移設問題では，沖縄県や県民の多くが県外移設を求める中，日本政府は日米合意に基づく名護市辺野古への移設に向けた手続きを進め，３月，県に対し，辺野古沿岸部の埋め立てを申請した。沖縄本島中北部を担当する沖縄報道室は，基地の移設問題やオスプレイ配備をめぐる政府と地元のせめぎ合いを継続的に取材し，全国に発信した。

４．海外総支局

13年３月31日現在，４つの総局と24の支局に計79人の特派員がいる。

各総局がカバーする主な地域は，アジア総局が，アジア・オセアニア。中国総局が，中国・台湾・モンゴル。ヨーロッパ総局が，欧州・ロシア・中東・アフリカ。アメリカ総局が，南北アメリカ。

アジア総局管内では，民主化が進み，外国企業の進出が相次いでいるミャンマーの情勢を，重点的に取材した。ミャンマーの経済発展や，民主化運動の指導者アウン・サン・スー・チー氏の動向などを，継続的に取材し，放送に結びつけた。

また，北朝鮮については，キム・ジョンウン第１書記が就任し，体制にどのような変化が見られるかをフォロー。核実験の実施や事実上のミサイル発射など，日本の安全保障に深く関わる事態への警戒を続けながら，独自の情報や映像の入手に努め，ニュースや番組で報じた。

韓国については，島根県の竹島や歴史認識をめぐって対日関係がぎくしゃくする中，韓国側の動きを中心に情報取材を重ね，細かく伝えた。12年12月に行われた大統領選挙と，新たに発足したパク・クネ政権の課題についても分厚く報道した。

中国総局管内では，冷え込んでいる日中関係の行方が最重要の取材テーマの一つとなった。日本が沖縄県の尖閣諸島を国有化した後の12年夏には，中国各地で反日デモが行われ，現場でも取材した。中国の対日政策。そして，習近平国家主席を頂点とする中国指導部の動き。経済や社会の動きを含めて，多角的な取材を積み重ね，連日，伝えた。

ヨーロッパ総局管内では，13年１月，アルジェリアで人質事件が起きた。NHKでは内外のネットワークを生かして総力を挙げての取材にあたり，武装勢力が事件を起こした背景を含めて，ニュースと番組で詳しく伝えた。中東地域では，また，内戦が続くシリアの情勢について，現地での取材を含めて，継続的に取材を行った。

さらに，信用不安がくすぶっているヨーロッパでは，スペインの財政危機や，キプロスの銀行再建問題など，経済関連のニュースも多く，現地に入って取材し，詳細を伝えた。

アメリカ総局管内では，12年11月にアメリカ大統領選挙が行われ，オバマ大統領が再選された。選挙戦に密着しての取材を重ね，アメリカ社会や経済の課題をニュースや番組で伝えた。また，選挙の時期に合わせて，特設のホームページとツイッターを立ち上げ，きめ細かい情報発信を行った。アメリカ管内では，この他，IT関連企業の動きなど経済のダイナミックな動きも日々，伝えた。

海外総支局では，また，国際放送の拡充に合わせて，英語によるリポートにも力を入れ，NHKの海外発信力の強化に貢献している。

このように海外総支局では，幅広いNHKのネットワークを生かして，グローバル化が進む世界の最新情勢や，日本の参考となるような海外の事例などを，正確かつ速やかに視聴者に伝えようと努めている。

NHKの海外総支局（13年３月31日現在）

■アジア総局（バンコク）：マニラ，ジャカルタ，ハノイ，クアラルンプール，ニューデリー，イスラマバード，シンガポール，シドニー，ソウル

■中国総局（北京）：上海，広州，台北

■ヨーロッパ総局（パリ）：ロンドン，ブリュッセル，ベルリン，ウィーン，カイロ，ドバイ，エルサレム，テヘラン，モスクワ，ウラジオストク

■アメリカ総局（ニューヨーク）：ワシントン，ロサンゼルス，サンパウロ

以上の29総支局に，記者，制作記者，ディレクター，カメラマン，技術担当，経理担当，計79人

の特派員がいる。

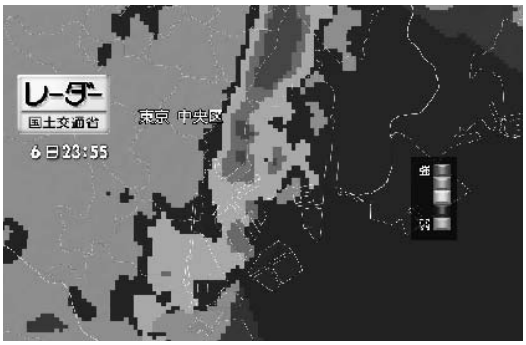
Ⅵ．気象情報

12年度の総合テレビの気象情報は，平日で１日およそ１時間20分放送した。気象予報士の資格を持った12人の気象キャスターが，番組ごとに気象情報の解説を担当した。台風や大雨などの緊急報道の際には，24時間態勢で特設ニュースの気象解説を行った。気象解説では，被害が起きる前に防災上の注意点などを伝える「減災報道」に引き続き取り組んだ。

12年度は，新しい気象画面としてX（エックス）バンドレーダー画面と雨雪判別画面を導入した。

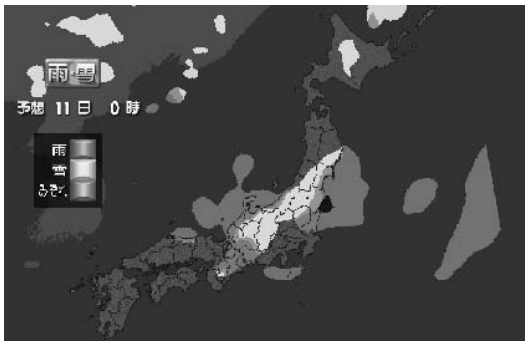
１．Xバンドレーダー画面（資料１）

Xバンドレーダーは国土交通省のレーダー。これまでのレーダーでは，捉えることができなかった局地的な雨雲の動きを，きめ細かく画面に表示することができる。これによって，都市部などでの局地的な大雨の際，雨が今どこで強まっているかを市区町村単位でリアルタイムに表示することができるようになった。どこで大雨に警戒すればいいのかをピンポイントで表示し，局地的な大雨による被害を減らす「減災報道」に生かす。12年８月から，まず関東エリアで放送を始めた。



２．雨雪判別画面（資料２）

雨が今後どこでどのくらい降るのかを予想して時間の経過とともに雨の範囲を動かしていく画面はこれまでもあった。しかし，その雨が「雪」になるのか「みぞれ」になるのかを判別して表示する画面はなかった。そこで，従来の雨を予想する画面を改修して，雨か，雪か，みぞれかを判別する「雨雪判別画面」を導入し，12年11月から放送を始めた。画面では，雨は青，雪は白，みぞれは灰色で表示した。12年度の冬のシーズンは北日本で記録的な大雪となり，首都圏でも雪が予想されることが多かった。雪に対する視聴者の関心が高い中で，気象情報で「雨雪判別画面」を放送に使い，気象キャスターの解説に活用した。



Ⅶ．スポーツ

１．ロンドンオリンピック・パラリンピック

12年７月27日から８月12日（現地時間）までの17日間にわたってロンドンオリンピックが開催された。ロンドンでのオリンピックは史上最多の３回目，204の国と地域が参加し，26競技302種目で熱戦が繰り広げられた。

ロンドン大会では，日本のメダル有望競技である野球とソフトボールが実施されなかったが，日本は38個のメダル（金７個，銀14個，銅17個）を獲得し，04年アテネ大会の37個を上回り過去最多となった。また，26競技のうち半分の13競技でメダリストが誕生したのも過去最多，チーム・団体でのメダルが目立ったことも大きな特徴だった。

サッカー女子（銀），卓球女子団体（銀），バドミントン女子ダブルス（銀），フェンシング男子フルーレ団体（銀），アーチェリー女子団体（銅）はいずれもチーム・団体で初めてのメダルを獲得した一方，柔道は不振が目立ち，男子は初めて金メダルなしに終わった。

時差は８時間で，主要競技の決勝は，日本の深夜から早朝に集中した。NHKは「全力応援！」というキャッチコピーのもと，柔軟な編成で，総合・Eテレ・BS1・ラジオ第１の各放送波で注目の競技を伝えるとともに，データ放送やインターネットできめ細かくオリンピック情報を伝えた。テレビ，ラジオ合わせたロンドンオリンピックの総放送時間（ニュース情報番組を含む）は729時間25分，このうち地上波（総合，一部Eテレ含む）の274時間８分は，アテネ大会（230時間41分）を上回り，これまでで最長となった。

総合テレビは，注目の日本選手の活躍を生中継し，注目競技が重なる場合はEテレでも編成した。さらに，深夜の生中継を見逃した視聴者に配慮し，総合テレビの午前中には録画によるいわゆる“見逃し”ゾーンを設けた。また，オリンピックで初めて中継番組のキャスターを現地に派遣し，総合テレビの競技中継の前後に会場周辺の様子や最新情報をライブで伝えるなど，現地の臨場感をたっぷりと届けた。

大会期間中の視聴率は，サッカーの競技中継が，軒並み高視聴率を記録した。日本時間７月28日（土）午後８時開始の女子予選リーグ２試合目スウェーデン戦は，後半の平均視聴率が30.8%（瞬間最高40.1%）で，NHK，民放合わせたロンドンオリンピック世帯視聴率のトップであった。２番目は，８月10日（金）午前３時45分開始のサッカー女子決勝，日本対アメリカの後半で，明け方の放送にもかかわらず29.1%を記録した。

オリンピックに続き，ロンドンパラリンピックが８月29日から９月９日までの12日間にわたり，史上最多164の国と地域が参加して行われた。日本は，車いすテニス男子シングルスで史上初の２連覇を達成した国枝慎吾選手，女子の団体競技として初の金メダルとなるゴールボール女子など，金メダル５個を含む合計16個のメダルを獲得した。

NHKは，Eテレで開会式，閉会式を生中継したほか，期間中毎日，総合テレビとEテレでハイライト番組を放送した。また，パラリンピックは回を重ねるごとに競技性が高まっていることから，ロンドン大会では，車いすバスケットボールや車いすラグビー，車いすテニスを中継録画で放送した。結果，ニュースや関連番組を含めた放送時間は合計45時間25分で，過去最長となった。

２．Jリーグ

Jリーグは1993年に開幕してから20回目のシーズンを迎えた。開幕節は東日本大震災から１年の時期と重なり，各スタジアムで黙祷（とう）を行ってスタートした。

J1は序盤ベガルタ仙台がMF冨田・DF角田らを中心とした堅実な守備で，前半の17試合をわずか２敗と優勝争いをリードした。サンフレッチェ広島はエースストライカー佐藤がゴールを量産するなど，攻撃力を武器に７月初めて首位に立つと，シーズン後半に入っても好調をキープした。終盤，勝ちきれない試合が続いた仙台が脱落。第33節，広島がホームで勝利し，初の年間優勝を決めた。

一方，ガンバ大阪はリーグ随一の得点力を生かせず，初の降格が決定。札幌・神戸と共に来シーズンはJ2で戦うことになった。

J2はヴァンフォーレ甲府が首位を独走し，「24試合連続負けなし」の新記録を樹立。優勝とJ1昇格を手にした。２位は湘南ベルマーレ。３つめの昇格枠には，新しく始まった「昇格プレーオフ」の結果，シーズン６位の大分が滑り込んだ。最下位町田ゼルビアはJFLに降格，替わってV・ファーレン長崎が来季，J2に参入する。

３．野球

プロ野球は３月30日にセ・パ同時開幕した。12年も電力事情を考慮して，「レギュラーシーズンは３時間30分を過ぎて新しい延長回に入らない，同点時は引き分け」とする特例措置を継続した。また，セ・リーグは今季からレギュラーシーズンに限り予告先発制度を導入した。

セ・リーグは大型補強した巨人が20試合終了時点で最下位に低迷した。しかし，交流戦に入ると一気に調子をあげセ・リーグとして初めて交流戦を制した。７月１日に首位に立つと巨人の勢いは最後まで止まらず，結局２位中日に10ゲーム以上の差をつけて３年ぶり34回目のリーグ優勝を果たした。３位はヤクルト，以下広島，阪神，DeNA。

パ・リーグはオリックスを除いた５球団が「混パ」を演出した。この混戦を勝ち上がったのは就任１年目の栗山監督が率いる日本ハム。巧みな選手起用で混戦から抜け出し，３年ぶり６回目のリーグ優勝（北海道に本拠地を移してからは４回目）を決めた。以下，西武，ソフトバンク，楽天，ロッテ，オリックス。

クライマックスシリーズ，セリーグはファーストステージでヤクルトを２勝１敗で下した中日が勝ち上がりファイナルステージで巨人に挑んだ。初戦から３連勝し王手をかけた中日だったが，その後巨人に３連敗。巨人が日本シリーズ進出を決めた。

パ・リーグファーストステージは３位のソフトバンクが２位の西武を２勝１敗で下してファイナルに進出。しかしシーズン終盤の強さをそのまま発揮した日本ハムが一つも星を落とすことなくソフトバンクを下し，３年ぶり６回目の日本シリーズ進出を決めた。

日本シリーズはレギュラーシーズン１位同士の対決となった。第４戦まではすべてホームチームが勝利し，２勝２敗で迎えた札幌ドームでの第５

戦，巨人が先発全員安打で快勝し，続く第６戦も制して，３年ぶり22回目の日本一に輝いた。

高校野球は大阪桐蔭がセンバツ決勝で光星学院（青森）を下して初優勝，夏の甲子園でも決勝で再び光星学院と対戦し，４年ぶり３回目の優勝，史上７校目の春・夏の連覇を果たした。

全日本大学選手権は早稲田大学が亜細亜大学を下して５年ぶり４回目の大学日本一に輝いた。

社会人野球の都市対抗は11年，東日本大震災の影響で秋の開催となり日本選手権と兼ねて大阪で行われたが，12年は東京ドームで７月に開催された。決勝は横浜市・JX-ENEOSが連覇を目指す東京都・JR東日本を破って史上最多の10回目の頂点に立った。続く秋の日本選手権も同じチーム同士が決勝で対戦，JX-ENEOSが20大会ぶり２回目の優勝を果たし，24年ぶりに史上２チーム目となる同一年での２大会制覇を達成した。

４．大リーグ

大リーグで最も大きなニュースは，日本のエース，ダルビッシュ有投手の大リーグ挑戦だった。デビュー当初は大リーグ特有の滑るボールや，日本と異なる指導方法に戸惑い，強力な打撃陣に支えられていた印象であったが，８月以降は防御率１点台と安定，チームの成績が急降下する中，先発の柱として活躍した。日本人の新人として最多の16勝を挙げた。

チームはシーズン終盤に失速，最終戦オークランド・アスレティックスとの直接対決に敗れ地区優勝を逃した。地区２位で１試合限りの「地区シリーズ進出決定戦」ではダルビッシュが登板，６回1/3を３失点で敗戦投手となりシーズンを終えた。

７月，イチロー選手が11年半に及び在籍していたシアトル・マリナーズからニューヨーク・ヤンキースへ「電撃」移籍した。マリナーズが長く低迷を続け，チームが若手中心の編成を模索する中，イチローは優勝を目指せるチームへの移籍を決意，個人成績だけでなくチームに貢献するという新たなモチベーションを得たイチローは，打順も守備も毎日変わるような立場の中でも着実に結果を残し，８月には，レギュラーの地位を確保した。

ヤンキースはアメリカンリーグ東部地区でボルティモア・オリオールズとシーズン最終戦までもつれこむデッドヒートを演じた末，地区優勝を果たした。

大リーグデビュー以来12年ぶりのポストシーズン進出を果たしたイチローは，再びオリオールズと相まみえることになった地区シリーズでは，忍者のようなホームインを見せるなどその身体能力の高さを見せつけるプレーでチームのけん引役となった。タイガースとのリーグ優勝決定シリーズではホームランも放ったが，タイガースに敗れ，ワールドシリーズ制覇の夢は持ち越された。

同じく今シーズンドジャースからヤンキースに移籍した黒田博樹投手は名門のプレッシャーからかシーズン当初は不本意な投球が続いたが，５月頃から制球が安定，６月13日には日米通算150勝，７月18日には大リーグ通算50勝と記録を次々と打ち立てた。

地区優勝のかかったシーズン最終戦も先発，７回２失点で勝利投手となった。シーズン16勝は大リーグ移籍後最高の勝ち星で，進化するベテランの印象を強く植え付けた。

新たに大リーグに挑戦したマリナーズの岩隈久志投手は，シーズン当初は役割も明確にされない時期が続いたが，７月頃から先発登板の機会を与えられると結果を残し，結局９勝を挙げ，チームに欠かせない先発の柱になった。

同じくブルワーズの青木宣親選手は，入団テストを課される厳しい環境からのスタートだったがわずかなチャンスで結果を残し，１番ライトの座をつかみとった。安定したバッティングには力強さが加わり，さらに持ち味の俊足を生かし，チームに欠かせない存在となった。

ボストン・レッドソックスの松坂大輔投手は11年の肘の手術から回復，８月27日，先発した試合で７回１失点の好投，メジャー通算50勝を挙げた。しかしその後は先発投手としての役割を果たせない試合が続き，シーズン終了後，レッドソックスとの再契約を勝ち取ることはできなかった。

今シーズン限りで現役引退を発表した松井秀喜選手は所属チームが決まらない苦しいスタートだったが，４月末にタンパベイ・レイズとマイナー契約，５月29日にメジャー昇格するとその日いきなり本塁打を放ち復活をアピールした。しかしその後当たりがとまり，６月１日に放ったメジャー175本目のホームランが最後のアーチとなった。レイズとの契約が解除されたのち，今後の動向が注目されたが，12月末引退を表明した。

５．大相撲

一連の不祥事から，信頼回復を目指した日本相撲協会。徐々に観客も戻り始め，特に不入りが目立っていた九州場所でも５日間の満員御礼が出た。

５月の夏場所は史上初めて６大関が番付に載り熱戦が期待された。しかし上位陣が崩れ千秋楽の優勝決定戦は史上初の平幕同士の対戦となった。優勝は，92年，モンゴルから初めて大相撲界に入門した旭天鵬で，37歳８か月，史上最年長の初優勝だった。

名古屋場所，秋場所は大関日馬富士が２場所連続全勝優勝し，秋場所後70代横綱に昇進した。朝青龍引退後，２年８か月ぶりに東西の横綱が揃うことになった。

夏場所で故障し，その後日馬富士の連続優勝を許した横綱白鵬は九州場所では本来の力を発揮し，23回目の優勝を果たし先輩横綱の力を見せた。

１月の初場所は日馬富士が横綱として初の優勝。３月の春場所は白鵬が優勝し，横綱北の湖に並ぶ歴代３位24回目の優勝となった。

初場所中の１月19日，32回の優勝を記録した大横綱大鵬の納谷幸喜さんが亡くなった。「巨人・大鵬・卵焼き」と言われ，多くの国民に愛され，社会に明るい夢と希望と勇気を与えたとして，大相撲界からは２人目となる国民栄誉賞が授与された。

６．ゴルフ

男子ツアーではベテランの藤田寛之が，プロ20年にして初めての賞金王となった。藤田はシーズン終盤のビッグトーナメント，日本シリーズを３年連続で制覇し，年間で４勝を挙げた。常に注目の集まる石川遼は，１勝もあげられなかった2011シーズンとは違い，VISA太平洋マスターズで勝利し，アメリカPGAに挑戦する新シーズンに向けて，実力を発揮した。

77回目を数える日本オープンは沖縄本土返還40周年として初めて沖縄で開催された。強風に各選手が悩まされる中，久保谷健一が悲願の初優勝を遂げた。大会では沖縄のファンのために，青木，尾崎，中嶋のAONがそろって出場し，中嶋は最終日まで優勝争いに加わり，ファンを魅了した。

女子ツアーでは，韓国のジョン・ミジョンがツアー４勝を挙げて賞金王を獲得，相変わらず韓国や台湾勢の強さを見せつける展開となった。日本選手ではツアー３勝をあげた有村智恵が３位だった。その有村も2013シーズンからはアメリカLPGAに参戦する。

日本女子オープンでは木戸愛が，２日目，３日目と素晴らしいラウンドを見せたが，最終日には失速し，通算９オーバーの24位で終わった。優勝は中国のフォン・シャンシャン。この大会にはアメリカで活躍中の宮里藍や宮里美香も出場，優勝争いに一時，加わり，ファンを楽しませた。

シニアについては尾崎直道が賞金王を獲得，日本シニアオープンでは，フランキー・ミノザ，中嶋常幸，室田淳などが優勝争いを繰り広げたが，ミノザが粘り勝ちで初優勝を決めた。

番組制作の委託

１．関連団体等への番組制作委託

NHKは，質の高い放送番組の安定的確保を図るとともに，外部の専門的能力を効果的に活用することで，番組の一層の多様化を推進する視点から，関連団体へ番組制作委託を行っている。

2012年度も，NHKエンタープライズ・NHKエデュケーショナル・NHKグローバルメディアサービスに，大型企画をはじめ各分野の番組制作を委託，総合ビジョンにアニメ番組制作業務を，NHKサービスセンターに広報番組の制作を委託，NHKプラネットに全国および地方番組を，日本国際放送に国際番組の制作業務を委託した。

また，NHKでは，多様な番組を送り続けるために，関連団体を通じて番組制作会社への放送番組制作委託も行っており，外部のさまざまな制作パワーを効率的に活用している。

12年度の主な番組制作会社への制作委託

○地上波

総合では，『タイムスクープハンター』『キッチンが走る！』，Eテレでは『ETV特集』『Eテレ0655・2355』などを制作・放送した。

○衛星波

BS1では，『ドキュメンタリーWAVE』，BSプレミアムでは，『旅のチカラ』『晴れ、ときどきファーム！』などを制作・放送した。

２．外部プロダクションへの直接委託（外部制作委託・本体）

外部制作プロダクションが，関連団体を経由することなく，直接編成部門に提案する窓口として，06年６月に編成局内にソフト開発センターが設立され，12年６月からは組織改正に伴いコンテンツ開発センターがその窓口になった。特集番組や新番組の提案について，NHK，NHKの関連団体，それに番組制作プロダクションの３者が，番組の企画提案や制作・演出手法を競い合うことで，より高品質，効率的，多様な放送番組を創造することを目的としている。

12年度は，「企画競争」として１年間で15回の募集を行った。参加した制作会社は延べ568社から1,265件に上っている。12年度は『あなたが主役　50ボイス』（総合：木，22:55），『総合診療医ドクターG』（総合：木，22:00），『ドラマ10』「つるかめ助産院」「いつか陽のあたる場所で」（総合：火，22:00），『よる☆ドラ』「書店員ミチルの身の上話」（総合：火，22:55）などを外部プロダクション制作の定時番組として放送した。

外部プロダクションとの委託契約などにあたっては，下請法に準拠した手続きをとっている。また，「番組制作委託取引に関する自主基準」に基づき，公共性・透明性を高めるとともに，「新放送ガイドライン」を周知し，公共放送としての質の確保に努めている。

情報番組

Ⅰ．経済・社会情報番組

経済・社会情報番組部は，12年度も，時代と人に向き合う番組を放送し続けてきた。

12年度は『クローズアップ現代』『サキどり↑』『週刊　ニュース深読み』『ドラクロワ』『プロフェッショナル　仕事の流儀』『ファミリーヒストリー』『情報LIVE　ただイマ！』（以上，他部局との共管番組含む）の７番組を定時番組として担当した。

また『NHKスペシャル』をはじめとする特集番組も多数制作した。

（１）定時番組

『クローズアップ現代』は，「“いま”を切り取り“時代”を見つめる」を基本方針として20年目を迎えた。原発事故後，故郷帰還の見通しが立たない浪江町の動き，水田が放射性物質に汚染されるメカニズムを解明する試みなど，東日本大震災関連の番組を放送したほか，転換を迫られるエネルギー問題について，節電を巡る最新の取り組みや高レベル放射性廃棄物の最終処分法についての動き，“シェール革命”の最前線と世界への影響などについて，多面的に掘り下げて伝えた。

また，今後日本の生産人口が減少する中で注目を集める「働く女性」について，起業を巡る新たな動きを伝えたほか，IMFのラガルド専務理事をスタジオに招き，女性と男性がともに働きやすい社会を築く道を探った。

さらに，“時計遺伝子”研究最前線など医療分野の新たな知見，学校給食によるアレルギー事故対策など社会的に関心の高い出来事，木下恵介映画の再評価など，注目の話題も取り上げた。

『プロフェッショナル　仕事の流儀』は，あらゆる分野で活躍する一流の“プロ”の仕事を徹底的に掘り下げるドキュメンタリー番組。12年度は

プロ野球投手コーチ，心臓外科医，石工，天ぷら職人，駅弁販売営業所長など，さまざまなプロフェッショナルを通して，“仕事”の奥深さと，働くことの醍醐味を伝えた。また，高倉健，イチローなどのスペシャル版も放送した。

『サキどり↑』は，日本経済の再生を応援し，新しいライフスタイルを提案する経済情報番組。“減塩後進国”日本の新たな取り組み，日本一を目指し直径２センチのコマ作りにしのぎを削る町工場の人々の姿，新興勢力が続々と登場する“ブランド米”の最新の動きなど，生活者の目線で新しい価値観やビジネスの新潮流を伝えた。

『ドラクロワ』は，仕事，結婚，子育てなど悩みが尽きない女性たちを応援する番組。運命の出会いや家族の絆，主婦から年商80億円のとんかつ店創業者へと劇的な転身を遂げたサクセスストーリーなど，実際にあった“ドラマチックな苦労話”を通して，元気になるためのヒントを伝えた。

『ファミリーヒストリー』は，著名人の家族の歴史を徹底的に取材し，本人も知らなかった感動のドラマを伝える番組。中国，韓国，日本と海を越えて生き抜いてきた南果歩の一族，日米開戦間近にカナダから引き揚げ，原爆の後遺症に苦しみながら息子を育てた平岳大の祖母の物語など，時代に翻弄されながらたくましく生きた庶民の「家族の絆」を描いた。

（２）特集番組

経済・社会情報番組部では，ジャーナリスティックな切り口で，多彩な特集番組を制作してきた。

12年度は『NHKスペシャル』４本のほか，夏期特集『ドキュメント72時間』，開発番組『おやすみ日本』なども制作した。

『NHKスペシャル』の「終戦　なぜ早く決められなかったのか」では，戦争末期，日本がソ連の対日参戦を察知していたことを示す未公開資料を発掘。戦いを終える素地は整っていたにもかかわらず，決定責任を回避しあって犠牲者を増やした指導者の実態を浮かび上がらせた。番組は文化庁芸術祭優秀賞を受賞した。

夏期特集『ドキュメント72時間』は，カメラを３日間日本のとある１か所にすえ，その場所を行き交う人々の人間模様を描き出すドキュメンタリー番組。安達太良サービスエリア，新大久保の青果店など，４本シリーズで伝えた。

開発番組『おやすみ日本』は，視聴者からの「眠いいね！」投稿が一定数に達すると番組が終わる放送終了時間未定の双方向番組。ユニークなコンセプトと宮藤官九郎のMCが話題となった。

定時番組からの特集展開としては，いずれも『クローズアップ現代』からの展開で，『NHKスペシャル』の「職場を襲う“新型うつ”」，『特集ドラマ』「ラジオ」，『The Art of GAMAN　尊厳の芸術』を制作。『The Art of GAMAN　尊厳の芸術』はNHK主催の展覧会開催に合わせて放送した。

Ⅱ．生活・食料番組

生活・食料番組部は，現代社会のさまざまなテーマを「生活者の視点」から見つめ，視聴者の関心や疑問に答える情報番組やドキュメンタリーを制作した。

12年度は，月～金曜朝の『あさイチ』，月～水昼の『ひるブラ』，月曜夜の『サラメシ』，新番組として金曜夜の『情報LIVE　ただイマ！』と日曜朝の『うまいッ！』を定時番組として放送した。

（１）定時番組

『あさイチ』は，視聴者が“一番欲しい”と考えている情報が詰まった，“市場”のような活気ある番組にしたいという思いが込められた大型情報番組。３年目を迎えた。

主なターゲットは家庭を守る主婦。長引く不況やセーフティネットの綻びによるかつて無い不安な時代を賢く生きていくための「信頼できる情報」を全力を挙げて，いち早く家庭に届けてきた。社会問題，政治の話題から，エンタメ，生活実用情報までを，ニュースとはひと味違う「生活者の視点」から，掘り下げて伝えた。また，視聴者からの質問や意見をファックスやメールで受け付け，生放送の中で積極的に紹介。番組が身近な存在となることを目指し，確実な支持が得られた。

『ひるブラ』は中継番組。「行ってみたい！」「見てみたい！」「食べてみたい！」四季折々の姿を見せる全国各地の“旬”な場所を訪ね，その地域の魅力を生中継でダイレクトに届けた。東京のスタジオ出演者が画面の小窓で常に登場する演出で，率直な質問や反応を投げかける新しいスタイルが定着した。

『サラメシ』は「働く人のランチ」が番組の主役となっている番組。サラリーマンの昼食（サラメシ）から，多彩な職業の人々のさまざまなランチまでをつぶさに観察し，ランチに隠された仕事へのこだわりや感動のエピソードなどを紹介。働く人の今を楽しく鋭く見つめた。

金曜夜の『情報LIVE　ただイマ！』は，新番組として放送した生放送の情報番組。日本中に広

がる不安や閉塞感に多くの人が生きづらいと感じているが，今は苦しくても未来を楽しみに待てる日本にしたい。そんな未来志向を番組の大きなテーマとして設定。最新の出来事を徹底取材し，次々と巻き起こる社会問題や先送りにしたくない課題に，真っ向から挑んだ。さらにさまざまな専門分野で活躍するコメンテーター集団の多様な視点を通じて新しい日本の見取り図を提案した。

『うまいッ！』は思わずうまいッ！とうなるほどおいしい，日本各地の旬の農作物や魚介類，加工食品をテーマに，その食材が作られる現場にリポーターが密着。おいしさを生み出す技や，生産者の思いなどを引き出して取材。食材にまつわる健康効果や歴史・文化などのうんちく，その味を極める調理法なども紹介して，その食材の魅力をとことん描いた。食を支える人々と産地を応援する新番組として定着した。

（２）特集番組

今後の新番組の開発につながる特集番組として『マサカメTV！』を放送。一流の達人には，アッと驚く“まさか”の「目の付けどころ！」があり，そんな“マサカメ”をクイズ形式で紹介しながら「物事の意外な着眼点」を楽しむ新感覚番組として制作した。常識を大きく変換させて，どんなマサカメなのか親子で気軽に視聴できる番組を目指した。

また，『あさイチ』や『情報LIVE　ただイマ！』での取材を継続・発展させる形で『NHKスペシャル』を制作した。

「がんワクチン～“夢の治療薬”への格闘」では，がんの新たな治療法として注目されている，がんワクチンを取材。医師と患者の格闘の現場に密着，効果や課題を検証しながら，新薬開発を巡る攻防に迫った。

「魂の旋律～音を失った作曲家」では“現代のベートーベン”と呼ばれる日本人の作曲家，佐村河内守さんに密着。14年前に病で両耳の聴力を失いながら，クラシックで最も困難とされる交響曲を書き上げたエピソードをはじめ“命を削り，音を紡ぐ”実像に迫った。

Ⅲ．科学・環境番組

科学･環境番組部は,「科学報道」「科学ロマン」「生活科学」を３本柱として，総合テレビ・Eテレ・BSプレミアムで15本の定時番組と数多くの特集番組を制作。先端技術，医学，宇宙，自然，健康，食品などの最新情報を科学的な視点で分かりやすく伝えた。特に，東日本大震災関連では，地震，津波や原発事故に隠された事実を科学番組でしかなしえない手法でメカニズムを解き明かし，リスクに強い社会の構築に貢献した。また，潜水艇を使った深海の長期撮影によりダイオウイカの姿をスクープするなど，未知の世界を解き明かすロマンを広く社会に伝えた。

（１）定時番組

『ためしてガッテン』は放送開始18年目，役にたつ生活科学番組として不動の信頼を確立。『ダーウィンが来た！生きもの新伝説』と『コズミックフロント』は，圧倒的なスケールと美しい映像で見る者の心をうつ。Eテレの『サイエンスZERO』は，ニュース性の高い科学テーマを掘り下げて伝えた。

①総合テレビ

『ためしてガッテン』では，「プチ断食」「ドライアイ」「バナナのスゴ技」「包丁術」など，女性視聴者を強く意識したテーマを紹介。「リウマチ」「アルツハイマー予防」「脳卒中」など，最新の医学情報も分かりやすく伝えた。福井県の「油揚げ」や静岡県の「ミカン」といったご当地ネタも好評を得た。

『ダーウィンが来た！生きもの新伝説』では，一度は絶滅宣言が出た「クニマス」，海底にミステリーサークルを描く「フグ」など，研究者ですら知らない自然のドラマを粘り強く追跡して映像化した。「トラ」「ライオン」「ジンベエザメ」など人気動物の迫力映像で期待に応えるとともに，都会に進出した「カワセミ」や高尾山の「ムササビ」など，身近な生きものの姿も描いた。

また，科学的な視点から『クローズアップ現代』15本を制作した。原発再稼働にあたっては，原子力技術の限界や活断層など立地条件との関係を検証した。また医学界を継続的に取材することで，「手術で治す糖尿病」「市販薬の意外な副作用」「免疫寛容」といった医療最前線を伝えたほか，「隕石（いんせき）落下」や「B787緊急着陸」といった緊急報道も行った。

②Eテレ

最先端の科学情報番組『サイエンスZERO』では，ノーベル賞受賞わずか６日後の放送でiPS細胞研究の本質を掘り下げ，科学とは何かという深淵までを問うた。「金環日食」「ヒッグス粒子」「プロジェクション映像技術」など話題性の高い科学ニュースを分かりやすく解説し，原発事故についても，「冷温停止の課題」「原発直下の活断層」など最新科学の視点から独自に取材をした。

③BSプレミアム

『コズミックフロント』では，いま人類が知り得る最新の宇宙の姿を，最先端の研究情報とダイナミックなCGによって映像化。金環日食や探査機“キュリオシティ”の火星着陸もいち早く取り上げ，宇宙のロマンを徹底的に追求した。

『アフロディーテの羅針盤』は12年度の新番組。美しく生きたいと願う女性たちに，心理学や認知行動療法の分野からアプローチ。モデルや女優たちが実践する美の秘訣を，科学で実証した。

（２）特集番組

12年度の特集番組では，社会現象まで引き起こした「深海の超巨大イカ」など，科学ロマンを映像美とともに追求する一方，東日本大震災以来大きな国民的関心事となっている，地震のメカニズムや原発事故についてシリーズを組んで社会に警鐘を鳴らした。

『NHKスペシャル』は18番組を制作した。「宇宙の渚」は国際宇宙ステーションにNHKが独自に開発した超高感度カメラを持ち込み，地上400キロの宇宙の“渚”からオーロラや謎の発光現象スプライトなどを３回シリーズで紹介した。スプライトの回では日本賞・生涯教育カテゴリーの最優秀賞を受賞。「深海の超巨大イカ」は10年の長期取材によって，大きなものでは全長が18メートルにもなるダイオウイカを世界で初撮影することに成功した。巨大ほ乳類が命をかけて闘う貴重な瞬間をとらえた「クジラ対シャチ」とともに，NHKの自然番組制作力の高さを示した。また「火星大冒険」では，NASAの探査機“キュリオシティ”が地球に送り届けた１万枚を超える画像から，地球以外での生命存在を探る，人類科学ロマンの神髄を伝えた。

東日本大震災関連では11年度に引き続き「メルトダウン」シリーズを制作した。２本目の「連鎖の真相」，３本目の「原子炉“冷却”の死角」で，多くの専門家の協力と独自の取材により，徹底的に隠された事実を追求した。「発掘記録・知られざる救出劇」では震災直後にもかかわらず懸命に人命救助にあたる人々のドラマを，埋もれていた映像と救急通話音声で描き，緊急時にあふれ出す人間の善性をあぶり出した。

ロボットコンテスト関連では，８月にABUアジア・太平洋ロボコンを香港で開催し９月に放送した。また，25回目を迎えた高専ロボコンは11月に両国・国技館で全国大会が開催され，12月に放送した。番組進行と連動して，PCやスマホにロボット情報を自動配信していくセカンドスクリーンのサービスも新しく開拓した。

また，BSPの特集としてBBCとの国際共同制作『フローズンプラネット』を６本シリーズで展開，この番組で南極を旅したナビゲーターの大沢たかお氏は，１年後に北極圏の各地を訪ね『もうひとつのフローズンプラネット』として放送した。

教育番組

Ⅰ．青少年・教育番組

青少年・教育番組部は，幼児から青少年までの若い世代に向けて，楽しみながら豊かな情操を育むことのできる教育番組や学校放送番組，ファミリー向け番組を制作した。

多メディア時代を迎える今日では，「３スクリーンズ」としてテレビ・パソコン・モバイルを連動させた番組開発に積極的に取り組み，デジタル時代にふさわしいサービスを提供している。

12年度は，高校生を対象に週１回で開始した『Rの法則』を月～木曜の帯放送に拡充した。ティーン誌やファッションイベントなどとのコラボ企画で高校生とその親世代に浸透する一方，ホームページ（HP）へのアクセスも増加し，番組が募った会員数はおよそ３万6,000人に上っている。

また，家族に向けたニュース解説番組『週刊ニュース深読み』は番組開始から３年目を迎え，世の中の一番の関心事を分かりやすく深く読み解いている。

（１）幼児向け番組

12年度は，前年度から進めてきた朝の編成の内容充実に努め，幼児向け番組のさらなる訴求力を高めた。また『デザインあ』がグッドデザイン大賞をはじめ，国内外のコンクールに多数入選し，番組の斬新さが高く評価された。

一方，『おとうさんといっしょ』『ワラッチャオ』『ノージーのひらめき工房』などを特集として提案，試作に取り組み，13年度の定時化に繋がる番組開発を行った。

（２）こども番組

小学生を対象とした番組『ビットワールド』『大！天才てれびくん』では，データ放送やPCを利用した視聴者参加型のゲーム企画を展開し，新しい双方向スタイルの番組を提示した。家庭にあるTVリモコンの４色ボタンを押すだけで回答できるという手軽さで，毎回平均７万人を超える視聴者が番組に参加した。番組ホームページもよ

り楽しいものへと改良を重ね，アクセス数を伸ばしている。ハイブリッドキャストへの展開も視野に入れ，現代の子どもたちのメディア環境にマッチしたエンターテインメントを提供している。

（３）若者番組

09年度にスタートし，ウェブ上で10代と20代の若者が議論を交わす『青春リアル』。いじめや就職など今の10代・20代の悩みや疑問がウェブと連動しながらリアルに語り合われた。月１回のペースで，番組特別企画『福島をずっと見ているTV』を12年度も継続。原発事故後に苦しむ福島県の若者の置かれている現状などに迫り，切実な思いに耳を傾けた。

10月から12月まで放送した『ディープピープル』は，同じ道を極めた３人のプロフェッショナルが一堂に会し，台本なし，司会なしで「己の技と心の内」を本気で語り合った。「振付師」「男子500mスピードスケート選手」「CMクリエーター」など，各界をリードする実力者たちが，一般の人たちがうかがい知ることのできない世界についての深いトークを繰り広げた。

（４）特集番組

10月には，家族で楽しめる番組として，子どもの疑問に分かりやすく答え，子どもに評価してもらう番組『ギャクテン教室！』を総合テレビで放送し，暮らしから政治まで身近な事象を模型などを使ってひもといた。

大みそかには，『しあわせニュース2012』を総合テレビで生放送し，全国各局から寄せられた心温まる話題に紅白直前のNHKホールからの中継を交え，お茶の間に新たなくつろぎを提供した。

この他にも定時番組では，『大！天才てれびくん』『グレーテルのかまど』『Rの法則』などが放送時間を拡大するなどして特集番組を制作した。いつもの番組をさらにパワーアップし，番組ファンに届けた。また『福島をずっと見ているTV』『Rの法則』などでは被災地での公開収録も行い，復興支援を後押しした。

Ⅱ．学校教育番組

12年度は，学校へのデジタルテレビや電子黒板の導入，校内LANの整備がさらに進んだ。急速に進む教室のICT化に対応するため，NHKデジタル教材をさらに充実させた。学校教育番組の中からは31番組を，またクリップは理科や社会分野を中心に約4,000本をインターネット経由で提供している。また，電子黒板に対応した新たなウェブ教材の開発も行った。

（１）定時番組

学校教育番組および関連番組として46番組（小学校向けテレビ34，同ラジオ２，中学校・高等学校向けテレビ10）を放送した。

新番組としては，小学校１年生向けの特別活動番組『できた できた できた（家庭・社会生活編／健康・からだ編）』，小学校３～６年生それぞれに向けた国語番組『おはなしのくにクラシック』，小学校６年生向けの社会科番組『歴史にドキリ』，小学校や中学校の総合的な学習の時間や特別活動に対応した『メディアのめ』や『げんばるマン』，特別支援教育や学級活動向けの『スマイル！』を放送した。また，過去の学校放送番組をアンコール放送する『学校放送ライブラリー』を継続した。

（２）特集番組

NHK全国学校音楽コンクール関連として，『発表！Nコン2012課題曲』『Nコンマガジン・スーパー合唱教室』『YUIとみんなのテレビ“fight”』等を放送し，10月に行われる全国大会に向けて多面的な展開を図った。また，「NHK杯全国放送コンテスト」関連として，『ティーンズビデオ』『ティーンズラジオ』で優秀作品を紹介した。さらに，旬な教育問題を取り上げる番組の開発にも取り組み，『エデュカチオ～どうする？教育のデジタル化』を11月に放送した。

日本賞関連では，『第39回日本賞授賞式』『まるごと紹介！2012年日本賞受賞作品』『2012年日本賞 Presents　世界のとっておきテレビ』を放送した。

春・夏・冬休みに放送するテレビクラブでは，魅力的な映像で世界と数学の深遠な関係に迫る『Rules～美しい数学の世界』や子どもたちに大人気のドキリソングを一挙公開する『歴史にドキリスペシャル』などを放送した。

また，いじめや防災に関する番組の開発に取り組んだほか，放送60年特集『がんこちゃんスペシャル～プリンプリンと大冒険』や『なわとびかっとび選手権2012』など，多数の特集番組も放送した。

（３）教育イベント関連

①「第63回放送教育研究会全国大会」（８月２～３日）は，東京都渋谷区・国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれた。ネット社会におけるヒューマンコミュニケーションのあり方などをテーマに，学校現場でどう番組を視聴・活用していくかについて，活発な議論が展開された。

②「第79回NHK全国学校音楽コンクール」には，小・中・高合わせて2,581校が参加。NHKホールで行われた「全国コンクール」（10月６～８日）では，小学校，中学校，高校の部を生で放送した。

③「第59回NHK杯全国高校放送コンテスト」には地方予選を含め，全部門合わせて1,667校が参加した。

④「第29回NHK杯全国中学校放送コンテスト」には地方予選を含め，全部門合わせて612校が参加した。

⑤「先生のためのデジタルテレビ・ICT活用講座」は全国10か所で実施し，学校放送と，それに連動したデジタル教材の具体的な活用方法を学ぶ体験型の研究交流講座が開催された。その他，専門の担当者が学校現場などで，デジタル教材の活用法を紹介する「NHK for Schoolリエゾン」という活動を開始，およそ30か所で研修等を行った。

（４）学校教育関連委員会

①教育放送企画検討全体会議

（年２回／６月，12月）

各ブロックからの意見を集約し，具体的な番組計画を立案した上で，学識経験者，全国放送教育研究会連盟役員，教員，教育行政関係者と，12年度の学校放送の制作方針および学校放送の将来の在り方について検討を行った。

②学校放送番組委員会

各番組の企画・制作にあたって，学識経験者，教員，教育行政関係者などと意見交換を行い，利用現場の意向や要望を反映させた。

Ⅲ．趣味・実用番組

（１）定時番組

定番ジャンルである料理については，12年度で放送55周年を迎える『きょうの料理』，初心者や若い人に向けて料理の基本を分かりやすく伝える『きょうの料理ビギナーズ』を月～木曜の午後９時台に放送した。

同じく長年にわたって番組を制作してきた園芸については，野菜作りの楽しさを伝える『趣味の園芸やさいの時間』，園芸初心者向けのミニ番組『趣味の園芸ビギナーズ』，本格的な園芸ファンのニーズにも応える『趣味の園芸』の３番組を，日曜朝８時台に放送した。

主に女性をターゲットにした番組としては，手芸など手作りの楽しさを伝える『すてきにハンドメイド』を木曜夜９時台に，メイクやエクササイズなど「カラダの外と中からきれいになる」ノウハウを伝える『きれいの魔法』，および各界の第一線で活躍する20～40代女性のライフスタイルを描く『グラン・ジュテ』を土曜夜間に放送した。

長年の伝統をもつ趣味番組に関しては，トレンドをより意識したイメージにするためタイトルを『趣味Do楽』と刷新して月・火曜夜９時台に放送，マラソンや洋菓子作りなど，若い視聴者にアピールするテーマを盛り込んだ。

月～木曜の夜間には，暮らしに役立つさまざまなノウハウをコンパクトに伝える５分ミニ番組『まる得マガジン』を放送した。

新たな試みとしては，若者の視聴者を対象に，生活の中で素朴に感じる疑問を経済学の観点からじっくりと考察する『オイコノミア』を火曜夜11時台にスタート。

さらに，ここ数年で大量に高齢者世代の仲間入りをする団塊世代をターゲットに，アクティブな高齢者が求める生活情報を伝える番組『団塊スタイル』を開始し，それぞれ一定の支持を獲得することに成功した。

囲碁・将棋ファン向けには，毎週日曜の昼にEテレで『将棋の時間』『囲碁の時間』『囲碁・将棋フォカース』を，BSプレミアムでは，囲碁・将棋のタイトル戦の中継など，さまざまな形で放送した。

（２）特集番組

実用番組では，毎年恒例となっている『きょうの料理55年　クッキングコンテスト2012』を11月に放送，視聴者からのオリジナルレシピを『きょうの料理』の人気講師が審査した。今回は15分以内で作る「朝ラク！スピード弁当部門」と，「わが家の自慢料理部門」の２部門で募集・審査を実施，その様子を紹介した。さらに，２月には，受賞者が登場する『きょうの料理』をあわせて放送した。

『趣味の園芸』ではミニコーナー『花信』がスタート。視聴者から募集した花にまつわる思い出を朗読と美しい映像で紹介し，好評を博してきた。この蓄積を活用し，年末年始の朝６時台のミニ番組として放送した。

囲碁・将棋ファンに向けて，『決定！こども囲碁名人』『決定！こども将棋名人』『全日本アマチュア将棋名人戦』『将棋界の一番長い日』『将棋の日』『テレビ囲碁アジア選手権』『新春お好み将棋・囲碁対局』などの特集番組を放送した。

Ⅳ．外国語講座番組

（１）定時番組

Eテレでは19番組，ラジオ第２放送では25番組の合計44の定時番組を制作放送した。

①Eテレ

日本人の英語学習を総合的にサポートする“英語グランドデザイン”は２年目を迎え，CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づくレベル分けを行い，初級～中級の番組を整備した。『テレビで基礎英語』は中学校３年間で学ぶ内容のエッセンスを楽しみながら学べるように設計。学びなおしたい大人向け初級講座『おとなの基礎英語』はアジアを舞台に旅行会話を紹介。ターゲットとなる20～40代男女の潜在的な需要を捉え，４月号テキストが実売10万部を超えるヒットとなった。人気シリーズ，『リトル・チャロ』は東北編として登場。子犬のチャロが東北を旅する物語の10分アニメと，それを教材にした『３か月トピック英会話』を放送した。また世界が注目するプレゼンイベント，アメリカのTEDカンファレンスを題材とした『スーパープレゼンテーション』を開始。新たな語学教養番組として，知的好奇心旺盛な視聴者層を開拓した。

他言語では独・仏・中・西・伊・ハングル・露・アラビアの８言語のテレビ番組と，ポルトガル語を加えた９言語のラジオ番組を制作。３年ぶりの新作となった『テレビでアラビア語』は目覚ましい変化を遂げているドバイを舞台にミステリー仕立てのスキットを制作。ハングルは世界を舞台に活躍する人気グループ2PMがレギュラー出演。５分間のミニ番組も放送し，認知度アップに貢献した。『テレビで中国語』ではダイレクトメソッド（講師が中国語で指導）を取り入れ，中国語の発想から学ぶテクニックを紹介した。欧州４言語は「ユーロ24」の第３シリーズに突入。旅先で現地の人とコミュニケーションをとるための表現「街歩きフレーズ」をそろえた。11年度に引き続き，それぞれの言語の特徴や違い，文化的な背景を比較した。それぞれの国に特に思い入れの深い，学習の動機を持つ生徒役が番組を盛り上げた。イタリア語は北村一輝，ドイツ語は勝村政信，フランス語は村治香織，スペイン語は森口瑤子。

②ラジオ第２

人気の高い中国語・ハングルで中級者向けの番組『レベルアップ中国語』『レベルアップハングル講座』を新設。テキストも別々に発行し，より学習効果を実感できるようになった。英語番組では入門と中級をつなぐ初級向けトレーニング番組『英会話タイムトライアル』を開発。番組を聞きながら声を出して練習問題に参加する方式を提案した。好評の『攻略！英語リスニング』は前期に続き，後期も新作を放送。そのほか『まいにち○○語』シリーズでは，入門から中級，応用編まで，幅広いテーマ・レベルの番組群を展開した。

（２）特集番組

新番組『スーパープレゼンテーション』では番組の認知度を高めるため，時間拡大版の特集番組を５月の連休に放送。またインターネットに親和性の高い層に人気があることに着目し，“ハングアウト”と呼ばれるインターネット上の会議システムを利用したトークイベントを実施。ナビゲーターとプレゼンの話者，視聴者代表が直接意見を交わす様子を配信するなど，先駆的な取り組みを行った。定番となった『ニュースで英会話年末スペシャル』はクイズ形式から課題に投稿する形態に移行。番組の目標である「ニュースで英語を学び，自分の言葉で発信する」体験を提供した。このほか，年末年始，ラジオで『電話であなたと英会話』と題し，『英会話タイムトライアル』の手法を用いた視聴者参加型番組を実施。また，ヨーロッパ４言語で制作した『心にしみるユーロソング』（50分×4番組）では，語学講師がDJさながらに各国の音楽を案内し，楽しみながら語学学習への興味を喚起するものとなった。さらに年度末には，ヨーロッパ４言語で13年度新規開講のテレビ講座のコンセプトと，最新の語学教授法について紹介する『EURO24キックオフ！感覚で学ぼうスペシャル』を制作，視聴者に語学学習のための新たな視点を提供した。定時番組・特集番組を通じて，幅広いバリエーションを維持し，視聴者の多様なニーズに応える語学番組を放送した。

Ⅴ．文化・福祉番組

文化・福祉番組部では，教養・生涯学習への多様な要望に応える文化番組，子ども・障害者・高齢者の課題に取り組む福祉番組など，多彩で高品質な番組を制作してきた。

12年度は，従来通りの教養および知的エンターテインメント番組に加えて，発災から２年目に入った東日本大震災に関連した番組をもうひとつの重要な柱として番組の制作に当たった。福祉番組や宗教番組，『ETV特集』などで，放射能被ばくの実態や，その後も続く避難の状況，復興に向け

ての試行錯誤について，文化・福祉番組部ならではの蓄積や経験を生かした番組を放送した。

一方の知的エンターテインメントは，総合テレビの定時枠で『探検バクモン』『地球イチバン』『仕事ハッケン伝』の３本を，またEテレでは，夜11時台に『さかのぼり日本史』『100分de名著』『仕事学のすすめ』などを放送した。

（１）定時番組

総合テレビでは，５年間放送した『爆笑問題のニッポンの教養』を『探検バクモン』にリニューアルした。さまざまな分野の研究室を訪ねるこれまでのスタイルから，爆笑問題とゲストが，視聴者に代わって人気の文化財や関心の高い組織，製造の現場などを探検するスタイルに変更，海上保安庁の第１回をスタートに，姫路城や造船所，タイプの異なる美術館や博物館を縦横無尽に訪ね歩いた。さらに６月には沖縄の米軍基地を，11月には‘いじめ’のないフリースクールを，３月には原発事故から２年になる福島を，特集として訪問し，時事性を意識したテーマにも取り組んだ。

２年目を迎えた『地球イチバン』は，放送が夜８時台から，10時台に移設された。内容面では，特異な気候や環境に生きる人々の暮らしを訪ねる回よりも，視聴者の関心が高いテーマで世界一の評価を受けている国や地域の知恵を訪ねる回を増やすシフトを行った。ペットに優しい街や，女性や母親の権利を充実させている国，子供の学力を急速に伸ばした国などを訪ね，日本にも参考になる仕組みや考え方を紹介。その一方で，文句なしに視聴者の興味を惹きつける世界一のサーカス集団や宇宙開発で世界一の街などのテーマも取り上げた。

同じく２年目となった『仕事ハッケン伝』は，有名タレントが就いてみたかった仕事の現場で真剣に働く姿をドキュメントするスタイルを継承。１週間程度ではあるが，お客様扱いなしの厳しい条件下での職業体験を通じて，働くことの意味やチームワークの大切さ，そしてそれぞれの企業の社会とのつながりを掘り下げることを目指した。「羽田空港グランドスタッフ」を再開第１回に，「パティシエ」や「木工職人」「スポーツカメラマン」「庭師」といった技術職から，「テーマパーク」や「温泉旅館」といったサービス職など，さまざまな職種を取り上げた。反響は，就職活動を控えた学生や，社会に出て間もない20代からのものが目立ち，視聴者層拡大の期待に応える形となった。

Eテレの『ETV特集』では，11年と同様に震災後・原発事故後の日本社会の課題を社会的な弱者の立場から凝視するとともに，歴史的・文化的な視点をベースにしたバラエティー豊かな番組編成を目指した。前者では，視聴者から高い評価を得た「ネットワークで作る放射能汚染地図」のシリーズを継続，さらに「飯舘村一年～人間と放射能の記録」「チェルノブイリ原発事故・汚染地帯からの報告」「ルポ　原発作業員」などを放送した。後者では，人を裁くとは何かという重いテーマに正面から挑んだ「永山則夫 100時間の告白」，国家の政策に翻弄される島々の苦難を海を越えて結んだ「オキナワとグアム～島が問うアジア・太平洋の未来」，80歳になった作曲家が最新のテクノロジーを取り入れて交響曲を完成させるまでの姿を追った「音で描く賢治の宇宙～冨田勲×初音ミク 異次元コラボ」，いじめや虐待の背景に発達障害のひとつが深く関わっていることを明らかにした「人とうまくつきあえない～いじめ・虐待と自閉症スペクトラム」など，多彩な番組を放送した。

82年から続く『こころの時代』でも，東日本大震災をきっかけに問い直される人生の意味や，人々が直面する困難を乗り越える術を，宗教関係者だけでなく多様な分野で活躍されている人々との長時間インタビューを通して掘り下げた。また，12年度の年間シリーズとして，「永遠のいのちの教え～法華経のことば」を放送した。

また，夜の11時台には，11年度に引き続き『100分de名著』『さかのぼり日本史』『仕事学のすすめ』の３つの番組を，いずれも毎月テーマを決めて４本放送した。

３年目となった『仕事学のすすめ』では，20代から40代のビジネスパーソンを主な視聴者層に位置づけ，仕事の方法と哲学を伝授することをコンセプトに，ビジネスの第一線で活躍する人々（ヤマトHDの瀬戸薫さん，芸能プロダクションの太田和代さんなど）に仕事の奥義をうかがう一方，文化やスポーツに携わる方々にもジャンルを広げてパワーアップを図った。（ファッションデザイナーのコシノヒロコさん，脚本家・放送作家の小山薫堂さん，プロスキーヤーの三浦雄一郎さんなど。）

２年目の『100分de名著』では，読みたいと思いながらも踏み出せなかったり，途中で挫折してしまった古今東西の名著を分かりやすく解説することをコンセプトに，紫式部の『源氏物語』やカフカの『変身』などの文学作品を読み解く一方，アインシュタインの「相対性理論」など科学分野の名著にも光をあてた。中でも，フランクルの『夜

と霧』と「般若心経」は，驚異的なテキスト販売数を記録し，視聴者の知識欲の高さをうかがわせる結果となった。

同じく２年目の『さかのぼり日本史』は，テーマを外交史にさだめ，現代を出発点に「なぜこうなったのか」と問いかけながら過去へと歴史をさかのぼるスタイルを継続した。ひと月４回のシリーズでおおむね一つの時代を紹介。現代から古代までを通史でさかのぼるスケール感が，12年度もコアな歴史ファンから高く評価された。

福祉のジャンルでは，大幅なリニューアルを行った。長年，福祉関係者から強い支持を得てきた『福祉ネットワーク』と『ハートをつなごう』を，より多くの視聴者にみていただくことを目標に『ハートネットTV』に一元化，さまざまなシリーズを組み合わせて，福祉の課題や当事者の思いを多角的に伝えるように努力した。

ウェブ連動の新たなスタイルを確立することを目標に，シリーズ「カキコミ！深層リサーチ」では，SNSで情報を発信し，ウェブに寄せられた声をもとに取材するスタイルに挑み，「てんかん」や「就活期のうつ」「性暴力被害」「未婚ミドル」などバラエティーに富んだ編成を行った。

貧困の実態を“可視化”することを目標にスタートしたシリーズ「貧困拡大社会」では，生活苦に陥った人々の生の声を届けるとともに，若者の過労死の実態や彼らを追い詰める“ブラック企業”の存在，光があたりにくい女性の困窮状態，貧困から抜け出すための家計の管理や支援策，さらにはアメリカの若者の貧困の実態などを取り上げた。

『ハートをつなごう』を継承するシリーズ「Our Voices」では，生きづらさを抱えた当事者にとことん語り合ってもらうことを目指し，「LGBT」や「発達障害」「虐待」「いじめ」などについて，当事者や経験者の視点から掘り下げた。

“社会を変える”ことを目標に活動しているNPOや社会企業家の取り組みを紹介するシリーズ「未来へのアクション」では，大学のキャンパス内で収録を行い，会場の若者たちとの活発なやり取りを目標のひとつに掲げた。障害者の就労支援や病児の保育サポート，復興を支援するクラウドファンディングや起業塾など，理想と情熱にあふれる先駆者たちの取り組みや考え方が，これから社会に出る若者たちに大きな刺激を与えた。

そしてシリーズ「福マガ」では，その月の福祉関連のニュースをまとめるとともに，話題のテーマを分かりやすく切り込むスタイルを目指した。

また，継続して，「ハート展」や「介護百人一首」「リハビリ応援団」「公開すこやか長寿」の放送も行い，フリー枠では個性的なドキュメンタリーの制作も続けた。

一方，これまで継続的に行ってきているホームページ「NHK福祉ポータル　ハートネット」も大幅なリニューアルを行い，掲示板やツイッターを通じての視聴者どうしの議論がこれまで以上に活発に行われた。

定時化させた『オトナへのトビラTV』では，若者のさまざまな悩みにスポットを当て，就職やアルバイトなど社会との向き合い方から，性に関する悩みまでを，カジュアルなスタジオ演出を織り交ぜて伝え，大きな反響を生み出した。

ほかに，『みんなの手話』『ろうを生きる　難聴を生きる』『ワンポイント介護』『ワンポイント手話』，またラジオでは『聞いて聞かせて』『社会福祉セミナー』などの番組で，さまざまな障害のある人に対しての情報提供を行った。

（２）特集番組

特集番組では，『NHKスペシャル』で，「職場を襲う“新型うつ”」（４月），「原発事故調　最終報告～解明された謎 残された課題」（７月），「父と子～市川猿翁・香川照之」（１月），「空白の初期被ばく～消えたヨウ素131を追う」（１月），「激動イスラム 第１回　アラブの春はどこへ～変質する民主化革命」（２月）を制作。

その他，東日本大震災の被災地を応援する『明日へ～支えあおう』の枠で，「２本シリーズ・渡辺謙“僕にできること”」（４月），「きみに託す医のバトン」（10月）を放送。また，文化面では，５月に満100歳で亡くなった映画監督・新藤兼人さんをしのぶ「100年生き抜く 映画人・新藤兼人」を特集で放送した。

芸能番組

Ⅰ．ドラマ番組

12年度のドラマ番組は，13年のテレビ放送60年に向けて，より多様なテレビドラマの制作に取り組んだ。連続ドラマ，単発・シリーズドラマそれぞれにターゲットを明確にし，おのおのの特長を生かしてクオリティーの高いドラマ番組の制作を目指した。連続ドラマでは『大河ドラマ』「平清盛」，『連続テレビ小説』「梅ちゃん先生」「純と愛」がいずれも好評を博したほか，『ドラマ10』では「はつ恋」などが女性層を中心に話題を呼び，『土

曜ドラマスペシャル』の「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂」や『BS時代劇』「薄桜記」，テレビ60年記念ドラマ『メイドインジャパン』が，視聴者層の拡大に尽力した。

（１）連続ドラマ

①『大河ドラマ』

63年「花の生涯」から始まった『大河ドラマ』も，12年の「平清盛」で第51作目となり，日曜夜８時の時代劇として視聴者に定着している。

「平清盛」は，作・藤本有紀，主演・松山ケンイチ。平安末期，武士が低き身分と差別された時代に，瀬戸内の海賊を束ね，やがて武士の頂点，日本の覇者となった平清盛の躍動感あふれる壮大な生涯を描いた。全50回。

②『連続テレビ小説』

こちらも「朝ドラ」として定着し，12年度前期の「梅ちゃん先生」で86作目となる。作・尾崎将也，主演・堀北真希。終戦直後，焼け野原と化した東京・蒲田で，昭和の高度経済成長を支える名もなき人々に寄りそって，地域医療に生きようとするヒロインの，ひたむきな日々を描いた。全156回。

12年度後期は大阪局制作「純と愛」。作・遊川和彦。出演・夏菜，風間俊介。純と愛の若い夫婦を中心にお互いの家族や大阪下町の人々を巻き込んだ愛情物語を繰り広げた。全151回。

（２）単発・シリーズドラマ・オーディオドラマ

『土曜ドラマスペシャル』は，病魔と闘う高校野球部女子マネージャーと彼女を励ます部員を描いた「あっこと僕らが生きた夏」（２回），死の別離を超えてなお生き続ける夫婦の絆を描いた「永遠（とわ）の泉」，不屈の精神で戦後日本を復興に導いたリーダーの苦難の舵取りを克明に描いた「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂」（５回），元・動物学者で43歳の新米刑事が完全犯罪に挑む「実験刑事トトリ」（５回）など社会派ドラマを放送し，男性層を中心とした視聴者から好評を得た。

また，火曜の午後10時の『ドラマ10』では，大人の純愛物語を描いた「はつ恋」（８回），「つるかめ助産院～南の島から」（８回），「シングルマザーズ」（８回），「いつか陽のあたる場所で」（10回）を放送し，午後10時55分からの『よる☆ドラ』では，「眠れる森の熟女」（９回），「恋するハエ女」（６回），「書店員ミチルの身の上話」（10回）の話題作を放送。30～50代女性に視聴者層を広げた。

BSプレミアムで新設された『プレミアムドラマ』では，「恋愛検定」（４回），「高橋留美子劇場」（２回），「そこをなんとか」（９回）のほか，北海道発の「神様の赤ん坊」などの地域局発のドラマも放送した。

また，『BS時代劇』では，「陽だまりの樹」（12回），「薄桜記」（11回），「猿飛三世」（８回），「火怨・北の英雄　アテルイ伝」（４回）を放送し，時代劇ファンの期待に応えた。

特集ドラマでは，企業家や会社員に好評を博したテレビ60年記念ドラマ『メイドインジャパン』，正月時代劇『御鑓拝借～酔いどれ小籐次留書』，『極北ラプソディ』（２回），創作テレビドラマ大賞の大賞受賞作『最終特快』，『大河ドラマ大作戦』，テレビ60年マルチチャンネルドラマ『放送博物館危機一髪』，昭和の名作時代劇を復活させたスペシャル時代劇『大岡越前』などの意欲的なドラマを制作。

オーディオドラマも定時番組『FMシアター』『青春アドベンチャー』『新日曜名作座』の他，『特集オーディオドラマ』を放送した。

Ⅱ．エンターテインメント番組

エンターテインメント番組部では幅広い層の視聴者に親しんでいただける質の高い娯楽番組を制作した。12年度は，定時番組のブラッシュアップを図るとともに，13年度以降を見据えた新番組開発にも積極的に取り組んだ。

また，『鶴瓶の家族に乾杯』『MUSIC JAPAN』などの定時番組や，『震災から２年“明日へ”コンサート』『特集NHKのど自慢～宮城県岩沼市』などの特集番組，復興支援ソング「花は咲く」関連プロジェクト，さらには『第63回NHK紅白歌合戦』などさまざまな番組を通じて，復興支援のメッセージを発信し続けた。

（１）公開・派遣番組

視聴者とNHKを結びつける役割を担う公開・派遣番組の制作は，当部の業務の中核をなしている。

12年度は，『NHKのど自慢』（年間46回），『NHK歌謡コンサート』（２回を地方派遣），『ごきげん歌謡笑劇団』（12回），『オンバト+』（８回），『BS日本のうた』（33回），『ザ少年倶楽部』（２回），『真打ち競演』（14回），『キャンパス寄席』（６回）のほか，チャリティーイベント『歌謡チャリティーコンサート』（２回）など，数多くの公開・派遣番組を制作した。

また，『特集NHKのど自慢～宮城県岩沼市』をはじめ，東日本大震災の被災地でも実施，復興支

援に寄与した。

（２）定時番組

12年度は，新たに『ユーミンのSUPER WOMAN』『音楽熱帯夜』『TAKESHI Art Beat』『くるり電波』『洋楽80'sファン倶楽部』を立ち上げた。従来からの定時番組もあわせ，音楽，バラエティー，演芸，知的エンターテインメント，ラジオ番組など，多様な番組コンテンツを提供した。

音楽番組は放送800回を迎えた『NHK歌謡コンサート』をはじめ，『NHKのど自慢』『SONGS』『MUSIC JAPAN』『BS日本のうた』『ザ少年倶楽部』など，幅広い世代の視聴者に合わせて制作。バラエティー番組は，『ごきげん歌謡笑劇団』ではコロッケを新司会者に迎え，番組内容も一部刷新，『鶴瓶の家族に乾杯』ではより多様なゲスト出演者を心がけるなど，視聴者層の更なる拡大をはかった。演芸番組は『○○○○の演芸図鑑』『オンバト+』『笑・神・降・臨』『日本の話芸』『真打ち競演』『キャンパス寄席』など，多彩なラインナップで，ベテラン演芸ファンから若年層まで幅広い層のニーズに応えた。また知的エンターテインメント番組として，Eテレで『ミュージック・ポートレイト』『ユーミンのSUPER WOMAN』『佐野元春のザ・ソングライターズ』『スコラ 坂本龍一 音楽の学校』を制作，視聴者の知的好奇心を刺激するエンターテインメントを提供した。ラジオ番組はアイドル，J-POP，洋楽，演歌・歌謡曲といった幅広いジャンルの音楽番組，『日曜喫茶室』『トーキング ウィズ 松尾堂』などラジオの特性を生かした音楽以外のジャンルの番組を制作し，多様なラジオリスナーのニーズに応えるとともにNHKへの接触者率の向上をはかった。

（３）特集番組

12年度は，定番の大型歌謡イベントや定時番組を発展させた特集番組，視聴者層の拡大を狙った特集番組など，年間でおよそ150本を制作した。

『第63回NHK紅白歌合戦』は，“歌で 会いたい。”というテーマのもと，歌を通して新しい感動に出会い，明日への明るい希望を抱ける番組とした。出演歌手の圧倒的なパフォーマンス，国内外からの中継，斬新な映像演出などに対し，視聴者から大きな反響が寄せられた。このほか，大型歌謡イベントとしては，『第44回思い出のメロディー』などを制作した。

衛星放送では，『震災から２年“明日へ”コンサート』などの大型イベントや，『昭和の歌人たち』といったシリーズ番組，長渕剛，AKB48，いきものがかり，高橋真梨子，といった話題のアーティストの特集番組，ターゲットを明確にした『洋楽倶楽部』など，衛星放送ならではのコンテンツを数多く制作した。

また，開発番組として『LIFE！～人生に捧げるコント』や『オンガクジェネレーション』『Eダンスアカデミー』などを制作・放送，13年度の定時番組化や継続制作に結び付けた。

Ⅲ．音楽・伝統芸能番組

クラシック音楽から日本の伝統芸能，民謡，演劇，ポップスなど幅広いジャンルで，視聴者の期待に応える良質な番組コンテンツを制作し，公共放送として日本の放送文化における重要な役割を担った。

（１）テレビ定時番組

『にっぽんの芸能』は，初心者向けの「花鳥風月堂」と愛好家向けの「芸能百花繚乱（りょう）」という２階建ての構成で，古典芸能受容層を開拓し，その魅力をより広く伝えることを狙った。歌舞伎の話題公演やバレエ音楽による舞踊など，多彩な演目を紹介した。

新番組『ららら♪クラシック』では，初心者から通まで幅広い層にアピールすることを目指した。直木賞作家の石田衣良さんと作曲家の加羽沢美濃さんによる親しみやすい司会進行で，N響だけでなく国内外の一流ソフトを紹介。また公開収録を３回実施し，特集企画として放送した。

ほかにクラシック音楽分野では，『クラシック倶楽部』で，第一線で活躍するアーティストによる室内楽の演奏を放送。『特選　オーケストラ・ライブ』では，世界のトップオーケストラのコンサート，NHK交響楽団の定期公演などを5.1サラウンドで放送。『プレミアムシアター』では，世界のクラシック音楽公演，演劇公演の中から，国際共同制作・独自収録・番組購入など，バラエティー豊かなラインナップで放送した。

（２）公開派遣番組

総合テレビでは，『それいけ！民謡うた祭り』を，全国９か所で公開録画。地元の民謡や郷土芸能を紹介するとともに，ふるさとの歌である民謡で，被災地の人々の心を支え，復興を応援しようと，積極的に東北の民謡を取り上げた。

またEテレの『スクールライブショー』を全国12か所で公開録画。バンド，吹奏楽，ストリートダンスを中心に，一流プロが審査する中高生の真剣バトルをお送りした。「フラガールズ甲子園ド

キュメント」「男子チア挑戦企画」など，枠内特集を含め，年間52本の放送を行った。

ラジオの公開派遣番組では，『民謡をたずねて』14か所，『ベストオブクラシック』４か所，『吹奏楽のひびき』２か所，『リサイタル・ノヴァ』２か所，『ブラボー！オーケストラ』１か所で公開収録を実施した。

（３）ミニ番組

『名曲アルバム』では，世界の名曲を，その曲ゆかりの地の文化や歴史，風土などの映像と共に紹介した。クラシック曲のほか，南米のスタンダード作品なども数多く取り上げ，従来のハイビジョン・カメラによるロケだけでなく，最新鋭のデジタル一眼レフを使用して映像美を追求した。

（４）テレビ特集番組

夏期特集として総合テレビで長尺ドキュメンタリー「新・猿之助誕生」を放送した。足掛け２年にわたる独占取材により，市川亀治郎が四代目猿之助を襲名するまでの経緯を，彼の心の動きとともにつぶさに紹介。視聴者からの反響も大きく，10月に再放送された。

元日恒例の『ウィーン・フィル・ニューイヤー・コンサート2013』には，指揮者としてフランツ・ウェルザー・メストが登場。ハイビジョン5.1サラウンドの高画質・高音質で，オーストリア・ウィーンからの生中継を行った。

正月２日に恒例となった『こいつぁ春から～初芝居生中継』は市川猿之助襲名にわく大阪松竹座と東京・新橋演舞場，そして建設中の歌舞伎座からの本邦初の生中継を交えて盛り沢山の内容で放送した。猿之助襲名披露の「義経千本桜」では宙乗りを特別のカメラで臨場感あふれる映像で紹介したほか，終演後の猿之助に生インタビュ―を行なった。

正月３日恒例の『NHKニューイヤーオペラコンサート』は，第56回を迎えた。ヴェルディとワーグナーの生誕200年のアニバーサリー・イヤーを迎えた2013年は「人間賛歌　歌，思いをつなぐ力」をテーマに，バイロイト音楽祭で主役を歌う藤村実穂子ほか国内外で大活躍する日本人歌手が過去最多となる27名も集結した。独唱や二重唱はもちろん，最大で十四声のアンサンブルまでオペラの魅力をあますところなく紹介し，見どころ聴きどころ満載の２時間生放送となった。

『NHK古典芸能鑑賞会』は，NHKならではの豪華な顔合わせと，類を見ないバリエーション豊かな演目が見どころ。一夜でさまざまなジャンルの芸能の至芸を紹介する，充実した内容が売り物である。39回目となる12年は，生田流箏曲の演奏，ホールの空間を最大限に生かした舞踊，歌舞伎俳優で文化勲章受章者の坂田藤十郎ほかの出演による義太夫狂言の名作の上演など，話題性も有り豪華な内容を放送した。なお，音声は歌舞伎特有の花道など劇場の機構にふさわしく，効果的な，臨場感あふれる5.1サラウンドを用いた。

『NHKバレエの饗宴2012』は「バレエの夕べ」以来29年間途切れていたNHK主催のバレエイベントの復活。日本を代表するバレエ団とバレエダンサーが垣根を越えて一堂に会した舞台をノーカット放送した。

そのほか追悼番組として，『吉田秀和さんをしのんで』『さようなら中村勘三郎さん』『N響指揮者サヴァリッシュをしのんで』『市川團十郎さんをしのんで』を制作し，逝去後いち早く放送した。

（５）FM特集番組

『今日は一日“○○”三昧』は，テーマをひとつのジャンルに絞って一日中たっぷり堪能してもらう番組で，音楽波NHK-FMの特性を生かしたオール・ジャンルの超長時間特集企画。12年度は，「ラ・フォル・ジュルネ」「アニソン三昧Z！」「ブリティッシュ・ロック」「大分析！ミュージカル」「歌う声優」などのテーマで放送した。

毎年秋の恒例となった『NHK音楽祭』は10回目を迎え，“世界のマエストロ”をテーマに開催された。NHKホールで行われたこのイベントのコンサートを生放送した。

ほかに，夏の『ベストオブクラシック～特集ヨーロッパ音楽祭』や，年末の『バイロイト音楽祭』『東京JAZZ2012』『真夜中のカントリー』などを放送し，クラシックファン，ポップスファンの期待に応えた。

（６）国際共同制作の推進

世界各地の音楽祭やオペラハウスでの公演を，各国の放送局・プロダクションとの共同制作により水準の高いソフトを低コストで効率的に収録し放送した。12年度はミラノ・スカラ座やパリ・オペラ座など世界の一流歌劇場でのオペラ公演，バイロイト音楽祭やザルツブルク音楽祭，ルツェルン音楽祭などのフェスティバルほか，海外の放送局やプロダクションが制作主体となったプロジェクトのみならず，ティーレマン指揮ドレスデン国立管弦楽団演奏会（NHK音楽祭2012／ブラームス交響曲全集の一環）やヤンソンス指揮バイエルン放送交響楽団東京公演（ベートーベン交響曲全集）をNHKが制作主体となって収録し，合計14本の国際共同制作を行った。また，海外からの番

組購入も積極的に行い，マルチユースすることで大型のクラシックソフトを安価で安定的に入手し，効果的に編成・放送した。

購入番組

１．総合

定時ドラマでは韓国ドラマ『イ・サン』（前年度より継続，１月まで　日，23:00），『トンイ』（１月～　日，23:00），『シークレット・ガーデン』（２月～　水，0:25）を放送した。

特集編成として，イギリスドラマ『SHERLOCK（シャーロック）』（1.16，23，30）を放送した。

２．Eテレ

定時ドラマでは，『iCarly（アイ・カーリー）』（年度前期　水，19:25），『ビクトリアス』（年度後期　水，19:25），『iCarly（アイ・カーリー）』（再　土，18:25），『glee（グリー）１＆２』（土，22:55）の米国ドラマを放送した。

ドキュメンタリーでは，定時番組『地球ドラマチック』（土，19:00）の中で，「ツタンカーメンDNA大解析」「プラネット・ダイナソー」「スコットランド“巨石神殿”の謎」「鉄道模型で行こう！」などを放送，好評を得た。

アニメでは，シリーズアニメとして『おさるのジョージ』（土，8:35），『ひつじのショーン』（土，9:00）を放送。また，日曜の朝7:20に『ミニスキュル』を放送した。また，年末年始の特集として『劇場版アニメ』「くまのがっこう」を放送。

３．BS1

『BS世界のドキュメンタリー』は海外のプロダクションが制作したドキュメンタリーを放送。毎週一つのテーマを設定した。「エネルギーのこれから」（10月），「アメリカ大統領選挙」（11月），「世界の貧困」（11～12月），「いま　明かされる情報戦」（12月），「謎に挑む」（２月），「エネルギーをめぐる模索」（３月）など。エネルギー関連や「世界の貧困」には，多くの反響が寄せられた。番組ウェブサイト上で視聴者に投票を呼びかけて「もう一度見たい番組」として，放送をラインナップする試みも継続した。

４．BSプレミアム

映画枠は『プレミアムシネマ』と改題，夜間の映画枠は10時開始から９時開始に変更した。月曜の映画枠は「恋空」（4.2），「オカンの嫁入り」（4.16），「オーシャンズ11」（8.20），「ローマの休日」（9.3），「サラリーマンNEO劇場版（笑）」（11.5），「タイタニック」（12.24），「チャーリーズ・エンジェル　フルスロットル」（1.28）などを放送した。火曜夜10時は，「山田洋次監督が選んだ日本の名作100本～喜劇編」を中心に編成。「シコふんじゃった。」（4.10），「ウォーターボーイズ」（6.11），「タンポポ」（8.21），「拝啓天皇陛下様」（9.4），「プーサン」（10.9），「警察日記」（11.27），「社長三代記」（12.11），「喜劇　にっぽんのお婆あちゃん」（12.18），「ディア・ドクター」（1.6），「男はつらいよ」（3.5）などを解説をつけて放送した。また，８月には「ロッキー」シリーズ６作品を集中編成した（8.11～17）。

土曜夜間には，「ALWAYS　三丁目の夕日」（5.19），「ALWAYS　続・三丁目の夕日」（5.26），「ロード・オブ・ザ・リング」（6.16），「レッドクリフ PART Ⅰ」（9.8），「レッドクリフ PART Ⅱ～未来への最終決戦」（9.15），「マトリックス」（11.17），「隠し剣　鬼の爪」（11.24），「武士の一分」（12.22），「スパイダーマン」（2.2），「フラガール」（2.16）などを放送した。このほか，金曜夜間に「たそがれ清兵衛」（10.5），「忠臣蔵四十七人の刺客」（12.14）などを放送した。大みそかは『年越し映画マラソン』として「幸福の黄色いハンカチ」「駅　STATION」「居酒屋兆治」（12.31）など，高倉健主演作を集中編成した。また，３月には『第85回アカデミー賞授賞式のすべて』（3.15）を放送した。

金曜深夜には，「ブラザーズ・グリム」（4.21），「ザ・シークレット・サービス」（7.7），「しあわせの隠れ場所」（12.7），「バレンタインデー」（2.8）などを放送した。

また，亡くなった中村勘三郎さんをしのび，「やじきた道中　てれすこ」（12.10）を放送した。

午後（月～金，午後１時）の『プレミアムシネマ』では，「左きゝの拳銃」（4.11），「遙かなる山の呼び声」（6.14），「エジプト人」（7.12），「悪の花園」（9.14），「丹下左膳」（1.7），「荒野のガンマン」（1.11）などを編成した。

「アクターズ・スタジオ・インタビュー」では，ミッキー・ローク（7.8），ジェームズ・フランコ（12.8），コリン・ファース（2.9）などを紹介した。

海外ドラマでは，定時番組として米国ドラマ『デスパレートな妻たち７』（年度前期　金，23:15），『グッド・ワイフ３』（年度後期　木，

23:15)，韓国ドラマ『シークレット・ガーデン』（年度前期　木，23:15)，『トンイ』（～６月　日，21:00)，『王女の男』（７～12月　日，21:00)，『太陽を抱く月』（１月～　日，21:00）を放送した。

また，韓国ドラマ関連特番として『シークレット・ガーデン　スペシャル』(6.9，22:00～)，『最終回直前！「トンイ」ありがとうスペシャル』(6.17，19:30～)，『韓国歴史ドラマ「王女の男」直前スペシャル』(6.24，21:00～)，『韓国歴史ドラマ　太陽を抱く月　放送直前スペシャル』(1.13，21:00～）などを放送した。

特集編成としては，『SHERLOCK2』(7.22，29，8.5)，『ロイヤル・スキャンダル』(7.29～8.3)，『キャッスル～ミステリー作家のNY事件簿』(10～12月　水22:00～)，『リゾーリ&アイルズ～ヒロインたちの捜査線』（１～３月　月0:00～)『刑事コロンボ　アンコール』(1.30～　随時）などを放送した。

アニメでは，夏休みに『ムーミン・パペットアニメーション』(8.14～17)，『ピーターラビットとなかまたち』(8.6-8.16)，『未来少年コナン　劇場版』(8.8)，『映画　銀河鉄道の夜』(8.9)，『劇場版　きかんしゃトーマス　伝説の英雄（ヒロ)』(8.10)，『ハローキティのおやゆびひめ』(8.10)，『劇場版　フランダースの犬』(8.13)，『アルプスの少女ハイジ　アルムの山』(8.14)，『アルプスの少女ハイジ　ハイジとクララ』(8.15)，『MARCO　母をたずねて三千里』(8.16)，『ニルスのふしぎな旅　劇場版』(8.17)，冬休みに『トムとジェリーのくるみ割り人形』(12.22)，『ファーザー・クリスマス』(12.23)『おさるのジョージ　劇場版』(12.23)，『劇場版　チェブラーシカ』(12.24）などを放送した。

国際共同制作

NHKは80年から，継続的に海外の放送局や制作会社，配給会社と国際共同制作を行っている。事務局は知財展開センター企画推進部に置いている。

国際共同制作は大型番組を制作するうえで今や世界的に常識となっている。この背景には，テレビ番組市場を巡る環境が厳しさを増していることが要因として挙げられる。インターネットとの競合や多チャンネル化で良質なソフトへの需要が高まる中，国際間で制作費を分担して高品質の番組を確保する動きが活発化しているといえる。

12年度に放送した国際共同制作番組は43タイトル，139本であった。

13年１月に放送された『NHKスペシャル』「深海に伝説の巨大生物を追う」は，開発段階からアメリカのディスカバリー・チャンネルと，本格的な共同制作として進めたプロジェクトで，加えてフランスのアルテ，ドイツのZDFも共同制作参加し，世界で初めて深海のダイオウイカを撮影した画期的な番組として国内外で話題となった。

『ワーク・ラブ・バランス』はフランスのポアン・ド・ジュールとの共同制作で，世界中の40代の女性の日常と葛藤をドキュメントし，BS1で12年９月に放送された。

またEテレでは，イギリスの制作会社ガレインと共同制作した『きかんしゃトーマス』の3DCGアニメシリーズを放送した。

BBCと共同制作した『フローズン・プラネット』はBSプレミアムとNHKスペシャル版が放送され，極地の大自然と動物たちの生き様がスペクタクルに描かれた。

その他12年度に放送した主な国際共同制作番組

○ドキュメンタリー

『NHKスペシャル』「メガクエイク２」：ナショナルジオグラフィックインターナショナルチャンネル／フランステレビジョン。「知られざる大英博物館」：韓国KBS。「中国文明の謎」：仏ジェデオン／フランステレビジョン／加NFB。『BS世界のドキュメンタリー』「世界の貧困」：ステップス・インターナショナル

○音楽ほか

『NHK音楽祭2012』「ティーレマン指揮　ドレスデン国立管弦楽団演奏会」：独ユニテル。『プレミアム・シアター』「マリス・ヤンソンス指揮バイエルン放送交響楽団　ベートーベン交響曲全曲演奏会」。

放送番組の国際交流

１．番組交換

NHKは，海外の放送事業者との番組交換を，文化交流の促進や放送を充実させる目的で，協力協定や覚書に基づいて積極的に行っている。12年度も，ラジオ番組の提供と受け入れが行われた。

（１）ラジオ番組の提供

12年度は，楽壇への登竜門として開催された「第81回日本音楽コンクール」（全６部門）をはじめ，「田村響 ピアノリサイタル」を含むクラシ

ック系番組計23番組をEBU正会員および準会員に提供した。12年度は，18か国19放送機関に対し33件，計53時間14分の音源を提供した。

（２）ラジオ番組の受け入れ

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会をはじめ，米国，ドイツ，スイスを本拠地とする主要オーケストラの演奏会とヨーロッパ夏の音楽祭，バイロイト音楽祭などの主要音楽祭，その他ミラノ・スカラ座，ウィーン国立歌劇場，バイエルン国立歌劇場等による話題のオペラも数多く放送。12年度は，23か国38放送機関から148件，計260時間15分を受け入れた。

２．外国放送事業者への取材協力

NHKは，外国放送機関との相互協力の一環として，取材制作協力を積極的に行っている。

協力協定，ニュース取材への協力，海外総支局との関係等を考慮し，依頼に応じて編集・方式変換・衛星伝送や，カメラ，スタジオ，中継車など設備・機材の貸し出し，要員の協力・あっせんを行っている。

12年度の取材協力は，14か国・23放送機関，約1,100件であった。この他，中国CCTVが11年８月末より東京の伝送スタジオを通じて自国向け定時ニュースを開始，北京のキャスターとの掛け合い形式で週５日生放送を行っている。

（１）時事リポート

12年12月の東北地方における地震および津波観測ではアメリカABCが中継を実施した他，EBUなどから取材・配信についての問い合わせがあった。

また12年末の総選挙では，CCTVの複数のチャンネルで中継と素材伝送を行ったほか，『ゆく年くる年』も放送センターの施設を使って伝送に協力した。

（２）スポーツ

スポーツ関係では，12年11月に仙台で開催された「NHK杯国際フィギュアスケート競技大会」に際し，アメリカNBCやカナダCBCなどにホスト映像の配信や伝送を実施。12月のW杯スピードスケート長野大会でも，オランダNOS，EBU，ノルウエーNRKなどの各放送局に競技映像の伝送などで協力した。

「日本賞」教育コンテンツ国際コンクール

「日本賞」は1965年の創設から2007年まで，教育番組の国際コンクールとして，世界の教育番組の質の向上および国際理解と協力の増進に貢献してきた。各国の制作者が交流し議論する場や，教育番組に関する最新情報を交換する機会として大きな役割を果たし，その結果，いわゆるメディア先進国ではない国や地域からも多くの参加を得ている。08年の第35回からは名称を「『日本賞』教育コンテンツ国際コンクール」と改め，募集の対象を「音と映像を用いた教育コンテンツ」に拡大した。

これは，インターネットをはじめとする情報技術の急速な進展やデジタル放送の開始など，著しい変化を遂げる教育メディアのデジタル化に対応し，コンクールの質を高めることが狙いである。

11年の第38回には，コンテンツ部門に「イノベイティブ・メディア カテゴリー」を新設。既存のカテゴリーの枠に収まらない革新的なメディア活用に挑む作品を顕彰することとした。また特別賞は「国際交流基金理事長賞」「ユニセフ賞」に加えて，テレビを通じてその国・地域の教育に継続的に貢献する作品に対する「前田賞」を贈ることとした。

12年の第39回コンクールは，「NHK文化祭」の一環として10月18日から25日の８日間，東京・渋谷のNHK放送センターで行われた。応募は，60の国と地域の208機関から，コンテンツ部門に309本，企画部門に26本，合計で335本となった。

審査は，日本賞事務局が委嘱した世界12の国と地域の16人の審査委員によって厳正かつ公平に行われた。

会期中は「企画部門10回記念フォーラム」と題したトーク・セッションを開催，03年に新設された企画部門の受賞者や審査員などによるディスカッションと番組視聴を行った。

またIPCEM（イプセム：教育コンテンツ世界制作者会議）が新たなイベントとしてスタート，世界のコンテンツ制作者や研究者による最先端情報と意見の交換が精力的に行われた。

最終日を飾る「授賞式」は101スタジオで行われた。審査委員，受賞者，大使館関係者などが出席，NHKの首藤奈知子アナと俳優谷原章介さんの司会で，津軽三味線の演奏を交えながら，活気あふれる雰囲気の中で各賞が授与された。

「グランプリ日本賞」は，スペインのペッロ・ヴェルデ・フィルムズほか制作の長編アニメーション映画『皺（しわ）』が受賞した。（⇒p.665）

関連番組として，『第39回日本賞授賞式～輝け！教育コンテンツ世界一』（Eテレ，11.3），『2012年日本賞　presents　世界のとっておきテレビ』（E

テレ，12.16），および『まるごと紹介！2012年日本賞　受賞作品』と題して各カテゴリーの最優秀作をノーカットの日本語版で放送した（Eテレ，12.17～19）。

詳細は，http://www.nhk.or.jp/jp-prize/

NHK文化祭

00年以来「教育番組の祭典」として親しまれてきた「教育フェア」が，10年度からは若者や大人も対象にした多様な教育文化的サービスを体験するイベント「NHK文化祭」に衣替えした。制作者が視聴者の反応や要望に直接触れ，コンテンツの新規開発を促進するイベントを目指している。

（１）「たいけん広場2012」

会館公開イベントの中核「NHK文化祭たいけん広場2012」は，11月３日（土･祝）と４日（日）の２日間行われた。11年同様，体験をキーワードに，制作および事業現場から企画を募集して実施。屋内・屋外・ふれあいホール・スタジオパークが一体となり，「つながろう！みんなの元気」を合言葉に来場者が一体感や参加感を楽しめるイベントを企画した。当日は天候にも恵まれ，２日間の総入場者数は５万2,190人を記録した。

今回は初の試みとして，英語番組などでおなじみの「チャロ」をイベント全体のキャラクターとして起用した。無邪気な表情やしぐさは，性別・年齢を問わず好評だった。

また「ふるさとの食にっぽんの食東京フェスティバル」，「おかあさんといっしょファミリーコンサート」（有料チャリティー・イベント），スタジオパーク無料公開，チャロ食堂（５階食堂の一般開放）などのイベントも同時開催した。

（２）「アジアプロデューサー会議」

10月22～27日，NHKほかタイ・マレーシア・ブルネイ・ミャンマー・モンゴル・香港の７放送局のプロデューサー計11人が集い，開催された。「第２回ABUデジスタ・ティーンズ」に向けて，各国で開催された作品制作ワークショップの報告やイベント，番組制作について議論した。同時に，NHK技術研究所でデジタル技術を使った最新の演出などについて学びあった。

関連番組として，『第２回ABUデジスタ・ティーンズ』（Eテレ，12.30）を放送した。NHKスタジオとマレーシアRTMスタジオをインターネット回線で結び，「Life（命）」をテーマに，ティーンが制作した映像作品とそのメーキングを紹介する国際映像フェスティバル。７か国の若者たちが映像に込めた思いや意見を闊達（かったつ）に交換した。

（３）関連番組編成

「日本賞」関連では，授賞式のもようを11月３日に放送したほか，世界の教育コンテンツの魅力を紹介する番組や日本賞各賞の受賞作を年末年始を中心に特集編成した。

「たいけん広場」関連では，ふれあいホール公開収録の『ざわざわ森のがんこちゃんスペシャル』を２月の放送60年記念特集で放送したほか，体験型ワークショップを『ハートネットTV』や『テクネ映像の教室』の中で紹介，その他ラジオ第１『ひるのいこい』やFM『トーキングウィズ松尾堂』などの公開生放送，ラジオ第２『基礎英語』ファンミーティング等を実施した。ラジオ番組との本格的連動は初の試みだったが，大人向けコンテンツとして，予想以上の熱い支持を集めた。

放送番組コンクール

Ⅰ．国際コンクール

12年度は，23のコンクールで延べ49の番組等が受賞した。（⇒p.660）

国際エミー賞では，「東日本大震災　緊急ニュース」が，ニュース部門で，また『中学生日記～転校生シリーズ』「僕と君のメロディ」が子どもシリーズドラマ部門で，それぞれ部門最優秀賞にあたる国際エミー賞を受賞した。それぞれの部門の最優秀賞をNHKの番組が受賞するのは史上初めてである。

モンテカルロテレビ祭では，『土曜ドラマスペシャル』「とんび」がミニシリーズ部門のゴールドニンフ賞を受賞した。

ジョージ･フォスター･ピーボディー賞では『デザインあ』が最優秀賞にあたるジョージ・フォスター・ピーボディー賞を受賞した。

日本賞では『NHKスペシャル』「宇宙の渚　第１集～謎の閃光　スプライト」が生涯教育カテゴリーの最優秀賞を受賞した。

このほかアジア旅番組国際グランプリでNHKの国際放送番組『journeys in japan -Special Edition- OHENRO』がドキュメンタリー部門優秀賞と観光庁長官賞を受賞した。

フランス鳥類・自然映像祭では，『NHKスペシャル』「ホットスポット　最後の楽園　第４回～ニュージーランド～飛べない鳥たちの王国」がグランプリを受賞した。

Ⅱ．国内コンクール

12年度は，19のコンクールで延べ79の番組等が受賞した。（⇒p.662）

放送文化基金賞では，テレビドキュメンタリー番組部門で，『NHKスペシャル』「38分間～巨大津波　いのちの記録」が最優秀賞にあたる本賞を受賞した。同じくテレビドキュメンタリー番組部門で『NHKスペシャル』「クニ子おばばと不思議の森」が優秀賞を受賞した。またテレビドラマ番組部門では『坂の上の雲』最終回「日本海海戦」が本賞を受賞。おなじくテレビドラマ番組部門で『連続テレビ小説』「カーネーション」が優秀賞を受賞した。さらにラジオ番組部門では『遠いふるさと～フクシマの家族・2011』が本賞を受賞した。

文化庁芸術祭では『NHKスペシャル』「メルトダウン～連鎖の真相」が，テレビ・ドキュメンタリー部門の大賞を受賞した。また，同じくテレビ・ドキュメンタリー部門で『NHKスペシャル』「終戦　なぜ早く決められなかったのか」が，テレビ・ドラマ部門で，『土曜ドラマスペシャル』「とんび」（前・後編）が，そしてラジオ部門ドラマの部で『FMシアター』「ヘブンズコール」がそれぞれ優秀賞を受賞した。

「地方の時代」映像祭では，『NHKスペシャル』「イナサがまた吹く日～風寄せる集落に生きる」が全部門を通じての最優秀賞にあたるグランプリを受賞した。また，『金とく』「模索～原発ができなかった町で」が放送局部門の優秀賞を受賞した。

石橋湛山記念　早稲田ジャーナリズム大賞では『ETV特集』「花を奉る　石牟礼道子の世界」が文化貢献部門の大賞を受賞した。

アナウンス

１．公共放送の顔として多彩な業務を展開

12年度，アナウンサーは「衆議院選挙速報」「政権交代，安倍内閣発足」などの政局報道をはじめ，「アメリカ大統領選挙」「北朝鮮のミサイル発射」など激動する国際情勢への対応，さらに新たに強い口調で避難を促す「津波警報の伝え方」の確立など，国民の生命・財産を守る公共放送の使命達成に取り組んだ。また，２年が経過した東日本大震災の関連番組には全国で約100人のアナウンサーが関わり，一人一人が震災に向き合って被災地の今と思いを伝えた。放送以外でも11年度に引き続き，アナウンサーが現地の小学校に赴き，子どもたちに絵本の読み聞かせを行う「お話の会」を開き，被災地支援にも取り組んでいる。

12年度最大の放送イベントである「ロンドン五輪」では，約40人のアナウンサーが日本人選手の活躍はもちろん，世界最高のスポーツの祭典の魅力や感動を，現地そして東京のスタジオから，存分に伝えた。また番組関連では，ツイッターを活用した新しい形のニュース新番組『NEWSWEB24』など150の定時番組だけでなく，『テレビ放送開始60年』などの特集番組にもベテランから若手まで全国のアナウンサーの総力をあげて取り組み，視聴者の期待と信頼に応えた。

アナウンス室制作番組では10年目を迎えた「気になることば」（『お元気ですか　日本列島』内のコーナー）をリニューアル。キャスターとタイトルを一新し，アナウンサーの専門性を生かしたことば番組として再スタートを切った。

2013年３月末でアナウンサーは総勢479人，内訳はアナウンス室132人，ラジオセンター・日本語センター・グローバルメディア・地域放送局347人。女性アナウンサーは全国で77人。

（１）報　道

〔政治・衆議院議員選挙〕

12月の衆議院選挙は，アナウンス室の６割近い76人が関わり，「正確で分かりやすい選挙報道」として高い評価を受けた。若手中心の布陣で臨み，事前にメインキャスターの武田真一アナを中心に，小選挙区，比例代表の研究会を積み重ねた。報道局と連携して開発した「票回しシミュレーター」を用いた訓練が成果を上げた。サブキャスターの守本奈実アナがタッチパネル式の大型再撮モニターを使いこなし，選挙報道の新たなプレゼンテーションを実現した。

〔より伝わる津波警報を目指して〕

気象庁の津波警報の伝え方の更新に合わせて，報道局と技術局，アナウンス室が連携し，地震津波の原稿を自動生成する「新・原稿支援システム」を開発し，３月７日に運用を開始した。これを前に，アナウンス室で約20回の説明会を開いた。一人でも多くの命を救う放送を念頭に，東京はもちろん，全国各局のアナウンサー全員がマスターできるよう取り組みを続けている。

12月７日の津波警報は，東日本大震災以来，検討・訓練を積み重ねてきた新たな伝え方で初めて放送。強い文体，強いトーンは，警戒を強めるべ

きであるとのメッセージがよく伝わったと評価され，NHKの報道姿勢をよく示した。サイド業務に当たったアナウンサーも的確に動き，震災以来さらに意識が高まったことが表れた。

震災２年関連の報道番組では，中堅若手世代の取材力・制作力を各番組に還元するとともに，震災の記憶を風化させないよう，ノウハウの継承に努め，公共放送の存在意義を示した。

〔緊急報道と地域支援〕

緊急時の地域局支援は，アナウンス室･隣接局･隣接域内から速やかな立ち上げを目指した。

５月の連休中に茨城と栃木で発生した竜巻災害に，当該２局とアナウンス室が連携して６人が取材にあたり，中継で多角的に被害の様子を伝えた。この取材の過程で，アナウンサーが視聴者から竜巻の一部始終を撮影した特ダネ映像を入手。報道局編集主幹賞を受賞した。

７月の「九州北部豪雨」では，アナウンス室からの応援で現地局を５日間支援。８月の宮城県の震度５強の地震や遠地地震による津波注意報の際は，夜間，帰宅していたアナウンサーが自発的に集まり，手厚い体制で放送を支えた。

ニュースセンターでスタンバイするアナウンサーの緊急対応訓練に力を入れ，ラジオセンターとも連携して，人員配置のスピード化に努めた。

〔ラジオの機能強化〕

３か年の「ラジオ機能強化」に向け，アナウンス室では，首都直下地震に備えるFM番組を提案，１月に放送した。また，アナウンス室提案の「ラジオ特集」は全国19局で放送された。

アナウンス室では，ラジオ特集番組を通じて全国各局のラジオ体制の検証と指導を続け，13年度以降も，ラジオの機能強化を着実に進めていく。

（２）一般番組

12年度は，150番組延べ230人のアナウンサーが定時番組の対応に当たった。総合深夜帯では，橋本奈穂子アナが『NEWSWEB24』を定着させた他，Eテレの『Rの法則』の高市佳明アナ，『特盛りテストの花道』の渡邊佐和子アナが柔軟なキャスターワークで若年層獲得に成果をあげた。ラジオ第１の『すっぴん！』では，藤井彩子アナのアンカー起用が同世代女性層から好評を得た。また特集番組では，震災２年を検証する番組の他，東京スカイツリー特番，ロンドン五輪関連番組，テレビ放送開始60年記念特番などに尽力し，視聴者の期待に応えた。

震災関連では，特別編成『明日へ～震災から１年半』（9.9）と『明日へ　支えあおう～震災から２年』（3.10～11）で三宅民夫アナと伊東敏恵アナが司会を務めた。津田喜章アナ（仙台局）が被災地リポート，中山準之助アナが『復興の地　出会い旅』リポート，有働由美子アナが『震災から２年　明日へコンサート』（3.9）ステージ司会を務めるなど，震災２年を検証する多数の番組や中継に，本部と全国のアナウンサー80人以上が対応した。同時に，全国から運行応援者を仙台，盛岡，福島に派遣するなど，各局アナが震災関連業務に傾注できる体制を整えた。また，「メルトダウン連鎖の真相」(7.21)，「原発事故調最終報告」(7.24)，「空白の初期被ばく」（1.12），「“いのちの記録”を未来へ～震災ビッグデータ」（3.3）等の『NHKスペシャル』や，『飯舘村一年～人間と放射能の記録』（6.24），『積み残された課題』（12.9）等の『ETV特集』など，合わせて40本以上のドキュメンタリー番組でナレーターを務めた。また防災特集として首藤奈知子アナが『NHKスペシャル』「釜石の奇跡～いのちを守る特別授業」（9.1）の司会を担当し，子供たちにも分かりやすく，震災の教訓を生かす重要性を伝えた。

５月は国民的な関心事となったトピックが相次いだ。スカイツリー開業に際しては，『スカイツリーの魅力すべて見せます』（5.12）で，司会の有働由美子アナ，藤井彩子アナが生放送で魅力を紹介したほか，開業当日の中継を含めて10人以上のアナウンサーが関わり，臨場感豊かに伝えた。『コズミックフロント』「体感！25年ぶりの金環日食」（5.21）では，礒野佑子アナが司会。久保田祐佳アナ，小林千恵アナが，航空機からのリポートなどを担当し，世紀の天体現象を多角的に放送した。

夏の特集では，黒崎めぐみアナ（名古屋局）が『第44回思い出のメロディー』（8.18）で司会を担った他，二宮直輝アナ（徳島局）が『堂本光一のNEWS LABO』（8.17），塚原愛アナ（松山局）が『国民総参加クイズSHOW！』（8.25），久保田祐佳アナが『BSスペシャル～火星大冒険』（9.1）の司会を務めた。７月から８月にかけては，16本のロンドン五輪関連特番に対応した。輿芝由三栄アナが五輪放送をアピールする双方向番組『ロンドン五輪完全攻略・みんなで走ろう！クイズマラソン』（7.20）の司会を担当した他，出場選手の奮闘を追うドキュメンタリーのナレーションまで，アナウンサーの専門性を幅広く発揮した。豊原謙二郎アナ（仙台局）が語りを担った『NHKスペシャル』「ミラクルボディー」（7.14～16）が好評を得た他，大会期間中の活躍を受けて森山春

香アナの語りで放送した『NHKスペシャル』「なでしこジャパン～涙と笑顔の初メダル」が視聴率10％を超えるなど，視聴者の関心に応えた。

年末年始の特集編成では,『しあわせニュース』（12.31）で小野文惠アナが司会，徳永圭一アナ，小松宏司アナがリポートを担当した他,『2013新春！テレビが見つめたニッポンの正月60年』（1.1）では永井伸一アナが情報提示を担った。第63回の『NHK紅白歌合戦』（12.31）では有働由美子アナが総合司会，アメリカから久保田祐佳アナが中継リポート。またラジオ実況では青井実アナと橋本奈穂子アナが，被災地への励ましを織り交ぜたフリートークで幅広いリスナーに華やかなステージの魅力と歌の持つ力を伝えた。その他『もうすぐ紅白～ここがみどころ　生放送スペシャル2012』（12.18）や『夢の紅白2012～名歌手たちの名勝負・名対決』（12.29）などのプレ番組で，アナウンサーがPRに努め，本放送への期待を高める役割を果たした。

２月１日の「テレビ放送開始60年特集」に際しては，司会やナレーションなどにベテランから若手まで総力を結集して関わり，放送の最前線に立ち続けてきたアナウンサーの蓄積を番組に反映させた。

（３）スポーツ中継

12年度最大のイベントであるロンドン五輪放送に関わった全国のアナウンサーは38人。NHK，民放合同のジャパンコンソーシアムには，NHKからテレビ実況アナウンサーとして10人を派遣した。うち５人が初めての夏の五輪実況となったが，今後NHKスポーツを支えると期待される人材が質の高い放送を出し，視聴者の期待に応えた。開会式は武田真一アナと廣瀬智美アナが担当，五輪経験豊富な工藤三郎アナを現地キャスターに起用した。続くパラリンピックにも，若手アナウンサー３人を現地に派遣し，国内キャスターと連携して日本人選手の活躍を中心に伝えた。

MLBは五輪期間中もダルビッシュ投手の登板試合はすべて伝えたため，ほぼ前年並みの放送数を保ち，BS放送の中で平均１％を超える高い視聴率を維持した。

サッカー中継では，ワールドカップ・ブラジル大会予選や女子の国際大会など日本代表の注目試合を放送するとともに，Jリーグは注目試合を丹念に伝えた。特に最終盤の昇格決定戦は，地元の大分局が地上波で放送し，県内での視聴率は，平均で23.3％，瞬間最高は，32％を記録。Jリーグ優勝決定の試合は，２会場とスタジオに計８人のアナウンサーを配置し，優勝した広島で14％の視聴率を獲得した。

ソチ冬季五輪を１年後に控え，ウインタースポーツの放送が倍増。女子ジャンプのW杯や世界選手権では高木沙羅選手の活躍を現地からあますところなく伝え，好評。女子アイスホッケ-も五輪出場権獲得の瞬間をライブで伝えブームの先駆けになった他,カーリングなどの海外派遣にも対応。BS深夜でも連日視聴率１％を超え，ソチ五輪への関心を高めた。

２．アナウンス室番組制作

６年目を迎えた『100年インタビュー』は，BSプレミアムの特集番組として４本を制作した。日本文学研究者・ドナルド・キーン，脚本家・山田太一（聞き手：渡邊あゆみ），漫画家・やなせたかし，哲学者･梅原猛（聞き手:石澤典夫)。また，出演者が亡くなったことに伴う追悼として５本を再放送した。医学博士・原田正純，映画監督・新藤兼人，女優・森光子，俳優・小沢昭一，歌舞伎俳優・十二代目市川團十郎。

著名人のふるさとで，その原点や転機などについて話を聞く『ホリデーインタビュー』は，旬の作家や漫画家，評論家やタレントなどをゲストに14本を制作した。

総合『お元気ですか　日本列島』の「気になることば」は，10年目を迎えた10月からリニューアル。「ことばの宝船」とタイトルを一新し，キャスターは梅津正樹アナから杉原満アナへバトンタッチした。“ことばおじさん”に代わり，作務衣姿の“ことばのご隠居”が，視聴者からのことばに関する疑問・質問にこたえた。

“耳で聞く短編小説”と銘打ち，アナウンサーの朗読で幅広く文学作品の魅力を届けるR1『ラジオ文芸館』は，新作27本，アンコール18本を放送。朗読，スピーチ，敬語などのノウハウを分かりやすく紹介するR2『ことば力アップ』は，新作26本，アンコール26本を放送した。

さらに，東日本大震災から２年にあたり「ラジオ特集」を２本制作した。東海・東南海・南海の三連動地震にいかに備えるかをテーマにした『津波からの避難』は，３月10日，R1で２時間半にわたって放送。高知・徳島・青森・和歌山・静岡など８局が中継やリポートで参加し，“津波からいかにすばやく逃げるか”“被害を最小限に食い止めるためいかに備えるか”について各地の取り組みを伝えた。震災を風化させないよう，被災地を支援する全国の動きを取り上げた『東日本大震

災から２年～今つなぎたい全国の絆』は，３月11日，R1で２時間にわたって放送。被災地の現状リポート，被災者の生の声を伝える福島県南相馬市からの中継をはじめ，神戸・札幌・富山・広島など各局からの報告を伝えた。自主避難する福島の人たちの課題や，故郷を遠く離れた避難者の心のケアの問題，未来の支援にもつながる，被災地と支援する側の若者同士の交流などを描いた。

３．社会貢献への取り組み～お話の会・朗読ひろば

東日本大震災の被災地支援として11年度にスタートした「お話の会」を12年度も継続し，11月から１月にかけて福島県の４校（いずれも，いわき市立の大浦小学校，泉小学校，平第二小学校，中央台東小学校）で実施した。アナウンサーが単身現地に赴き，子どもたちに絵本の読み聞かせや紙芝居などを行い，1,726人の児童に言葉の感動を届けた。当初は被災後授業の態勢が整わない学校を訪ねて応援してきたが，校舎や授業態勢の整備が進む中，学校側からの要望も，国語の「朗読」や社会科の「職業学習」の一環としてアナウンサーの語りを聞かせて欲しいというものに変化してきている。これに応え，学年毎に読む内容を変えて１校で６回の読み聞かせを行ったり，全校生徒を前に体育館で講演と朗読を組み合わせたりと，より柔軟なスタイルで開催するようにした。

教育貢献活動「NHK朗読ひろば～アナウンサーが広げることばの世界」は６年目に入った。被災地支援の「お話の会」と開催地を仕分け，被災地以外の６道府県の６つの小学校にアナウンサーが出向いた。スライド映像や効果音，音楽を加えたライブ感あふれる朗読の他，子どもたちが参加するコーナーも設けて，言葉の魅力を多彩に伝えた。児童と保護者を含め参加人数は928人だった。

・６月12日　大分県大分市立荷揚町小学校
・９月４日　京都府京都市立錦林小学校
・11月６日　北海道壮瞥町立
　　壮瞥小学校・久保内小学校
・11月21日　大阪府豊中市立東丘小学校
・12月18日　山口県長門市立深川小学校
・２月13日　愛知県半田市立さくら小学校

映像デザイン

映像デザイン部は，番組やイベントなどのビジュアルの根幹を担い，クオリティーの高いデザインを制作側に提供することで，より豊かなコンテンツの創造に寄与した。また，さまざまなコンテンツに対応できる幅広いノウハウの蓄積と積極的な提案により，ニュース・緊急報道においても貢献度を高めた。さらに12～14年度デザインセンター事業計画に基づき，NHKブランド力強化への貢献，業務の高度化への対応，放送資産の活用など，全局的な視点に立った取り組みも展開した。

１．重点事項

（１）地域支援

地域局支援としてのスタジオ環境グレードアップの取り組みは，12年度で２回目となり，中部地方，中国地方，計４局のスタジオセット改修を行った。各地域局の個性や特徴を生かしながら，東京のニュースセンターや各拠点局のニューススタジオとのトータル感を提供することで，視聴者にNHKブランドをより強く意識してもらうことを目的とした。

また，12年度から実施した「起き上がれ！コボシくん」ワークショップ（何度倒れても起き上がる福島県の縁起物「起き上がり小法師」に参加者がオリジナルの絵を描く）は，地域支援，震災復興支援と，『大河ドラマ』「八重の桜」のPRを兼ね，福島局会館公開から始まった。これまで，BS体感ランドをはじめとする10か所のイベントなどで，ワークショップや展示を行った。そして，ホームページ展開も開始，「八重の桜」出演者や福島在住のアーティスト，海外の著名人の作成した「コボシくん」をアップし復興を支援した。

（２）コーポレートデザイン

広報系では，『大河ドラマ』「八重の桜」のPR周りのデザインをコーディネート，女性をターゲットにしたビジュアルでインパクトのある訴求をした。２月のNHKテレビ放送開始60年を記念したキャンペーンでは，共通ロゴをデザイン，展開も含めたプランニングでキャンペーンを盛り上げた。５月のNHK会館公開イベント「渋谷DEどーも」，11月の「NHK文化祭」では，ロゴやキャラクター，会場表示などを含む全体のトータルデザインをおこないイベントの存在感を高めた。

一方で，欧米放送局のブランド調査の一環として，BBCやAP通信などのブランディングに携わった専門家を招いてブランド研修を実施した。また，映像デザイン部としては初めて，日韓放送協力会議へ美術交流提案を行い，KBSなどの韓国放送局のブランド戦略を調査した。

（３）デザインCGコーディネート窓口

10年度に設置したデザインCGコーディネート

窓口で，局内外の発注コーディネートやアドバイス，そして局内リソースの一つであるペイントシステムの管理を行った。12年度は『メガクエイクⅡ』などの震災関連番組に加えて，ロンドンオリンピック，火星探査関連の大型番組，ドラマ番組などに対応した。また，NHK内で行われるCG関連業務のコストや品質に関する情報を一元的に集約，蓄積，分析評価する機能を充実させるため，さらに体制を強化し，データ分析の精度も高めた。

（４）共同研究

映像デザイン部と昭和女子大学および平井聖特任教授の三者で08年より推進している，共同研究「江戸城の復元」の図面復元作業では，江戸城本丸・大奥全体の建造物を初めてデジタル平面図として作成。また，３次元CGの映像化に向けた作業も，江戸城本丸表・大広間，松之廊下，桜溜，白書院，波之間，竹之廊下，黒書院，中奥御座之間，萩之間，休息之間の３次元化と各障壁画の復元が進んだ。これらの研究成果を『大河ドラマ』「八重の桜」の江戸城・松之廊下の場面で活用した。

（５）CS向上活動

NHKネットクラブと共催の，視聴者にスタジオやテレビ美術製作現場を見学してもらう，「バックステージツアー」を定例化し，２回開催した。ラジオ取材が同行し番組でそのもようが放送された。

また，芸術系の大学生を対象にした「デザイン講座」は「デザインセッション」と名称を新たにし，金沢や愛知といった地方からも多数参加し，盛況であった。大学に出向いてNHKやデザイナーの仕事を紹介する「出前授業」は３回開催。そのうち１回は，TBSのデザイナーを招いて『紅白歌合戦』と『レコード大賞』の舞台裏についてトークバトルを繰り広げた。

（６）東日本大震災プロジェクト

２回目となる震災復興をテーマにした『明日へコンサート』は２年という時の経過を「記憶の回廊」というコンセプトでデザイン，紅白で培った映像演出の技術も駆使したダイナミックなステージで復興へのエールを全国に送った。また，『大河ドラマ』「八重の桜」と連動した東北の観光誘致キャンペーン「ただいま東北」シリーズはプランニングから参加，外部クリエイターとのコラボレーションによってポスター，スポット，ウェブで展開し，東北の魅力を発信した。

２．番組制作における映像デザイン

（１）報道・情報番組

ロンドンオリンピックでは，「全力応援！」というキーワードで国内予選からパラリンピックまで一貫したデザインにまとめ，NHKのオリンピック放送の存在感を強めた。

衆院選は，ニュースタジオのスタジオ改修後初めての選挙報道となった。大型モニターやバーチャルセットを用い，分かりやすい選挙報道となった。また，スタジオの間仕切りを廃したことで開票速報本部の設営がスムーズに行われ，期間中の仮設スタジオセットも迅速かつ効率的に展開することができた。

（２）教育・文化福祉番組

若年層を新たなターゲットに向けた『Rの法則』では，ランキングをテーマにした番組内容を象徴するビジュアル，キャッチな色彩の挑戦的なデザインで若手視聴者層の獲得に取り組んだ。

『福祉ネットワーク』『ハートをつなごう』を統合した福祉番組『ハートネットTV』では，さまざまな問題を抱えた方々を温かく包み込むようなデザインで，福祉番組全体のトータルブランドづくりを進めた。

特集番組『追跡者ザ・プロファイラー』では，プロジェクションマッピングやバーチャルセット，高精細LEDモニターといった多様な手法を駆使して，斬新で上質な映像表現に取り組んだ。

（３）ドラマ番組

『大河ドラマ』「八重の桜」では，日常の生活感をリアルに表現することをデザインコンセプトとした。そして，幕末の激動期から維新後の明治を逞(たくま)しく生きた主人公“八重”とその家族を丁寧に描くことで，時代の転換期に生きた人々の息吹とエネルギーを感じさせる美術表現を行った。

『連続テレビ小説』「梅ちゃん先生」では，茨城県にて戦後の焼け野原になった蒲田をオープンセットで表現し，ロケとスタジオを巧みに組み合わせることで質の高い美術を提供した。また，ドラマの進展に合わせて町が復興していく様子を美術セットで表現し，視覚的にも番組を盛り上げた。

『土曜ドラマ』「負けて、勝つ」「メイドインジャパン」「実験刑事トトリ」，『BS時代劇』「薄桜記」「火怨・北の英雄 アテルイ伝」等では，美術セットパーツの共有化を図り，番組のクオリティーアップとスケールメリットを両立させて，予算の効率的運用に貢献した。

『BSプレミアムドラマ』「恋愛検定」，『よる☆

ドラ』「眠れる森の美女」では，恋愛ドラマを魅力的に見せるエンターテイメント性を加味した美術表現により女性層が楽しめる番組となった。

（４）音楽・芸能番組

年末の『第63回紅白歌合戦』では最新のLED装置による映像演出で，歌の魅力をシンプルに伝えるだけでなく，多彩な表現で密度の高い演出に貢献した。

夏の『思い出のメロディー』は“紡ぐ”をテーマに人と音楽のつながりを編まれた糸のようなデザインでシンボリックに表現，『紅白』とは対照的にアナログにこだわった設計で温かみのある番組となった。また，新感覚の特集コント番組『LIFE！』ではNHKが得意とするドラマ的演出のスタジオセットで独自のスタイルを打ち出し，若手視聴者に向けた演芸番組に新しいスタンダードをつくった。

古典芸能分野では，『にっぽんの芸能』で邦楽にふさわしい伝統をベースに，現代的な感覚も加えたデザインを行った。

クラシック音楽分野では，新番組『ららら♪クラシック』が始まった。クラシック音楽をより身近なものにという番組の思いを，軽やかなロゴや明るいスタジオイメージで表現，若年層まで親しめる番組作りに取り組んだ。

年初の『ニューイヤーオペラコンサート』では，オペラの歴史とコンテンポラリーな表現をミックスさせた緻密な舞台設計によって21世紀のオペラ表現に挑戦した。

３．デザイン計画

映像デザイン部の総合窓口機能と企画総務機能を持ち，予算管理など部の重要な業務に責任を持つ。映像デザイン部の討議と意思決定の場として計画班会を定期的に開催。経営課題への取り組みから，NHKアートとの契約，質の高い番組制作への対応を行った。

美術用品の保管管理や美術セットの倉庫保管と運搬・廃棄の運用も行った。12年度は，緑山スタジオの倉庫運用の見直しを行い，番組収録ごとにセットの倉庫保管入れ替えを行うことで，倉庫費・運搬費の効率運用を実行した。また，保管している美術セットのカタログ化を行い，美ショップというオンラインシステムに登録することで，美術セットの有効活用による予算の効率化に努めた。さらに，美術用品（建具・小道具・共通大道具など）の台帳をデジタル化した。これにより，美術用品の使用状況や頻度がリアルタイムで更新・蓄積でき，パソコンやタブレットでも検索が行え，業務の効率化に貢献した。

一方で，デザインデータのデータベース化のために，知財展開センター・放送文化研究所と連携をとり，『スペシャルドラマ～坂の上の雲』関連資料とさまざまなドラマ番組の道具帳のPDF・JPEG化を実施した。

音響デザイン

音響デザイン部は，放送を音で支える専門家集団として，高い専門知識とスキルで放送サービスを充実させ，NHKが視聴者に約束する経営目標の実現に取り組んできた。12年度はインハウスデザイナー体制を堅持し，NHKブランド力強化への貢献，放送デザイン界の先導的役割を認識した資産の社会還元など，新しい挑戦も行った。

視聴者層を意識した軽妙な『よる☆ドラ』『プレミアムドラマ』，震災からの復興と重なり合った「梅ちゃん先生」，重厚な「平清盛」，放送と通信との融合に挑戦する『音の風景』特集の企画制作，２年目の震災報道，混迷政局や不安定な経済，高齢化や社会保障などさまざまな内容の『NHKスペシャル』『クローズアップ現代』でも，楽曲制作を含めてトータルな設計で音響監督として番組演出の一翼を担ってきた。また，ドラマ手法やアニメ等を組み込んだドキュメンタリー構成に対し，部をあげて音響スキルの融合に協力し，質の高いデザイン設計で，新しい「Nスペブランド」の確立に貢献することができた。

１．番組制作関連

（１）東日本大震災関連番組

『NHKスペシャル』『ETV特集』『クローズアップ現代』や東北管内制作番組の支援に音響デザイン部一丸となって取り組んだ。震災２年目となり，時の経過を踏まえた各被災地の現状や被災者の心情，原発事故と放射能，国や市町村の対応など，多岐に及ぶ内容に加え，変わりつつある視聴者の気持ちにどう訴えかけるかを常に考え，「音の役割」を常に意識した音響アプローチで，多くの視聴者に見ていただけるよう全力で番組に向き合った。また，復興支援ソング「花は咲く」では，制作プロジェクトの一員として，番組での運用や資料のアーカイブ化など細部にわたったコーディネーションを行っている。

（２）『NHKスペシャル』

「メガクエイクⅡ」「中国文明の謎」「大英博物

館」など高品質な大型企画に対して，表情豊かで個性的な音楽と斬新かつ緻密な音響効果で番組の世界観を明確にし，声価を高めた。「大海原の決闘！クジラ対シャチ」「世界初撮影！深海の超巨大イカ」など，大自然を舞台に長期取材した迫力のパワーコンテンツでは，臨場感溢(あふ)れるダイナミックな音響アプローチで番組のエンターテインメント性を高めた。また「なぜ日本人が・・・～アルジェリア人質事件の真相」「対立を克服できるか～領土で揺れる日中・日韓」など緊急性や注目度が高い番組にも，事態の深層を浮き彫りにする冷静かつ大胆な音響アプローチで訴求力のある番組を支えた。

（３）報道・スポーツ番組

ロンドン五輪の開催年となった12年度は，オリンピック応援モードを盛り上げるため，広報局や編成局，スポーツ番組部などが一体となったプロジェクトの一員として早い時期から積極的に参加。PRやクラッチ制作に大いに貢献した。「ミラクルボディー」をはじめとする『NHKスペシャル』やオリンピック特集番組では，選手たちのこれまでの厳しい道のりや知られざる素顔，オリンピック本番の舞台裏などをスピード感溢(あふ)れるビビッドな音響表現で番組を盛り上げた。また自然災害，政治・経済・国際問題など幅広い報道番組に対し，迅速に対応できる体制を常に整え，緊急報道をはじめとするNHK報道への視聴者の期待に応えるため番組制作に全力で取り組んだ。

（４）情報・教養・開発番組

社会問題，政治や経済から生活情報まで身近に分かりやすく伝える番組『情報LIVE　ただイマ！』では，金曜日の夜に視聴者にリラックスして見てもらえることを考え，バラエティーに富んだ音響表現で番組を支えた。『ファミリーヒストリー』では，家族の絆や深い愛情を，『ドラクロワ』では，悩みながらも前向きに生きる人たちへの応援となるよう，テンポが良く，斬新な音響デザインに取り組み，番組の個性を明確にした。

（５）ドラマ番組

『大河ドラマ～平清盛』は平安時代末期の混乱とそこに生きた武将の生き様を，斬新な効果音や現代音楽の要素も取り入れた音楽で飾り，番組に深みをもたらした。『連続テレビ小説～梅ちゃん先生』は戦後の焼け野原からの復興と，そこに逞(たくま)しく生きるヒロインと家族の姿を鮮やかでみずみずしい音で表現し，希望にあふれた作品とした。

『テレビ60年記念ドラマ～メイドインジャパン』では現代に起こりうる企業間・国際間の軋轢を壮大なスケールで描くとともに，音楽に和を意識したテイストを取り入れるなど工夫を凝らした。『土曜ドラマスペシャル～負けて、勝つ』では戦後処理に奔走した政治家の苦悩と世界観を表現。このほか，『土曜ドラマ』『ドラマ10』『よる☆ドラ』『BS時代劇』『プレミアムドラマ』『正月時代劇』などで，各々の番組枠がターゲットとしている視聴者層を意識した音響設計を行った。

『プレミアムよるドラマ～ラストディナー』では一つのセットをベースに展開する内容に合わせ，既存のドラマ枠にはまらない音響デザインを行い，独特の世界観を表現した。

地域発のプレミアムドラマ制作にあたり，これまで同様音響デザイナーの地域局支援を実施。札幌局『神様の赤ん坊』，松山局『歩く，歩く，歩く』で作曲コーディネートからロケ収録，現地MAまでトータルに番組制作支援を行った。

オーディオドラマは『FMシアター』『青春アドベンチャー』『新日曜名作座』『特集オーディオドラマ』のすべての枠で，それぞれの特徴を生かしたラジオならではの音響デザインを行った。

（６）スーパーハイビジョン

12年度は，スーパーハイビジョンのさまざまな様式のソフトに対応した。まず，ロンドンオリンピックのダイナミックな8K映像を紹介した『ロンドンオリンピックパブリックビューイング』にて長年蓄積してきた22.2立体音響スキルを投入，その場にいるかのような臨場感あふれるソフトを制作。その後，白イルカが主人公のスタジオパーク用コンテンツ『海の中のいきものたち』では，音響デザインで作曲コーディネートした22.2チャンネルの番組用オリジナル楽曲を使用し，コンテンツの完成度に貢献した。秋のイベント「NHK文化祭2012」の『はやぶさがやってきた！』では，8Kのフル CG（はやぶさや火星探査機など）とその場にいる観客をリアルタイムで合成するアトラクションを展開。そのCGに対する音響制作を行い，エンターテインメントにおける22.2立体音響の更なる可能性を追求した。

２．番組企画

1985年４月に始まった『音の風景』は28年目に入り，12年度は新作40本を制作した。地域と季節にこだわり，さまざまな視点から題材を取り上げ，音の魅力を伝える番組とした。ナレーターは阿部陽子アナウンサー。新作と再放送を合わせ，１週あたりFMで11枠，R1で１枠，R2で22枠の放送を行った。この中でR2の16時台の放送枠では過去

の放送を再編集し『音の風景セレクション』として365本毎日違う内容を提供した。

特集番組としてネット連動を意識した番組を企画。年末特集『みんなでつくる音の風景～にっぽん鉄道紀行いまむかし』（75分）を制作，放送した（本放送12.12.29・FM／再放送12.31・R2）。『音の風景』ホームページ上に，番組特設コーナーを開設。リスナーから鉄道にまつわるエピソード，写真，録音素材を募集し，番組に先行して公開。これらをもとに番組を構成し，『音の風景』で録りためた貴重な音源を軸にトークを収録。出演は渡辺徹，向谷実，史絵.，阿部陽子アナウンサー。スタジオ収録の様子や投稿写真延べ300枚余で番組内容に則したスライドショーを作成し，放送時間に合わせてHP上でストリーミング映像として配信した。この結果，本放送日のHPアクセス数は１万1,163件と大幅に最高記録を更新した。

「音の風景ホームページ」上ではサンプルとして番組の一部を試聴できるシステムを踏襲。また，番組内容や取材風景を写真で詳しく紹介し，視聴者サービスの充実につなげた。

３．設備関連

建設計画で採択された，CD801，802，803，809のドラマMAスタジオへの，可動式高精度インターフェース（プリズムサウンド）の整備が完了し，更なる高音質での音響制作が可能となった。また，音響デザインの効果準備室の操作性統一と準備作業の効率化を目指し，耐用年数の切れたSE4と８のPCを他準備室と仕様を揃えて整備した。他の準備室SE2，４，５においては，不必要となった旧来の機材ラックを撤去して打ち合わせ空間を確保。13年度の大規模な準備室整備建設計画に先立って卓周りや，デジタルパッチ等の作業環境の改善を行った。また，D5テープ廃止に伴う，ノンリニア化については，映像編集機（プラナス）から，音響デザイン準備用に変換される映像素材について画質・容量等の検証を行い，基本フォーマットを決定した。脱テープに向けて，円滑に準備作業が移行できるよう環境整備を行った。

４．サウンドステーション・ライブラリー

「季節の地域シリーズ」の録音を12年度も継続。日本各地の音を集めるという目的の他に，「番組に即必要な音を，定点で季節ごとに録音する」という目的も兼ねて，『大河ドラマ』「八重の桜」と『連続テレビ小説』「あまちゃん」の舞台となっている福島県の会津と岩手県の久慈の定点録音を敢行した。季節ごとの地域色豊かな音を収録するとともに，旬な音を番組で即時に利用できるライブラリーの効率的運用を狙った。また，『土曜ドラマスペシャル』「負けて、勝つ」と連動して戦後の街で傷痍軍人がアコーディオン，ハーモニカで流行歌を演奏していた音楽を，当時から活動していた演奏家で再現し録音した。著作権が明快で，他の番組へも展開が可能で，且つ考証用資料としても価値のある効果音ライブラリーとなった。また，都電荒川線や零戦のエンジン（当時の物）といった特殊な乗り物や，スマートフォン用シグナルベル・メール音など，今まで不足していた効果音についても部員からの提案をもとに新規収録を行い，ライブラリーを拡充した。

５．事業計画関連

（１）ミュージックライブラリー

12年２月１日に「埋もれた音楽資産を活用」し「地方局のニュース情報番組」を支援する目的で運用を開始した「NHKミュージックライブラリー」は，１年前の登録楽曲数582曲から13年３月末現在1,976曲へと広がり，登録作曲家は31人から63人に，ユーザー登録局は10局から51局に，テーマ使用局は10局から26局に増加した。放送が終了した番組の委嘱音楽の再発掘と新たなオリジナル楽曲の制作に精力的に取り組み，質が高く使い勝手のよいライブラリーを目指し整備を進めてきた。７月には「ミュージックライブラリー推進委員会」が発足し編成局，知財展開センター，関連事業局，NHK出版，デザインセンターが部局を横断する形で，インターネットや国際展開力の向上，間接費削減など「総局課題に資する」運動を開始した。

（２）にっぽん野鳥暦

効果音考証資料「日本動物暦」を発展させた番組制作支援のためのウェブデーターベース「にっぽん野鳥暦」。このシステムの開発を３年計画でスタートさせた。初年度の12年度は，千葉県をモデルにした試作版を作成。113種類の野鳥の類別，特徴，動画，画像，関連するエピソードなどを盛り込んだ。

補完放送

Ⅰ．データ放送

2000年12月１日のBSデジタル放送の開始とともに，デジタル放送ならではの新しいサービスと

してスタートしたNHKのデータ放送は，「生活をより便利で豊かにするサービス」「緊急時に役立つサービス」を基本に放送を行っている。

03年12月１日に東京・大阪・名古屋で開始された地上波データ放送は，06年12月１日までに全国の都道府県庁所在地とその周辺で放送がスタートした。07年10月１日をもって，NHKの全放送局が独自のデータ放送を送出するようになった。

データ放送は，映像･音声による通常の番組（本線番組）と連動しない「独立型」と，本線番組と関連した内容を同時に放送する「連動型」に分けられる。さらに，長期間定時的に編成する「定時」，一定期間編成する「特集」，地震・津波発生時や気象警報発令時などに随時編成する「随時」に分類される。また，「連動型」の一形態として，リモコンを使ってアンケートやクイズに参加できる「双方向型」がある。

１．地上データ放送

デジタル総合テレビでは，データ放送を地域サービスの柱としており，地域と全国の『ニュース』『気象情報』とともに，独立型データ放送で暮らしに役立つ地域情報や生活情報を放送した。また，防災や生活に役立つ情報として『台風情報』や『大雨情報』『地震・津波情報』等を随時放送した。地方自治体や国土交通省が配信する共通フォーマットTVCMLを利用した『河川水位情報』を12年度に全ての都道府県で開始した。13年３月には『PM2.5大気汚染予測』を開始した。

また，12年５月には『金環日食ガイド』で都道府県ごとの太陽の変化情報を伝え，視聴者の関心に応えた。特集番組では，『第63回NHK紅白歌合戦』や『双方向クイズ天下統一』等で視聴者参加の双方向型データ放送を実施した。

ロンドン五輪においては，全ての競技の公式結果と途中経過を伝え，ネット接続の対応機種に対しては，ハイビジョン画質のダイジェスト動画も提供した。

〔定時番組の概要〕

（１）デジタル総合テレビジョン

○独立型

・『ニュース』（地域および全国）
　各地域の地域向けニュースと全国ニュース。

・『気象情報』
　３時間ごとの天気，週間天気，気象の現況など。

・『地域情報』
　各地域放送局が，地域情報，防災情報，生活情報等を提供する，きめ細かな地域向けサービス。

○連動型

・『大河ドラマ』『連続テレビ小説』『世界ふれあい街歩き』

○双方向型

・『あさイチ～スゴ技Q』

（２）デジタルEテレ

○独立型

・『アニメ　バクマン。』『アニメ　ファイ・ブレイン』

番組紹介のほか，視聴時間に応じてアニメマイルがたまり，データ放送独自の特典映像などを見て，パズルで遊ぶことができた。

○連動型

・『アニメ　バクマン。』『アニメ　ファイ・ブレイン』

（３）ワンセグサービス

06年４月から地上デジタル放送でワンセグサービスを開始し，08年４月からは地域向けサービスを全国の放送局で開始した。データ放送は，総合テレビでは『ニュース』『気象情報』のほか，『プロ野球』『Jリーグ』『大リーグ』などのスポーツ情報や，『大河ドラマ』などの番組関連情報を携帯電話の通信機能を生かして提供した。また，緊急時の『地震・津波情報』などを随時放送した。

教育テレビでは，一部の時間帯でワンセグ独自サービス『NHKワンセグ２』を編成し，多様な番組を放送するとともに連動型データ放送を行った。

２．BSデータ放送

BS1の独立型サービスとしては，『ニュース』『気象情報』『スポーツ情報』『円と株～経済情報』などの定時サービスのほか，防災や生活に役立つ情報として『台風情報』『大雨情報』『地震・津波情報』を随時放送した。

BSプレミアムでは，独立型サービスとして『BSプレミアム番組情報』を，また連動型サービスとして『大河ドラマ』や『連続テレビ小説』『世界ふれあい街歩き』などを放送した。また，ドラマを見るとマイルがたまり，PCの壁紙などの特典がある「ドラマイル」のサービスを開始した。

〔定時番組の概要〕

（１）BS1

○独立型

・『ニュース』（全国）
24時間いつでも見ることのできる最新の全国ニュース。

・『気象情報』
「市区町村別の天気」や「週間予報」など，日常生活や防災に役立つ気象情報。

・『スポーツ情報』
プロ野球，大相撲，Jリーグ，大リーグなどの途中経過・結果速報など。

・『円と株～経済情報』
株価と為替を中心とした経済動向の速報サービス。

（２）BSプレミアム

○独立型

・『BS番組情報』での番組紹介や，『大河ドラマ』など個別番組の情報を提供した。

○連動型

・『大河ドラマ』『連続テレビ小説』『世界ふれあい街歩き』など

Ⅱ．字幕放送

テレビ音声を文字で表示する「字幕放送」などの補完放送を実施している。

字幕放送は，07年秋に総務省が策定した「視聴覚障害者向け放送普及行政の指針」(08～17年度・以下“新指針”とする）の趣旨を踏まえ，NHK独自の「字幕拡充計画」を基に，計画的かつ段階的に拡充を図っている。新指針は，生字幕放送（生放送への字幕付与）の拡充である。公共放送の重要な役割として，バリアフリー放送＝“人にやさしい放送”の充実を図り，情報保障の推進に積極的に取り組んでいる。

12年度は，総合，Eテレ，BS1，BSプレミアムを合わせて，220番組・週223時間02分（定時番組・４月期改定）に字幕を付与した。

各波の週平均の放送時間は以下のとおり。

総合　102時間39分
（対11年度比較　＋４時間42分）
Eテレ　61時間19分
（対11年度比較　+11分）
BS1　５時間23分
（対11年度比較　+33分）
BSプレミアム　53時間41分
（対11年度比較　＋４時間03分）

完プロ（収録）番組は，定時番組以外は夏，冬の特集編成，祝日編成を中心に字幕放送を実施した。

生字幕放送は，定時番組『くらし☆解説』(総合・火～金・10:05)，『ひるブラ』（総合・月～水・12:20)，『BSコンシェルジュ』（総合・金・12:20)，『情報LIVE　ただイマ！』（総合・金・22:00)，『土曜スタジオパーク』（総合・土・14:00）を年度当初から開始した。

東日本大震災から２年関連番組では，『震災から２年　明日へコンサート』（総合・3.9)，『特集明日へ～支えあおう～東日本大震災から２年』(総合・3.10～11)，『ハートネットTV』（Eテレ・3.11)，『NHKスペシャル』（総合・3.10～11）などで生字幕放送を実施した。

スポーツ中継では，『第96回日本陸上選手権ロンドンオリンピック代表選考会』（総合・6.8～10)，『第45回日本女子オープンゴルフ選手権』（総合・9.29～30)，『第77回日本オープンゴルフ選手権』（総合・10.13～14)，『第22回日本シニアオープンゴルフ選手権』（総合・10.27～28)，『第34回皇后杯全日本女子サッカー選手権～決勝』(総合・12.24)，『第92回天皇杯全日本サッカー選手権～決勝』（総合・1.1)，『第49回全国大学ラグビー選手権～決勝』（Eテレ・1.13）で初めて生字幕放送を実施した。このほか，『ロンドンオリンピック』（総合・7.28ほか）は，日本時間７時から24時のオリンピック放送（総合）すべてに字幕を付与し，大会期間中合計で154時間13分に上った。『ロンドンパラリンピック』（総合・Eテレ・8.29ほか）でも，期間中のすべての関連番組に生字幕付与を行った。このほか，『大相撲』（６場所)，『プロ野球』(13試合)，『MLBアメリカ大リーグ』（４試合)，『Jリーグ』（７試合)，『競泳　ロンドンオリンピック代表決定戦　第88回日本水泳選手権』(総合・4.2～８)，『第12回全国障害者スポーツ大会　ぎふ清流大会～開会式』（Eテレ・10.13)，『2012 NHK杯フィギュア』（総合・11.23～25)，『第50回ラグビー日本選手権～決勝』（総合・2.24)，『第68回びわ湖毎日マラソン』（総合・3.3）などに付与した。

特集番組では，『首都圏スペシャル』（総合・７本)，『いざメジャーへ！ダルビッシュ有が切り開く新時代』（総合・4.7)，『平成24年　広島平和記念式典』(8.6)，『平成24年　長崎平和祈念式典』(8.9)，『東北発☆未来塾スペシャル』（Eテレ・8.31)，『わが心の大阪メロディー』（総合・10.30)，『きょうの料理55年　クッキングコンテ

スト2012』（Eテレ・11.4），『バリバラ・スペシャル』（Eテレ・12.14），『もうすぐ紅白　ここがみどころ　生放送スペシャル2012』（総合・12.18），『しあわせニュース2012』（総合12.31），『第63回NHK紅白歌合戦』（総合・12.31），『NHK×日テレ　60番勝負』（総合・2.2），『NHKのど自慢チャンピオン大会2013』（総合・3.2）などに付与した。

Ⅲ．その他の補完放送

このほかの補完放送には，音声多重を使った「ステレオ放送」「２か国語放送」「解説放送」がある。「解説放送」は主に視覚障害者のためのサービスである。

「２か国語放送」と「解説放送」は総合，Eテレ，BS1，BSプレミアムで実施した。